
錬金術師の魔王討伐

水晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

錬金術師の魔王討伐

【Nコード】

N1597W

【作者名】

水晶

【あらすじ】

神様に殺された俺こと岸边誠。どうやら俺は転生をして第二の人生を生きる事になり、異世界にRPGゲームの『錬金術師』の能力を持った勇者として城に召喚された設定で転生をする事になった。

注意！ 残酷な描写が有りますのでそれが苦手や嫌いな方は戻るボタンのクリックをお薦めします。 タグに最強と有りますが魔王一発で葬れるとかそんなじゃありません、最初から終盤の勇者並みに強いだけです、なので結構苦戦する描写が有ります。そう

というのがダメな方は戻るボタンのクリ（r y） 作者は小説初心者なので結構な数の矛盾が発生する場合があります、これもダメと言う方は戻るボ（r y） 最後に、作者が書く文はかなり駄文ですの
で、それでもおkと言う心が宇宙より広い方は見ていてください
な。

プロローグ

俺こと岸辺誠きしへまことは高校生活をエンジョイし、通っている高校の帰り道でトラックに跳ねられて即死。その後神様（笑）に殺されて謎の真っ白な空間に呼び出された……。

「いや〜、ホントに悪かったとは思ってるよ？ だから君に、転生してもらってさ、第二の人生を満喫してもらおうって考えたんだよ」

掻い摘んで説明すると、神様が俺の寿命の線を間違えて切っちゃまったらしい。それで変な所に呼び出されて今の状態ってわけだ。

「転生？ …… ああ、あれか」

よくネット小説を読み漁っていたのでそのへんの事は大体理解できた。

「勿論！ 転生する場所とかは全部君が決めて良い、君にはその権利があるんだからね」

「へえ〜、そうだな……じゃ、世界観はこんな感じで頼む、その世界は蘇った魔王が世界を我がモノにしようとしていた、一方人間達は勇者を召喚し、この世界を救ってもらおうと勇者召喚用の魔法陣を展開する、そこに俺が魔法陣の中に入って勇者としてその世界へ召喚された」

「ん〜、分かったよ、じゃあ他に要望とかある？」

「俺のゲームのキャラクターのスペックをそのまま使いたい、ああ、それと容姿はこのままで 良い」

親から授かったこの容姿を変えようとは、俺は思わないな。しかし何故か彼女はできなかった、そこそこ顔は良い方だとは思うんだが。。。。。

「ん、取り合えず了解、あ、ちょっとスペック弄らせてもらったよ？ 私達って結構暇なんだよ、だから君がその世界で何か面白い事してくれると、うれしくな」

なんだ？ 神様ってのはゆるキャラもいるのか？ 普通にクラスメートと話してる気分なんだが、もっとこう。。。。神々しいと言うか何というか、そんなオーラが全くと言って言いほど感じられない。

「まあ善処する、てゆうかスペック弄ったのか？ どれ位だ？」

「うんとね、取り合えず倍にしといたよ」

マジでか、それは俺に無双してくださいと言っている様なモノじゃないか、俺的にはいいけど、よし、ならば無双だ。

「そうか、じゃその世界に早く送ってくれ」

「ん、その前にコレ持って行って」

ヴォン、何もなければの空中から何か、ブラックホールみたいな空間が出てきた、それに神様は手を突っ込んで中から一丁の拳銃と一着の白衣を取り出した。

「これは銃は君の魔力を高めてくれたり、弾は君のMPがある限り自動で装填される、勿論攻撃力だって 凄いよ、それと名前は魔銃だよ、次は白衣だね、これは装備すると魔力が高まったり消費MPが三分の一 に減る優れたものだよ！」

説明しながら俺に渡してくる、渡された白衣を着ると如何にも錬金術師と言う感じがする、次に渡された銃だが……………。

「^{ジョブ}職業が錬金術師だから銃は使えないんだが……………」

「ふえ？ ゲームの中じゃ無いんだから使えるんじゃない？」

「ですよー、俺としては杖何か欲しかったな……………」

「でも俺銃何て……………」

「使えるでしょ？ 神様に嘘はつけません！ 君本物の銃を射つた事あるでしょ？」

実は生前に海外旅行に行ったときに両親のコネを使って、マガジン一つ分撃たせてもらった、ちなみにデザートイーグルな。あの時は興奮が止まらなかったぜ……………。

「スンマセン」

神様スゲー、ただのゆるキャラマスコットだと思ってたけどやっぱり神様だな……………。

「まあ、君の魔法とその銃さえ有れば、魔王なんて簡単に倒せる

よ

「このスペックだもんな」

ちなみにゲームのキャラのLVがMAX、そしてステータスの倍加、正直負ける気がしねえ、だけど錬金術師は近接戦闘に弱いから、魔王が剣とか振り回して来たりしたら負けるな、でも、そうなる前に魔法で叩き潰せば大丈夫だよな。

「そんじゃ、異世界に送るよ」

「つとその前に、神様アンタ可愛いな、俺結構好きだぜ？ アンタみたいな神様は」

「ふえ！？ か、可愛い！？」

何だ？ フラグ建てたか？

「早く送つてくれないか？」

「え！ あ、うん」

そう言った後、何か分からん言葉で呟いて、俺の足元に光り輝く魔方陣が現れた、何て言うんだっけ？ テンプレ？

「そんじゃな、神様」

「うん、バイバイ」

段々と俺の意識が薄れていく中、最後に見えたのは、若干顔を赤

くしながら手を振る神様の姿だった。やべえ無茶苦茶可愛いんだけど……これは萌える。

俺が異世界へと転生していった後、一人の神様は……。

「あれって告白なのかな？ でもあの子顔は良い方だし……
はっ!？」

何を考えているんだろう私は!？ ……でもちょっとか
つこよかったな……。」

そんな事をブツブツと言っていたとか……。

プロローグ（後書き）

どうも、水晶です。

この度この小説を始めさせて頂きます、なおこの作品はチートな
どが含まれますのでそういったものが嫌な方は戻るをクリック。

それとこの小説は駄文なのでお気を付けて・・・・・・・・前書きに
書けば良かったかな・・・・・・・・。

では、次回の後書きでお会いしましょう。

第一話 異世界の城（前書き）

誤字脱字があれば報告お願いします。

第一話 異世界の城

「勇者様！ 魔王を倒してください！」

随分と唐突だな、挨拶の一言も無しかい。

さて、あの後神様に異世界に転生する形でここに送られた訳だが、いきなり目の前に可愛い巫女服を着た女の子とご対面とは……
……許せるっ！

「俺は確かに勇者だ、魔王だつて倒してやんよ、だがな、まずはこの世界について知りたい、そこで だ、巫女さんよちーつこの世界について話しちゃくれないかい？」

まあ、正直どうでも良いんだけどね？

「はい！ 最初にこの世界はグランアースと言います、次に今私達が居るのはフローリック大陸のフィンシア王国です」

「へえ、それじゃ次は魔王について教えてくれ」

巫女さんは超絶天使笑顔つまりカワイイで魔王について説明してくれた、はあ〜
お持ち帰りしてえ〜。

「魔王は何千年も昔から居て、魔王が現れるその度に勇者が魔王を倒して平和が訪れました、しかし、最初はまだ良かったのですが……その内魔王が力を増す様になってきて、もうこの世界で勇者を募っても返り討ちにあつて、何千人の魔法使い達が封印するまで勇者は倒され続けましたー」

ふーん、最初から勇者召喚してた訳じゃないのか、てつきり最初から勇者に任せっぱなし

だったのかと思ってたよ。

「ーそして、人々は異世界から勇者を召喚し魔王を倒すことにしました、この世界の勇者ではなく別の世界の勇者なら、魔王を倒してくれるのでは？」と、そう考えた人々は勇者を召喚する魔法陣を創りました、そして……」

「俺が召喚された……」

「はい、異世界から召喚した勇者達はどれも光属性を持つ逸材でした、魔王は光属性に弱いため、で勇者を召喚し続けてからまだ一回も、負けておりません、どの勇者も普通は何年も掛かる魔法をたった一ヶ月の修業期間の中で習得していましたー」

これはもうチートの域だな、勇者は。

「ーしかし、そんな勇者の力に慢心してしまった人間は……
・武器を捨て、気ままに暮らすようになったのです、そこに再び蘇った魔王が魔物の軍勢を率いて魔王の復活を世に知らしめると同時に幾つかの王国や村を滅ぼしていきました、そこで、事態を重く見た人々は冒険者ギルドを創り、魔物に対抗する様になりました、しかし魔物は数を増して行くばかり、恐らく魔王が蘇ったのが原因だと考えたフィンシア王国の王、グリード・フィンシア王は勇者を召喚し、魔王を倒す事にしました」

成程、ならその期待に応えるため、魔王を必ずや八つ裂きにしてやろう。

「さて、説明が終わった所でフィンシア王に会いに行きましょう」

「あ、ちょっと待ってくれ」

俺の手を引っ張って行こうとする巫女さんを呼び止める、ただ少しやることを思い出したのでな、まず はそれをやってから行こう。

――ステータスON――

頭の中でそう念じると目の前に青色のステータス画面が現れた。職業の欄には“錬金術師”そしてその一つ上には“LV200”その他には最早チートの域に達したステータスがズラリと並んでいる、そのステータスを一一つじっくりと見ていると。

「勇者様？ 何をしているんですか？」

「ん？ ああ、何でもない、少し考え事をしていてな……さ、行こう」

――ステータスOFF――

どうやらステータスは俺以外には見られないみたいだな。さて、一応錬金術師の説明をしておこう、錬金術師はデメリットはあるがその代わりメリットもある。まずデメリットから、錬金術師は必要な経験値が他の職業より高い、これが原因で錬金術師に転職する人が減った、まあ、普通はそうだろうな。次に転職出来る確率だろう、錬金術師は不定期に所々を点々と移動するNPKに接触して、転職クエストを受ける必要があるが、内容はポーションを500個造って専用の武器でボスモンスターを連続で狩る、終わったとしても次

はNPKを探し出さないといけないという最早鬼畜なこの内容をクリア出来たものが錬金術師へと転職できる。

次にメリット、回復や支援に攻撃、どんな魔法だって習得できる、どの魔法も効果が大きい、錬金術師のみが召喚できるホムンクルスなど、PTでしか倒せないモンスターも倒すことが出来るほど錬金術師は強い。そして、何とんでもMPの量だろう、上級魔法だって連発することが出来る程だ、今は白衣の効果で消費MPが三分之一になっているのでかなりの数の上級魔法が連発出来る。

「勇者様、私に着いてきてください」

「オーケー、案内は任せた」

俺は巫女さんに案内され、フィンシア王の居る所までついて行った。

「ひえ〜、随分と城の装飾に金が掛かっているみたいだな」

長い廊下に飾られている騎士の鎧や、壁に掛かっている名画まで……どれも金が掛かっている。としか思えない、さっきの兵士の鎧何て銀ピカだったぞ？

「はい、フィンシア王は光っている物が好きな様ですから……」

そう言っている巫女さんの顔は少し曇っていた、フィンシア王に何かされたのだろうか？……もし、もし仮にだがメイドさん達に八つ当たりする様な、ゴミみたいな性格のダメ人間だったら俺は、この城から巫女さんを連れて、どっか行って遊び尽くして、最終的には魔王を討伐なんか最後の最後に後回しだこの野郎！ やりたい事やるまで魔王討伐なんてしねーぞ！

「あ、ここです」

考え事をしていたら何時の間にか着いていたようだ、さて、いよいよフィンシア王とご対面な訳だが、嫌な野郎だったらトコトン弄り回してやる……ふひひ。

「フィンシア王！ 勇者様をお連れして参りました！」

俺から変な気を感じたようで少し顔が少々引きつってたが、直ぐに元に戻してフィンシア王に扉越よこから呼びかけた。

「うむ、入れ」

……喋り方が最早王族だよ、こりゃ期待はしないで置こう……。

「失礼します……………」

巫女さんがゆっくりと扉を開ける、その先には右と左で一列ずつ並んでいる兵士達、銀に光っているその鎧はキラリと眩く光を反射している。俺は顔を上げて玉座にふてふてしく座っているフィンシア王を少し、ほんの少しだけ、殺気を込めた眼で睨んだ、それは誰にも気づかれる事は無かった……………。

「フィンシア王、こちらが今回の勇者様です」

「ふむ、勇者殿、名を聞かせてはくれまいか？」

玉座の前に片膝を付き、フィンシア王の問いに答えた。

「私は岸辺きしへ 誠まこと、いえ、マコト・キシベの方がよろしいでしょうか？日本人で学 生をやっています、年は十八歳、先程この世界に召喚されました」

「そうか、我の事はシンシラから聞いているだろう？ ならば早速主に勇者としてこの城で一ヶ月修行 してもらおう、後で勇者殿には武器を選んで頂く」

シンシラ、というのは、この巫女さんの名前だろうか？

「承知しました、では私はこれにて……………」

立ち上がった瞬間睨みつけておく、それもまた、誰も気づかないまま……………。扉が静かに閉まる、巫女さん、もといシンシラさんに俺の部屋まで案内を頼もうとした時、シンシラさんがこちら

をジッと見つめてから、「こう言った。

「何で、フィンシア王をあんなに睨むんですか？」

気づかれてたか……まあいいや、どっち道シンシラさんには話しておこうと思ってたからな、丁度ちよつと良いから今の内に話をしておこう……。。

「……………理由は簡単だ、ただ気に入らなかった、それだけだ」

俺とシンシラさんしか居ない廊下、俺は説明する代わりに俺の部屋へ案内してくれ、と言う条件で説明をしている。

「……………それだけじゃ無いんでしょう？」

「ハッ……………そうだよ、俺は一瞬アイツと目があっただけで分かった、コイツは人を道具扱いますよ、腐った人間だっ

てな」

巡回中の兵士に聞かれたら即刻、死刑にされそうな事を平気で言っているが、兵士がいる様子は無いので大丈夫だろう。

「そうですね……」

シンシラさんはそれ以上、追求はしてこなかった。

お互い沈黙し合っていた、この沈黙に耐え切れなくなった俺はシンシラさんから何か聞こうとして言い出そうとした時、シンシラさんが口を開けて言った。

「ここが勇者様の部屋になります」

俺は扉を開けて中を確認する、一人で生活するには十分な広さだな、お、ベット発見！

「勇者様……」

「マコト・キシベ、マコトで良いぞ」

「……はい、マコト……様」

様は別に要らないんだけどな、いいか別に。

「では、私の事はシンシラ・リース、シンシラと呼んでください」

「分かった、シンシラ、これでいいか？」

するとシンシラは満足したようで笑顔で喜んでいた、てか笑顔マジパネエ。

「今日はもう寝る、テキトーに起こしてくれ」

「はい！ マコト様！」

タッタッタとシンシラは小走りで扉へと向かっていった、あ、転んだ。

「いてて……はっ!? しっ、失礼します！」

慌てて立ち上がり扉を閉める、ふむ、白か、いいもん見れたなあ。ニヤニヤしながらベットへ飛び込む、ベットは思っていたよりも柔らかく、弾力が有りポヨンポヨンと弾む、さて、寝るか……。明日武器がどうかって言ってたしな。考えるのは後にして、今は寝ることにした、明日は城の中を散策できると思うしな、まあ、もし迷ったらそれはそれでいいか……。偶然部屋くつげんを見つけたかもしれないしな。俺は枕をして、首まで薄い布団をかけて深い眠りについた……。

「さて、行きますかね？」

先程目^{なまきほじ}が覚めた俺は胸に手紙が置いてあるのを見て、読んでみるとそれはあの神様からの手紙らしく、一つプレゼントを忘れたので送るらしい、手紙は読み終わった時に消え、その時プレゼントが届くらしい。そして読み終わって届いたのはホルスターだった、それを腰につけて魔銃を入れる、恐らく前から見れば白衣からチラついているだろう、別に白衣のポケットに入れれば良かったのだが何となく、いや半分くらいノリでやった。

白衣のシワを整えて部屋を出る、さて、さっきシンシラから聞いた話では武器庫に行けば良い、と言われたが聞こうにもそのまま何処かへ行ってしまったので、探すとしても正直なトコ面倒だ。

「武器庫、ね………気楽に探すかな」

取り合えず俺は城を一通り巡ってみる事にした、そうすれば城の中も大体は把握できるし運が良ければそのまま武器庫に着く可能性がある。俺はそう考え、廊下を歩いていった………。

「着いちゃったよ！」

あつれー？ 案外簡単に着きましたが？ 武器庫の前で立っているのも何なので一応着いた事だし、入ってみる事にする、扉は所々錆びれていて古めかしい様子が伝わってくる。取っ手を掴んで扉を開ける、武器庫の中は意外と明かった、奥にはシンシラが待っていた。

「よう、シンシラ」

「あ、マコト様、お待ちしていました」

ペコリと頭を下げるシンシラ。

「確か武器を選ぶんだったよな？ 早く終わらせようぜ」

「はい、マコト様にピッタリな武器が見つかるといいですね！」

そうして俺は武器を選び始めるが、武器庫の名は伊達じゃないな、大量に武器が置かれている、この中から探すのか？ はあ、チマチマやっていくか……。見渡す限り武器、武器の大半は錆びてはおらず未だに自らの輝きを放っている、どうやら手入れはされているようだ。。。。。

「よっくらせつと。。。。。」

まずは邪魔な物を退かす、こう言うのって大抵は奥とかにレアモンが眠ってるようなモンだ、俺はそいつを頂こうかね……………。

「……………ん？ コイツは……………」

大剣の裏に隠れていた武器を発見する、それに手を伸ばして掴み取る。それは剣だった、それも禍々しいまがまが気配を感じさせる、鞘は黒い、いやドス黒かった、刀身を鞘から抜いてみると……………今度は剣は紅かった、紅蓮の炎の様に……………。

「へえ……………気に入ったぜ、コイツにする」

刀身を鞘の中に収めて、シンシラに言った

「黒い剣？ マコト様を選んだのならそれでよろしいのですが……………」

この剣なら仕方ねえか、鞘は黒いし剣は紅い、これが呪いの武器でも仕方ないよな……………まっ、呪いが掛かったところで協会にでも行って呪いを解いてもらえば済む話だ。

「俺は一旦部屋に戻るが……………何かしなくちゃならない事はあるか？」

「マコト様はお昼過ぎからフィンシア兵団の隊長と模擬試合を行います、その後は特に予定は無いです ね、今の所はですけどね……………」

さて、一旦部屋に戻るのは事実だが、俺にはやるこゝろがあるんだな、見つからない様にしないと、バレたら勇者であることも何されるか分からねえからな……。

「そうか……。」

俺は一言だけ返してそそくさと早足気味に武器庫から出た、俺の背中をシンシラはただ無言で背中を見つめてた何かを訴えるような視線で、その視線に俺は気がつかなかつた。

第二話 奴隷少女と模擬試合（前書き）

9 / 17 少女を誠の部屋に入れたのに第四話で何故か地下に居ると言う矛盾を訂正しております。読者様を混乱させてしまい申し訳ありませんでした。

第二話 奴隸少女と模擬試合

「これか……………」

部屋に戻った後、一旦シンシラに城を探索してくると言っておいた、あの後シンシラが案内をしようとしたが、俺は断って一人で行くと言った。そして目的の部屋にあった物を見つけた、それは……………

「随分とデカイ金庫だな……………」

そう、ここは宝物庫、俺はこの金庫が目当てでここまで来た、金庫の鍵は既に見張りの兵士を気絶させて奪っておいた、後は開けて中身を根こそぎ奪い取るだけだな、ちなみに兵士は気絶させた後デキトーに隣の部屋に放り込んでやった。そして鍵を金庫の鍵穴に差し込み、捻る。

「よし、全部盗るか……………」

金貨の山に手を入れて掴むだけでごっそり取れる、そして頭の中——収納——と念じると、掴んでいた金貨は消えた、今のはアイテムウインドウに念じて金貨を移動させただけ、これを使えばどんな物でもアイテムウインドウに収納できる。金庫の中の金貨を根こそぎ盗った後、鍵をしてその辺に無造作なつくに散らばっている宝石をちよこつと頂いておいた、用が済むと隣の部屋に放り込んでいた兵士の懐に鍵を戻す。

「次行くか……………」

ここに来る前に発見した地下へと繋がる通路に向かった、どうもそこには何か有るような、そんな気がした、ほぼ感だけどな。地下へと繋がる通路の前には兵士が一人見張っていた、さて、どうするか……。少し考えたところ、いい案が見つかった、それを試す事にする。俺は兵士に近づいて話しかける、これが失敗すればかなり怪しまれるだろうな……。

「フィンシア王のご命令でこの先へ行く事になった、通してくれるか？」

「しかし……連絡が回って来ていないのだが……？」

「急なご命令でな……連絡が回っていないのも仕方ないだろう」

「そうか……まあいい、通れ」

成功、さつさと済ませますかね……多少時間が無いのでな。地下への通路の突き当たりで階段を見つけた、覗いてみると結構長そうだ、薄暗いから足音には気を付けないとな、さて、地下には何が有るんだろうか……？階段を降り終わると分厚そうな扉が有った、ここまですが一本道、だとするとこの中に何か重要な物が有るのかもしれないな、他に部屋は無かったし……いや、隠し部屋なんか有ったりしてな。そつと、扉の取っ手に手をかける、そして捻ってみると……開いた？ てっきり鍵が掛かっていて開かないんだろうなって思ってたんだが……。

重要な物なら警備が厳重な筈なんだけどな、普通は、だとするとこの中は何もなかったり、別にそんなに重要じゃない書類か何かか

？だったなら、期待して損したな．．．．．チラツと見てめばしい物が無さそうだったら帰るか。そうして分厚い扉を開けたその先には．．．．．一人の少女が居た。

「．．．．．はあ？」

少女は白いワンピースを着ていて腰まで届いている金髪、容姿は美少女だが．．．．．目は虚ろだ、まさか奴隷か？ 会った時から嫌な感じはしていたけど．．．．．フィンシア王の野郎．．．．．やっぱり俺が想像していた通りだったな、よし！ 今日から心の中ではゲス王と呼んでやる。

「心配するな、何もしやしないさ．．．．．それより何でアンタがこんな所の居るのか、よかつたら聞かせてくれないか？」

「．．．．．はい」

少女はまだ少し怯えているがゆっくりと、答えてくれた。

「私は故郷の村で生活していましたが、ですが盗賊が攻めて来て．．．．．村の人は全員殺されて私だけが生き残りしましたが、その後捕まってしまう．．．．．奴隷として売られました」

「それでこの城の王がアンタを買ったって訳か．．．．．」

「はい．．．．．」

どの世界も似たようなモンだよな．．．．．腐った人間が存在しているからこんな事になっちまう、
そう言った人間が消えない限り、永遠と続く．．．．．。

「なあ、ここを出たいか？」

俺は気が付けばそんな事を言っていた、今の俺には何のメリットも無いのに、見知らぬ少女に手を差し伸べていた、何してんだろうな俺って……。

「出たい……あんな奴の命令なんか聞きたくない！」

「そうか……俺は昨日この世界に召喚された勇者だ、だが今夜、ここを出るー」

ー着いて来るか？ 世界を見せてやるぞ……ー

少女は少し考える素振りをした後、俺の手を取った……。

「俺はこれから用事がつてな……恐らく夜まではここに来れない、ここを出るのはそれからだ」

「はい……分かりました」

少女は頷いた。

「大丈夫だって、嘘じゃないさ」

その言葉に小さく頷いた少女。

俺は少女の頭を撫でる、恥ずかしそうに少女が顔を赤らめる、そしてしばらく撫でた後、俺は少女に手を振った、それに対し少女は手を振り返してきた、俺は少し気恥しくなり早足をして地下から出

た。

地下から出た後、またしても場所が分からないので城を探索していた。

「……………最早ご都合主義としか言えねえな」

俺は気が付けば目的地の大広間にやって来ていた、しかも、よおしくよおしく見てみればゲス王がいるじゃねえか、まあ、俺に奴隷を発見されたなんて夢にも思っていないだろうし……………もし仮にだが俺が奴隷を発見していたことを何らかの形で知っていたとしても堂々とこうして俺の前にノコノコと姿を表すハズがねえし……………

・・・正直、兵士がこの場に居なければ散々罵倒してやりたいトコだが、そんな事を言ったら俺の首がぶった切られるので止めておく。

「遅れて申し訳ない、フィンシア王、確か模擬試合でしたな・・・」

「気にするでない、これから勇者殿にはこの城一番の力量を持つ兵士と闘ってもらう、先程武器庫にて

武器を選んできたハズじゃ、それを武器に闘うのじゃ」

すると両脇に集まっていた兵士の山から、ゴツイ鎧を装備してガチャガチャと音を立てながら此方へゆつくりと歩いてきた兵士が一人・・・。

「初めまして勇者殿、私はフィンシア城兵団隊長クリア・リ克蘭です、以後、よろしく」

んー、赤いロングヘアで背も高いし、そして何より胸がおおくゲフンゲフン！ 何でも無い。

俺は差し出された手を握り返した、まあ、悪い人では無さそうだ・・・。と思うてた人が実はトンデモない悪人だったり・・・。って言うのは良く有ることだ。

「この人と戦えば良いんですね？ フィンシア王？」

「うむ、両者とも全力で闘うのだぞ？」

チツ・・・俺はその上から目線な態度がスゲエ気に入らないんだがな、勿論奴隷の事もだけどな・・・。

「マコト様！ 頑張ってください！」

シンシラ、お前居たのか……スマン、気付かなかった……いや、だって何も言わないからさ……。俺は腰の左右に魔銃とあの剣……。仮に魔剣と命名しよう、魔剣と魔銃……。何か揃ったな……。っと、つまり俺は近距離と遠距離の両方が出来る様になったんだ、まあ、普段はどっちか一つだけ使うけどな、ピンチの時は両方使う。リクランさんが腰の剣を抜いたので俺も同じく剣を鞘から抜く、するとリクランさんが、いやこの場にいるシンシラ以外の人間が驚愕した……。

「ゆ、勇者殿、その剣を何処で……？」

リクランさんが驚いた表情で聞いてきた、俺は素直に「この城の武器庫に有ったから持ってきた」と、するとまたもや驚愕きょうがくの顔をした。

「ん？ これって重要な物なのか？」

「重要も何も……。それは千年前の魔王が使ったと言う魔剣なのだが……。いや、それよ。りも何故この城の武器庫にそんな物が……？」

魔王の魔剣かよ……。どうりでこんな色をしているわけだ……。

「まあ、この話はまた後でしておきましょう……。それよ。りも、早く始めましょうよ。」

少しだけリクランさんに殺気をぶつける、その殺気でリクランさんも漸く闘う気になったようだ、この世界での初めての模擬試合とは言え戦闘だ、多少なりともテンションが上がってきたぜ。

「そんじゃ、先手は俺でいいよな………?」

「ああ………来い………!」

思い切り床を蹴り、リクランさんに突撃する。

「ふん!」

魔剣を“弱め”に振るう、それをリクランさんは寸前でガードする、剣と剣の摩擦によって火花が散り、その少量が周りに飛び散る。

「ぐッ!」

リクランさんはガードするもLVMAXでステータス倍の補正が掛かっているが、幾ら魔法使い系の職業だとしても攻撃力は馬鹿にはならない、その攻撃を受けて流石にノーダメージとはいかないようだ。

「はッ! よッ! おらあッ!」

一旦バックステップをして体勢を立て直し、大股で踏み込み三連続の攻撃を浴びせかける。

「甘いッ!」

「なッ!?」

しかし俺は三連撃を全てガードされた、そしてお返しとばかりに剣を振るってくる、こちらも深手は負いたくないので隙を作るために一回攻撃を相殺する。相殺する事で隙が出来た瞬間にバックステップで距離を取る。全く………人生初の闘いで使ったこと無い剣を使ったんだが………まさか………ゲームのキャラクターの動きを真似しただけでここまで出来るとはな………。

「流石勇者殿！ 召喚された時から既に勇者としての力を覚醒させていたのですか！」

「まあそう言うことだ！ だからさっさと倒されてくれねえかねえ!?」

再度、お互いの剣がぶつかり合う。

「それは困りますなあ！ こちらにも名誉と言うものがあります！」

「勇者に倒されて逆に光栄だとは思えないのかい!?!」

お互いの力はほぼ互角、どうやらさっきまでの俺と同じで手加減していた様だ。

「それは魅力的ですが自分にもプライドと言うものがあります！」

「おいおい！ さっきの名誉は何処へ行ったんだい!?!」

リクライさんがいきなり力を弱めた、力を込めていた俺は突然の事に体制を崩してしまふ。

「つと！」

転ぶ寸前で床に剣を突き刺して身体を支える、その瞬間何時の間にか俺の後ろに回っていたリクライさんが剣を振るってくる。俺は瞬時に剣を抜いて反撃に移る。

「後ろからとは卑怯だなアンタも！」

「も、と言う事は他に誰かいるのかい!？」

「俺だよ！ ファイヤー!!」

俺は卑怯にも魔法を発動させる、正直この世界で発動できるか不安だったが成功したから良いとしよう。発動した魔法は俺の高い魔力によって、たとえ初級魔法でも上級魔法へと跳ね上がる、それすなわち、今発動した魔法は初級魔法は上級魔法並みの威力になっている。

「ぐツ!？」

当たり一带に炎が舞い上がる、ちなみに他の兵士は慣れて観戦しているから問題無し、フィンシア王も

階段の上の玉座に座っているのでもムカつくことに問題は無い。一本の火柱の様な威力のファイヤーはその炎でリクランさんを包み込む、恐らく無傷では無いだろう、初級魔法とはいえ俺の魔力では上級魔法並だ、倒れていても何ら可笑しくはない。

「……………終わったか？」

何も反応が無い事に勝利を確信した時だった……………。

「終わった？ いや……………始まったんだよ……………」

燃え上がる炎の中から“無傷の状態”で姿を現したのは……………。

「久しぶりだよ……………全力で“戦う”のは……………」

第二話 奴隸少女と模擬試合（後書き）

誤字脱字などがありましたら報告よろしくです。

第三話 模擬試合だったハズの殺し合い（前書き）

今回は早く投稿できたと思います・・・・・・・・多分。

第三話 模擬試合だったハズの殺し合い

「勇者殿、これから先は手加減が効かぬため勇者殿も全力で来てください」

「へえ………漸く本気を出したって訳かい………面白じゃねえか」

口ではそう言っているが内心はビクビクしてる、俺も全力で死闘を演じてやりたいが………召喚されてから約一日で魔法は使えるわ城の中で最強の兵士と五角に戦って本気を出させる、これだけの事があれば、誰だって怪しまずにはいられないだろう。

「しかし、戦うには少々この炎は邪魔ですな………レイン」

リクライさんが小さな声で何か呟いたかと思えば、ゴウゴウと音を立てて燃え盛る巨大な炎の頭上から少し強めの雨が降り注いだ。しかし、巨大な炎は雨を蒸発させ依然として燃え続けている、てゆーか白衣がビショビショだよコンチクショウめ。

「………やはりこれ位では消化できませんか………ならば、ウォーターボム！」

リクライさんは両手を燃え盛る炎に突き出し、魔法を唱えた、名前からして水属性の魔法だろう。両手から水球が現れ、炎に向かって真っ直ぐ発射された。

「ん………？ アレは拡散するのか………」

発射された水球は炎に当たる寸前で止まり、空中へ散り散りに拡散した。空中に留まっている小さな水球達は未だに効果が続いて、弱めの雨を降らせ続けている、その雨が水球に当って吸収されている、当然巨大になると吸収する範囲の広がる。

「……………そろそろでしょうか」

リクライさんがそう言うと言指をパチンと鳴らした、すると空中で雨を吸収していた水球達が一斉に破裂した、それは威力は申し分なかった。大量の水を浴びた炎は水を蒸発させる事虚しく、大量の水によって消化されてしまった。

「さて、これで戦えますね……………」

「アンタバトルジャンキー戦闘狂か？ まあいいや、早く終わらせようぜ……………
……………」

再び両者が剣を構える、直後、当たり一帯を静寂せいじやくが支配する。暫しの静寂、始めに動いたのは静寂に耐え切れなかったリクライさんだった。

「はッ！ やッ！ せいッ！」

「うおッ!？」

剣の間合いに入った瞬間にリクライさんが三連続の攻撃を仕掛けてくる、しかし先程とは威力が段違いだ、こっちも本気を出さないと切られる……………!

「フラッシュ！」

眩^{まはゆ}い光がリクライさんの視界を奪う。

「くッ！ 目潰しか！」

「へへッ、悪いな、こつちも負けるわけにはいかないんでねえ・・・
・・・アイス・スピア！」

目潰し状態で視界が見えないリクライさんに氷の槍を放つ。

「っ！ らあッ！」

前方から気配を感じたのかアイス・スピアを剣で弾き落とした。

「後ろがガラ空きだぜ？」

「なッ!？」

アイス・スピアを弾き落としているスキにリクライさんの背後に回り込んで、卑怯ではあるが後ろから討ち取らせてもらうぜ！

「負けられん！ インパクトブレイク！」

「ぐっはー！」

驚くべきスピードでこちらを向いて、剣を振りかぶっているモーションの俺は近距離から魔法をぶち当てられた、かなりの威力で一気に壁まで吹き飛び、叩きつけられた。

「ぐあッ・・・・・・・・・・！ はあ・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・・・」

――ステータスON――

俺にしか見えないウィンドウを開いてHPを確認する、するとHPはさっきの魔法で三分の一にまで減っていた、魔法使い系の職業はHPと防御力が極端に少ないから攻撃を受けると戦士系の職業よりHPの速い、代わりにMPがこれでもかと言うほど多いのだが……。

――ステータスOFF――

「近距離から……スキルを当てられるとはな……ぐッ」

魔法とは違うスキルはLVUPする事によってSPと呼ばれるポイントが増え、それをスキルウィンドウでそれぞれのスキルにそのSPを振り分ける事によってスキルを取得出来る。別な方法としてスキルブックと呼ばれる本を読む事で覚えたり、一定の条件が揃うと習得できたり……他にもあるが今はそんな悠長に説明してる場合じゃないな。

「よ……っと、ヒール！」

衝撃で多少のひびが入った壁に手を付きながら立ち上がり、初級回復魔法を唱えてHPを回復する、さてと！こっちも本気でやらないと恐らく死ぬので、これからは周囲がたった数日経っただけなのに、何でこんなに強いんだ？的な視線でジロジロ見られようが何だろうがフルパワーで戦つてやるうじやねえか！！覚悟しろよ……リクライさんよ！！

「お返しだ！ アイスマシンガン！！」

魔法を唱える、突き出した両手からは拳程こぶしの大きさの氷が回転しながらもの凄いスピードでリクライさんへ発射されて行く。

「くツ！ ぐあツ！」

リクライさんが一度発射された氷が命中する、すると一瞬だけ動きが止まった所を再度、他の氷が命中する。

「っはあ！ 次はコイツだ！ ドラゴンスプラッシュー！！」

何度か命中させて態勢たいせいを崩し、その瞬間に魔法を叩き込む。リクライさんの真上に魔方陣が現れ、態勢を立て直したリクライさんが何処から魔法が来るのか視線を巡らしている時、魔方陣から竜の形をした水流が頭上から降り注ぐ。

「そうら追加だ！ サンダースパーク！！」

竜の形の水流に電撃が追加され、更に威力が増して標的に轟音を響かせながら襲いかかるその様子は、まさに竜その物。そして、衝撃で水が飛び散り、誰もが驚愕の顔をして一点を見つめていた、その先には……………。

「……………ハア……………ハア……………」

「オイオイ……………あれを受けてまだ立ってるのかよ……………」

猛攻を耐えきり、尚且つその二本の足で地に未だに立ち続けている

る“戦士”が一人……………。

「リーダメージ……………」

ゆっくり、ゆっくりと、傷だらけの両手をコチラに向ける……………。

「……………リバーサー」

「っ！？ ああああああああああ！！！！？」

突如として俺の身体の節々が悲鳴をあげた、激しい痛みが身体を駆け巡る。

「あ……………ああ……………」

床に倒れ込み、激痛に悶えていると何処からともなく暗黒の闇が

現れ、俺の意識は戦い尽くした戦士が

倒れ込む瞬間を目に捉えた後、ブラックアウトしていった……………。

「ハッ!? 知らない天井…………いや、一回見たことあるな」

つまりネタはさておき…………あの後どうなったんだ？
確か魔法で撃破した様に見えるけど実は耐えきってて、スキル？
魔法？ のどつちかをぶち込まれて…………痛みで意識がロゲアウト

しちまって…………最後に見えたのが倒れ込むリクライさん…………
…………だったかな？

「イテ…………何だ魔剣か…………そういやあ魔銃は…………
…………有った」

寝返りを打とうとしたら今や相棒となった剣の鞘が顔にコツンとぶつかる、白衣の内側に入っているホルスターの中に魔銃が仕舞われている事を確認する。ベットからムクリと起き上がり窓の外を見ると月が出ている…………と云うことは今は夜か？ だったらそろそろあの少女の所へ行こうか。

「つと、何か置き手紙置いておこうか…………お、丁度良い紙とペンが…………」

部屋に配置されている机の上に紙とペンを発見し、取り合えず日本語で書いておく。

「…………よし、これで良いだろ」

手紙を書き終わり机の上に置いておく、多分シンシラさんが見つけてくれるだろう……。そうして俺は装備を確認し、静かに扉を開けて部屋を出て少女が居る地下へと向かっていった。

「監視兵が一人も居ない……。これは都合が良いのか・
。。。。？」

不思議な事に居るはずの監視兵が消えており、地下は無人だった。不思議に思い畏の可能性も考えたが勇者である俺に、畏を仕掛ける理由が見当たらないのでその思考を頭の片隅へと追いやった。

「おい、約束通り来たぞ」

錆び付いて開けるときに少し力を込めなければならぬこの扉に、イラつきながらも扉を開け放つ。

「あつ……。来てくれたんですね」

「やあ、そんじゃあ早速ここを……」

ここを出よう、と言おうとした時だった……背後からガチャガチャと金属製の音を立て、何者かがこちらへと近づいてくる、まさか監視兵が戻ってきたのか？ いや、そんな事はいいい、それより気づかれる前に倒すのがベストか……だがどうやって倒す？ ここは一本道だ、無闇に戦って援軍でも呼ばれたら魔法を使っつて倒すしか無い、しかしそれだと音で他の兵士達に気が付かれる。

俺は鞘から無言で魔剣を抜く、少女は何をするのか分からないように不安の顔をしている。俺は少女の頭に手を置き撫でる、少しでも不安を取り除くためだ、決して下心などは無い！ ましてやイチヤイチヤしようなどとは微塵も！ これっぽちも思っていない！

「兵士がこっちに向かってくる、俺はそいつを倒すから……
・大丈夫だって、やられたりはしないさ……約束する」

少女はコクリと頷く、それを見て少女の頭を撫でていた手を離す。少女の頭を撫でていた手を離すと少しだけ、少女は寂しそうな顔をした、そうか……もう長いこと頭を撫でられてなかったんだな……。

「また後でやってやるからさ……そんな顔しないでくれよ……な？」

「分かった……でも、どうして兵士を倒さなくちゃいけないの？」

「どうしてって……この状況を第三者が見てみる、明らかに俺が兵士が居ないうちに奴隷少女を攫さらいに来たように見えるだ

る？」

「……………ぷっ」

何故そこで笑ったし。

「あのなあ……………」

「勇者殿、そこで何をしているんですか？」

あ、ヤベ見つかった……………。

マズイな……………今の俺は魔剣を抜いている、それでこれまで第三者から見れば今度は俺が少女を切り殺そうとしている様に見えるって訳だ、一応この子は王の奴隷だからなあ、場合によっては俺が切られる可能性が……………。

「勇者殿、いくら貴方であろうとも流石にその行為は頂けませんな……………これは王様に報告させていただきます……………。」

「報告なんて出来ねえよ」

「ほお？ それはどうして？」

恐らく俺の背後ではニタニタと気持ち悪くにやけている兵士が立っている事だろう、この後俺に無残に殺されるとは思っていない口ぶりだ、きっと何か有るのだろう。

「俺に殺されるからだよ」

「……………いいのですか？ 私を殺せば他の兵士達に知られますよ？ 仕組みは教えませんがね」

「知るか」

魔剣を一度振るい、兵士の首を飛ばす、ごとりと音がして次にその一つの身体が地に倒れる。

「っ！？ な、何をしてるんですか！？」

「うえ、流石に人を殺すのは精神的に……………うえ」

「倒すって言ってたじゃないですか！ どうして殺すんですか！？」

少女が俺の胸ぐらに掴みかかってくる、まあ普通は目の前で人を殺されたら誰でも多分こうなるか。

「俺に着いてくるんだっいたらこの先多くの人を殺すだろう、それが耐えられないんだっいたらここに残るか、それとも着いてくるかの二つに一つだ」

「……………分かりました、多少の事は我慢がまんします、けど余り多くの人は殺さないであげてください、それなら着いていきます」

「分かった、承知しよう」

少女は胸ぐらを掴んでいた手を離れた、その瞬間だった……………

「勇者を殺せ！ そいつは最早犯罪者だ！」

「数で押せ！ 我らでは一対一では適わん！」

響いてくる数々の声、アイツが言っていた事は本当だったのか………！

「すまない、どうやら約束を破る事になるかもしれん………」

「………こうなった時だけです、大勢の人を殺すのは………」

開いている片手で懐のホルスターから魔銃を取り出す、少女はこれがか分らないようでもじまじと魔銃を見つめていた。

「それは？」

「これは俺の武器だ、強いんだぞ？ こう見えてもさ………てゆうーか最初に俺に会ったときどう思った？ この格好」

「えつと………研究員かな？ って思いました」

「だよなあ………」

この白衣結構気に入ってるんだけど………売って他のを買うのは神様に悪いし………。

「それじゃ、時間がないから手短に話す、作戦は強行突破だ、こ

れなら直ぐに突破出来る」

「はい」

「俺が魔法を唱えて蹴散らしていくから君は俺の後ろに着いてくれ」

「分かりました」

さあーで、勇者に刃向かうとはためーら何様だ、つーことでお仕置きだ、覚悟しやがれ。

俺達は部屋を出て、強行突破の作戦を決行した………物語はまだ始まったばかり………。

第三話 模擬試合だったハズの殺し合い（後書き）

誤字脱字がありましたら報告よろしくです。

第四話 フィンシア城からの脱出（前書き）

ノーパソに変えたからでしょうか？ 小説の執筆速度が上がっております。

まあ、スペック低すぎてニコ動が重いから見なくなって、その代わりに小説を書いているからでしょうかね。

第四話 フィンシア城からの脱出

「邪魔だツ！ てめーらに構ってる余裕はねえんだつての！」

目の前を阻む邪魔者達を立て続けに魔剣を振るい、ある者は腕を切られ、またある者は真つ赤な刀身の剣で胸を貫かれていった。地下からの一本道、そこでは兵士達がゴチャゴチャしていて狭苦しかった通路に魔法で道を開き、難無く突破していった、後は裏口から逃げ出すだけ、だが兵士のエンカウト率が激しく中々目的地へとたどり着けない。

錬金術師には盗賊の様に身を隠す魔法やスキルが無い、だからこうして正々堂々目の前から魔法をぶっぱなしたり魔剣を振り回したり・・・それでも中々疲れや疲労と言った症状が襲ってこない、恐らくステータスを倍にしたからだろう、これはこれで助かる。

「見えたツ！ もう直ぐだがまだ走れるか!？」

遠くに確かに裏口と思われる扉を発見した、賭けてみるか・・・
・入って行き止まりだったら再度、敵を蹴散らしながらの脱出となる、これが何回も繰り返されると流石に俺のMPの減りも大きくなってしまふ、頼むぞ・・・裏口であってくれ・・・！

「大丈夫です！ こう見えても結構体力には自信がありますから！」

それを聞いて安心したよ、だったらもう少し走っても大丈夫そうだな、と言っても余り無理はさせないけどな・・・俺もそこまで鬼畜ではないぞ？兵士とはエンカウトすること無く扉まで難無く一辿り着く事が出来た。後ろからの追ってが来ている様子もな

い。不思議に思ったが扉を開ければ出口かもしれないという誘惑ゆうわくに負け、その思考を頭の片隅に弾き飛ばしてしまった。そして俺は最悪の可能性を考えず扉の取っ手に手を掛け、そして開いてしまう……。

「誰もいないな？ よし、あそこから城の外へ出られそうだ……」

少女はコクリと頷く、そういえばまだ名前を聞いていなかったなあ、一段落付いたら聞いておこうかな。なるべく音を立てることなく進み、もう直ぐ城の外へ出られると言う所まで行ったところで、事態は起きてしまった……。俺が怪しむ事なくここまで来てしまったが為に……。突如、あらゆる場所から兵士が湧いてくる、先程出てきた扉からゾロゾロとそれぞれ剣や槍などを構えてまさに追い詰めたぞ……。と言う顔でこちらへ近づいてくる。何でこんなちっぽけで子供が思いつきそうな罠に引っかかったんだろうな？ スゲエ恥ずかしいぞ。

少女が白衣の袖そでをぎゅつと握る、袖を伝わって震えているのが伝わってくる、俺は小声で兵士達にも聞こえない様な声で少女に向けて言ったー何かかしてやるさ……。ーとは言ったもの……。どうやってこの状況を切り抜ける？ 既に城を抜ける道を塞がれ、戻ろうともその道は当然の如く大量の兵士により塞がれている。ここはやはり一点突破か？ 場合によっては魔銃も使って戦うことになるだろうな、恐らく銃何てこの世界には無いだろうか。性能なんて理解できないだろうし……。運が良ければ怯んでくれるはずだ、だが逆に攻め立てられる可能性も低くはない。

でもどうにも不可能な事がある、それはこの少女の守りだ、少女は戦えないし俺は兵士を倒す事で少女まで目が届かない、多少は可

能だが……そうだ、あるじゃないか、戦力を増やす方法が！ よし、これで少女の守りは出来た、後は城の外へと続く道を阻む兵士を倒して突破していけば後は城下町に隠れるなりなんなりして時間を稼ごう、匿かくまってもらえば最低でも一日は隠れられるはずだ。脳内で策を完成させた瞬間、兵士達の山から一人、見覚えのある赤い髪で長身の女性兵士がこちらに鎧の音を立ててやってきた。

「勇者殿、何故貴方がこんな事を？ 私にはそれがどうしても分かりません」

その正体は俺と死闘を演じたクリア・リクライさんだった……

「へッ、地下でこの子を見つけたんだよ、この子にはあの牢獄は狭すぎる。だからこの子に広い世界を見せようとな……」

この世界、グランアース、そしてフローリック大陸、この少女は俺に着いてくることで様々な国や村を観ることができ、そしてこの少女の故郷の村もな……。俺の答えに訝いぶかしむ様子のリクライさん。

「その少女がフィンシア王の奴隷だとは我らも重々承知しています、しかしだとしても兵士の殺害は流石に認めるわけにはいきません……。我らはフィンシア王の命めいにより勇者殿、いや！ マコト・キシベ！ 貴様をここで処刑する！！ 皆の者！ フィンシア城兵団隊長クリア・リクライが命ずる！ 犯罪人マコト・キシベを処刑せよ！ 行け！！」

不味い事になったな……。兵士共が俺を殺しに掛かってくる、逃げ場はない、作るしかない。

「くそッ！ 殺人したのは悪いとは思ってるけど奴隷を買ってるフ
インシア王はどうなんだ!?」

兵士を切り倒し、腕組みをして俺に向かって処刑宣言をぶちかま
したリクライさんに怒鳴り声を挙げて講義するが、無言でスルーさ
れた、最早俺の事は犯罪者としか見ていないようだ。

「スルーかよ！ いいだろう・・・お前らがその気ならこっ
ちにだつて策はあるぞー！ ホムンクルス召喚！ キラーゴーレム、
キラースネーク、キラーナイトー!!」

地面に魔方阵から、斧を持った巨人、鋭い牙を持った巨大な蛇、
槍を装備している騎士がそれぞれ召喚された。

「お前らッ！ 暴れ尽せ！」

命令とは言えない命令を下し、ホムンクルスが兵士達を殺戮し始
める。“キラー”と頭文字に名の付くホムンクルス達の特徴は全身
が深い海の様に蒼く、眼が紅蓮の炎の様に紅い、そして何よりどの
ホムンクルスよりも圧倒的な力を誇る“兵器”である。先程召喚し
たのはどれも攻撃、防御共に特化した奴ら、高い攻撃力で目の前の
敵を薙ぎ倒し、高い防御力であらゆる攻撃に耐える事が出来る優れ
た錬金術師の最終兵器と言っても過言ではない。

「お、おい！ 何だよアレ！」

「こいつら強いぞ!? まともじゃ戦って勝てる相手じゃねえ！」

「ちッ・・・うろたえるな！ 困んで体力を削れ！」

慌てふためく兵士達に命令を下すリクライさん、それに答えるかの様に兵士達が落ち着きを取り戻していく、だがいくら困んで体力を削っていった所でキラーホームンクルス達にはダメージ1程度喰らった様な物だ、どんなに頑張ったって圧倒的な力の前には無力だ、戦わない方が身の為だぞ……。

「ぐわあああああああ！！！」

フツ、それ見たことか……。

だが兵士を倒しても倒しても湧いてくる、全く、キリがないな……少女はキラーナイトが守っているから心配無いが、残りの二体と俺だけでこの戦況はまあ、巻き返せるけどかなりの数の死人が出ると思うからなるべく使いたくはない、魔銃だつて未だに使ってないし……いや、使えば楽なんだけどね？ こつちもMPの消費に気を付けて魔法を発動しないといけないからボコスカ唱えられない、魔銃だつてMP消費して撃たなくちゃならん、白衣が無かつたら今頃MP尽きてるな、確実に。

あー、こんな時ポーションさえあれば……でも色々と物を揃えなきゃならない、ポーション入れるビンとか材料とか……うわあめんどくせえ。ちなみに錬金術師が造るポーションは他の市販のポーションとは効果が倍近く違う、価値が高いからプレイヤー同士での取引は高値で行われていた、錬金術師は数が少ないからな。まっ、どうにかしてこつから逃げて安全な隠れ家でも見つかったら、材料を揃えてポーション造ってみるか……さてどれ位で売れるかな？ くつくつく……。

「あの！ 何か打開策は無いんですか！？ このままじゃジリ貧で

すよ！」

「打開策はある、だがそれを使うと大勢の人間が死ぬぞ？ それで
もいいのか？」

少女は少し考える素振りを見せた後、ゆつくりと頷いた、んじや
あ、許可も降りた事だし！ 派手に行きますかねえ！！・・・
・威力でデカすぎて少女もろとも御陀仏とかはやらないからな？

「吹き飛ばされんなよ！」

「は、はい！」

MPを半分程まで削って召喚したホムンクルス達が魔法に巻き込まれるが、消えてしまっても後で再度召喚できるから問題無い。切りかかってきた兵士の剣を弾き返し、ノックバックしている間に魔法を唱える。そうはさせんと兵士達が束になって切りかかってくるが、キラースネークの長い尻尾に吹き飛ばされ、キラールーレムの巨大な斧で三人程がぐちゃりと不気味な音を立て、潰される。そして戦えない少女に一人の兵士が余裕の表情で月明かりに照らされた槍で突き刺そうとする……………。

「なッ！？　ぐぎゃッ！！」

その兵士は後ろからキラールーナイトが迫っていることに気づかず、無防備にも背を見せてしまった、そこにキラールーナイトは容赦無く槍を一閃し、鎧ごと腹を切り裂き、兵士の身体を上と下、上半身と下半身に分断した。兵士は地に倒れ伏し、叫ぼうにも痛みにも声を挙げられず、口を魚のようにパクパクさせるのみ、下半身はびくびくと痙攣しており切り口からは上半身と同じくおびただ夥しく紅い血が流れ出し

ている。兵士が息絶えた事を確認し、他の敵を狩りに行くキラート、それとほぼ同時に魔法名を唱え終わり、“最凶”の魔法が発動した……。イーメテオー錬金術師“最凶”の魔法、空から巨大な隕石を降らせ、直撃するとそこにはぺんぺん草一本すら生えてこない……。

掠っただけでもその威力は上級魔法五つ分に匹敵する、魔法使いが協力して巨大なバリアーを発動させないと耐えきることは不可能に近い、それが魔力を弱めているとはいえLV200で魔力倍、威力は標準、といった所だろうか？ 生前はこれ唱えまくってモンスターループを一掃して経験値を荒稼ぎしたもんだ……。今思えば懐かしいな……。そう考えている内にメテオが直撃し、激しい轟音に俺達は咄嗟に目を閉じ、耳を塞いで耐えた。

「あつぶね、こつちも二重でバリアー張ったけどまさか一枚破れてもう一枚にヒビが入って破れそうになるなんて……。威力デカすぎだろう」

メテオに巻き込まれる前に俺と少女がスッポリ収まるくらいのバリアーを張っておいた、少女はあまりの出来事に何が何だか分からず啞然としている、頭の上に？が見えそうだぞ。

「あ……。あわわわわ……」

「あ……。もう大丈夫だ、さっ、早いトコこの城から出よう？」

少し威力がデカすぎたのか？ それとも一瞬で沢山の命を奪ったから？ 多分後者だろう。バリアーを解除し、周りを見渡す。生き残っている人間は俺達のみ、兵士達は恐らく消滅したか……。

それにしてもバリアーを張っていた場所にはちゃんと雑草が生えているが、張っていない場所は酷い物で雑草は勿論生えていない、メテオの着弾地点には大きなクレーターが出来上がっている、城壁はポロポロで無残な姿になっていた。

「……………そこに居るんだろう？「シンシラ」」

先程兵士を戦っている時に一瞬だが姿が見えたので試しに言ってみると、やはり裏口の扉から出てきたのは巫女服を着た、何とも言えない複雑な表情をしたシンシラだった。

「……………アンタの言いたい事は分かる、言いたくないのなら言わなくてもいい……………それより、フィンシア王……………アイツにこう伝えてくれ、「俺達の事は諦める、そんなに勇者が欲しいのなら、別の勇者を召喚しろ」……………とな、それと……………短い間だったが世話になったな、それじゃあな、シンシラ」

城下町へと繋がっているだろう道へ身体を向け、歩き出す、少女は雰囲気を感じてか先程から無言のまま、そして数歩歩いた時だった……………。

「フィンシア王には伝えておきます！ その子をよろしく願います！ マコト様！ お気を付けて行ってらっしゃいませ！！」

「わーっただよ、シンシラも元気だな！ フィンシア王にムカついたら嫌がらせでもしとけ！ そんじゃあな！！」

大きく手を振るシンシラに俺も同じく手を振り返す、シンシラの瞳には遠目で見えにくかったが少し、涙が滲んでいた……………。手を振っていると、少女が大声で叫び出した。

「シンシラさん！　今までありがとうございました！！　お元気で
！！」

この少女もシンシラには世話になったらしい……叫び切
った後、ボロボロと涙を零して泣き出してしまった。俺はそつと抱
き寄せて頭を撫でて慰めてやった……。何時の間にか月は
姿を消し、朝日が昇ってきていた……。それは俺達の旅の始
まりの合図でもあった……。

あの人が大量の兵士を殺害しても、私は何も思わず、ただ、ただ
ただ感謝の気持ちで一杯だった。城の中で孤立していた私にあの人は
優しく接してくれた、短い期間だったがそれでも私には充分だっ
た……。別れの時はつい、悲しさでうっすらと涙を浮かべ
て泣きそつになつてしまった。あ、そういえば言つたの忘れてたな。
……「ありがとう」って……。まっ……。いいか
な……。出来れば言いたかったけど……。

あの子はちょっと内気な子ですから優しく接してくださいね？
マコト様……頼みましたよ。貴方が来てくれたおかげで、
ちよっぴり元気になりました……あの子を助け出してくれ
て本当に……。ーありがとう……ー

第四話 フィンシア城からの脱出（後書き）

誤字脱字がありましたら報告よろしくです。

第五話 城下町

泣きじゃくる少女を慰めながら城下町へたどり着いた俺達、しかし、当然早朝は人通りが少ないものである、そこで何回かここに来た事がある少女に取り敢えず宿屋へ案内を頼んだ。さて、ここで盗ってきた金貨の出番だ。少女にこの世界のお金の事を聞くと「なんで知らないの？」って言われたから「俺、辺境の村で育ったんだ」って言っておいた。大抵は魔物などを倒すと落とす、単位は“G”でその他は日本と変わらなかった。それとあの“金貨”実はあれ一枚で貴族の仲間入り、とかでは無く普通にあの色らしい……紛らわしいこった。

それと宝石だが……これはマジで金欠になったときに売ろうと思う、持っけていてもアイテムウインドウにしまっけてしまえば問題は無いんだが……どうしても日本人の感覚が強く、なるべく大金は持ち歩きたくはない、そう思っけてしまっけて結局は売ろうとしていた宝石の売却を断念した。で、盗っけてきた“G”をよく見ると10000Gと彫られていた、G数は9枚、合計90000Gを持っけていることになる。それを少女に見せると何でそんなに持っけているの？と聞かれたので素直に「城の金庫から盗っけてきた」と答えると何故か溜め息をつかれた。

そんなこんなで宿屋に着き、店番らしきおばちゃんに声を掛けて一週間分の料金は幾らか聞く、そのおばちゃんは早朝からやってきた白衣の研究者と白いワンピースの少女に疑いの目を向けず、料金を教えてくれた。Gが10000Gずつしかないので料金を払い、両替してもらっ、おばちゃんは嫌な顔一つせず両替してくれした。部屋の鍵を貰い番号を確認した後、奥の階段を登り客室へと向かう、真ん中ら辺の部屋の扉と番号が合っけている事を確認する、ドアノブ

に鍵を差し込み鍵を開ける。

部屋の中は“一人”で過ごすのには不自由はしない程度の広さだった、ベットも“一人用”で直ぐ横には大きめの窓が付けられていて入って来る風が心地いい。

「あの……貴方の名前は何て言っんですか？」

「ん？ 俺はマコト・キシベ、で、アンタは？」

「私はエーリ・フルンと言います、エーリと読んでください、キシベさん」

「キシベじゃなくていい」

「それじゃあ……マコトさん」

「それでいい」

さて、名前も聞き終わったコトだし、ちよつくら雑談でもしてから寝ますかね？それから少しの間雑談をして主に必要な事などを聞いて、エーリが欠伸あくびをしたのを見て寝ることにした……。

「ふあゝあ・・・・・・・・部屋二人分借りときゃよかつたな・・・・・・・・」

年頃の男子がいる部屋で、男女が一つ屋根のしたつてのはマズイだろうと気づくとエーリがオーバーヒートして使い物にならなくなり、仕方なく部屋は起きたら取る、と言うことにしてエーリには一先ず寝てもらう事にした、だが本人は気を使わせたくなかったように俺に譲ろうとしたがそれを断わり廊下の壁によっかかりながら迫り来る眠気を耐え続けている。眠気によって閉じかけてきた目を擦り、欠伸が出そうになった時だった。

「マコトさ〜ん・・・・・・・・お待たせしました〜」

頭は寝癖が付いてまるでアホ毛の様だ、これはこれでいいな・・・・・・・・。

「う〜し、飯食うぞ〜」

「マコトさんは寝ないんですか？」

「寝たら確実に昼過ぎまで起きてこないぞ？」

「ははは・・・・・・・・」

眠気を覚まし、空腹を満たすために階段を降り、おばちゃん所

へ向かった。

「お、サンドウィッチみてーだな」

「みたいじゃなくてそうなんですよ」

宿屋『ホリーブス』の一階にあるテーブルにて生前食べていた食べ物によく似た物を発見し、少しテンションが上がり、それと同時に好奇心も湧いてきた。どうもこの食べ物サンドウィッチと変わらないみたいだ、味も美味い。

「それでこの城下町には冒険者ギルドってのがあるんだろ？ 後でそこに行って冒険者登録ってのをして、クエストを受けりゃいいんだな？ っとそうだ、買い物もしないとな……」

定食に着いてきたコーヒー？ を飲み干しテーブルに置く、そこで思い出したかのように予定を改めて確認する。

「はい、直ぐに終わりますけど私は身分証明になるものを持っていないので少し長くなりますよ、最初はランクが低いですからマコトさまには簡単でしょうね、あんな魔法を魔法名だけで発動させるなんて!」

「え……ああ、そうだな、それよりエーリは何か魔法が使えるのか?」

ゲームの中じゃ魔法は詠唱しなかったし……まあ、いいや楽だし。

「えっと回復魔法は中級まで習得してます、あ、補助魔法も同じ程度に……でも攻撃魔法は使えないんですよ……だから短剣で攻撃するしかなくて魔物を倒すのは大変です」

魔物を倒した経験はあるのか、なら普段は補助役として後ろに着いてもらうか。

「そうか、なら魔物と戦う時は俺の後ろで補助役を任せる、頼んだぞ?」

「分かりました、マコトさん」

その後俺達は食事を終え、冒険者ギルドへ向かうために城下町へ繰り出していった。

「おっちゃん、この店で一番いい短剣は無いかな？」

早朝とは様子が一变し、人で賑わいを見せている城下町の風景は逆に騒がしい位だった。道具屋で念願のポーション造りに欠かせない材料を購入し、これからポーションを創るのだと思うと非常に胸が踊る、エーリは俺の機嫌が良い理由が分からずさつきから疑問の表情だ。次の目的地、武器屋を発見しエーリの短剣を買うことにした、流石に丸腰で魔物を前に魔法は唱えられさせられない、武器ぐらい持っておいて貰わねばな。

「あの、マコトさんいいんですか？ 短剣を買ってもらって・・・」

「いってコトよ、気にすんなくて素直に受け取っておけ」

少し悩んだ後、照れた様子で「ありがとうございます」と言った、俺はわしゃわしゃと頭を撫でてやった。呼びかけてから少しして店の奥から体格の良い男がやってきた。

「あいよ！ コイツがウチで取り扱っている最も良い短剣だ、勿論値も貼るがな」

見せられた短剣に小さな声で魔法を発動する。ーチエツクーー
この魔法はあらゆる物の情報を確認する事が可能な、使い勝手が良
い魔法だ、それに消費MPも少なくて済むから結構重宝する。さて、
この短剣の情報は……ふむ、どうやら嘘偽りは無いらしい、
攻撃力は高いし、何より属性が付属されている事が大きい。

「これは凄いな……よし、これ幾らだ？」

「へえ……アンタ、この短剣の質が分かるのかい？ っと
値段は35000Gだ、どうだい？ 買っかい？」

「いや、止めとく、手持ちが足りなさすぎる、他にはないか？ な
るべく60000Gくらいで頼む」

随分と高いな……まあ、それほど質が良かったんだがな、
あれくらいの値段はするだろう……近くにカジノでも有
れば良いがな、ガツポリ稼げそうだ、運も倍になってるしきつと勝
ちまくって大金持ちになれるかもしれん、そうなったらエーリの装
備を整えてやれるし、アイテムだって買える！ まさに一石二鳥だ
な！

「それならこれはどうだ？ 値段は50000Gだ！」

差し出された短剣は刀身が魔剣と同じく紅い、鞘の色もとういつ
されていて同じく紅い。再びチエツクを発動させ情報を確認する、
この値段でこの性能か……火属性、攻撃力は短剣にしては
少し高い位だ、うーん……よし！

「買ったッ！」

50000Gを取り出しカウンターに置く、するとおっちゃんは大きな声で「まいどッ！」といったのでヒーリがびっくりして飛び上がったが、俺は気にしなかった。受け取った短剣をエーリに渡す、ペコリと頭を直角に下げる、そこまでしなくてもいいんだけど。おっちゃんがオマケで付けてくれた鞘を取り付けるためのベルトを付ける、だが白いワンピースに短剣を装備しているとなんだか不格好だ。

エーリも中々納得が行かないのか難しい顔をして唸っている、それは見かねたおっちゃんが店の奥に一旦戻って行って戻ってきたかと思うと肩から斜めがけにするタイプの物を持ってきた。

「コイツを付けてみな、どうだい？ 大分マシになってると思うが……」

「わあ、これがいいです！」

余程嬉しかったのかエーリはぴよんぴよんとウサギみたいにジャンプしている、正直顔がかなり幼く見えるため顔だけでは年は十歳位に見える、なのでそんなにぴよんぴよんされると完全に子供にしか見えない、背は160cm位あるんだけどな……胸はちっさいけど。

「分かった、じゃあおっちゃんこれ持つてくぜ？」

「誰がおっちゃんだ、俺にはちゃんとグリー・ミリアンっつー名前があんだよ」

「スマンスマン、ミリアン、また来るわ」

「ここがギルドか……ふむ、早速入ってみよう」

エーリは極度の疲労で膝に手をつき大きく息を吸い込み、吐く、それを繰り返し何とか喋れる状態まで回復した。

「ぜえ……………はあ……………何で疲れて無いんですか……………」

エーリを引つ張り回し、結局は城下町を一周してしまった、そして漸く冒険者ギルドと書かれた看板を発見し休む事無く入口の扉を開ける。余談だが、俺に全力で引つ張り回されるエーリにすれ違う人々は同情の目を向けていた、御陰でエーリは精神的ダメージも蓄積されていったとき……………。Gあんまり無いけど後で何か奢おこつてやるかな、何か可哀想に見えてきた……………。

何を奢つてやるうかと考えながら俺は木製で出来ている少し大きい門を通り抜けて行き、その後には呼吸を整えたエーリが小走りで門を通り、俺の後ろに着いた。そして俺達は冒険者ギルドの建物内に足を踏み入れた……………。

第五話 城下町（後書き）

誤字脱字がありましたら報告よろしくです。

第六話 クエスト

ギルド内は意外と綺麗にされていて、外にも負けなくらいの人で賑わっている。俺達はまず受付をしている女性へと向かい、冒険者登録と言うものをした、だが身分証明になるものが無いので渡されたナイフで指を少し切って血を一滴、同じく渡されたギルドカードに垂らす。するとカードが一瞬眩まばゆく光り、先程登録しておいた内容が写し出された、カードの色は灰色、これはランクが上がるごとに色が変わっていき、最終的にはランクSSSで黒色に変わるらしい。

だがランクSSSにまで達した者は、かつての魔王を倒した勇者、ただ一人。他の勇者はギルドには入らず、本来の目的である魔王を倒していった、しかしランクSSSの勇者は魔王を倒し、体力が減っている所を都市に向かって進行してきた超大型の魔物と鉢合わせ、相打ちとなり死亡した、だが相打ちとなった魔物がランクSSS級だった、そして都市に入る寸前で相打ちとなったことからランクSからSSSにまで一気に上げられ、都市を救った英雄、そして魔王を倒した勇者として、約300年経った今でも多くの人々に語り継がれている。

受付の女性から聞いた話を思い出している内に登録作業が終わったらしく、女性が戻ってくる、今の俺達のランクは最低のF。となるとクエストはFランクの物しか受けられないかと思いきや、どうやら自分のランクの一つ上のクエストまで受けられる仕様になっているらしく、まずは少しでもGを稼ぐため一つ上のEランクのクエストを受ける事にした。

最後に冒険者ギルドからの支給品で俺のアイテムウィンドウと同

じ性能のアイテムポーチが二人分、中には体力回復、魔力回復と書かれたビン……。つまりはポーションが入っていた、次に格蘭アースの地図、そして一個で一回だけこの城下町へ転送してくれる、転送クリスタルが一個入っていた。ついでに女性からこれらのアイテムの説明がされた。

「エーリ、Eランクでなるべく報酬が高い奴を選んでくれ」

女性の長つたらしい説明を終え、隣にあるクエストが張り出されているクエストボードで条件が良いものを探し始める。張り出されているクエストの内容は魔物の退治、商人の護衛、アイテム探しなどで埋め尽くされている、エーリはクエスト内容が条件の良い物は中々見つからない様で端っこの方から探しているが全く無い様だ、それにF～Dまでのクエストは大量にあり、ボードのほぼ半分以上を占めている。

「あつたか？ こっちは全然だ」

「こっちもありませんねえ……。あッ！ そうだ！」

腕組みをして大きなボードを見渡していたエーリが何か閃いた様で、ボードから目を離しこちらを向く。

「納品ですよ、さっき受付の人が言っていましたよ？ 納品したものは希少な物で有ればあるほど、それに見合ったGを提供するって！」

「ああ、そっぴや言ってたなあ、そんじゃテキストにクエスト受けてそこで何か採ってこようぜ？ 確か納品する物は一度冒険者ギルドまで持ってくるんだっただな？」

「はい、あ、盗まれないようにしなくちゃ……………」

どうやって隠そうかと顎に手を当てて考え始めるエーリ、てゆーか別に俺のアイテムウィンドウにしまっておけばいいんだが……………俺以外取り出せねえし、何より安全だ。黙々と思考を展開しているエーリは放っておいてクエストボードから、Eランクの魔物討伐のクエストを手に取り、受付へと持っていく。

「これを受けたいんだが」

「はい、えーっと『ゴブリン15匹の討伐』ですね？ 討伐した証拠としてゴブリンの身体の一部を討伐した数だけ、こちらに持ってきてください、それをこちら側で確認して、クエストの完了となります」

「分かった、それじゃ行ってくる」

未だに思考しているエーリの頭をわしゃわしゃと撫で、覚醒させる。

「わひゃッ!？」

いきなり頭を撫でられ顔を真っ赤に染めるエーリ、ヤカンみたいに頭からは煙がモクモクと出てきた。

「ふふ……………行ってらっしゃいませ」

親子みたいな俺達を微笑ほほえましく思ったのだろう、少し羨ましそうに笑っている。その後も俺はエーリの頭を撫で続けた後、先程貰っ

た俺のアイテムポーチの中身を全てアイテムウィンドウにしまい、空になったアイテムポーチもしまう。

あの程度のポーションでは体力を十分に回復できない、と考えた俺は目的地へ向かう前に道具屋に寄ってポーションを売った、ポーション造りの材料は既に揃えているので帰ってきてからポーションを錬金術と言うスキルを使って造る、それまでは回復薬が無いのでクエストで体力が削れたらエーリに回復してもらおう。転送クリスタルは今はまだ使う予定は無いので、これは一先ず保留としよう。そうして準備を整えた俺達はクエストの目的地へ向かっていった・・・。

「着きやしたぜ」

クエスト場所に向かうため、冒険者ギルドが所有している馬車に乗り、小一時間で目的地へとたどり着いた。到着した目的地は木々が鬱蒼と生い茂る森、フィンシア王国城下町とはあまり距離が離れていないので帰りは歩いて帰る為、馬車は城下町に戻る。

馬車が戻っていくのを見送って再度、当たりを確認する。やっぱり森は視界が悪い、ある程度知能の有る魔物の奇襲には用心しておこう、今回のゴブリンは知能はあるが単純な物しか考えられないため、多少行動を先読みして行動することが出来るとエーリが言っていた。俺達はそれぞれの武器を構え、納品できそうな物を探すと同時にゴブリンを探し始めた。

「無いな……こりゃゴブリンのドロップにでも期待した方がいいかもな」

「どろつぷ？ 何ですか？ それ」

「別に知らなくてもいいぞ」

「……気になる」

納品出来そうな物が見つからず、ゴブリンも出てこない為こうして話をしながらのんびり探している、だが、魔物が出てこないのは少し可笑しくないか？ ここにはゴブリン以外の魔物も生息しているとエーリから聞いているのだが……。もしかしたらゴブリンは巢に集まっているのかもしれない……。だが他の魔物はどこにいる？……。何だか嫌な予感がする、俺の予感にはよく当たるから注意しておいた方がいいか。

「あッ！ マコトさん！ 洞窟ですよ！」

崖下に薄暗く中の様子がハッキリと確認できない洞窟を見つけた、すぐさま洞窟の中に入り、魔法を使って光を削って薄暗い洞窟を照らす事にした。

「ライトボール！」

頭上に挙げた手の上に光り輝く球体が現れ、洞窟を照らししていく。

「凄いですね、無詠唱で魔法を使えるなんて、詠唱を唱えてからじや無いと普通の人は発動出来ないんですけど……魔法を無詠唱で発動させる人が居ますがそういう人は稀ですよ」

「……そういやありクライさんも無詠唱で魔法発動させてたな、多分ドラゴンメテオに巻き込まれて死んだんだろうけど……」
「……掌の上でふよふよと眩しいくらいに光を放っているライトボールを頼りに、洞窟の中を進んでいく。洞窟は意外と奥まで続いている様だが横の広さはそうでもなかった、一人が通れても二人横に並んで通るのは無理と言った程度の幅だ。」

「……これは血の匂いか？」

「……マコトさん！何かいますよ！？」

洞窟の奥までたどり着いたが突然血の匂いが辺りに漂い始め、エーリが何か発見し、洞窟の奥に“ナニカ”が積まれているのが見えた、俺はそれに近寄って正体を確認した。それは魔物だった、しかし、最早原型を留めていない程になっているのでどんな魔物かはよく分からない、エーリに見せようともこの光景は流石に堪えるだろう……悲惨すぎる。

「結局何なんですかこれ？」

何の反応も示さない俺を不思議に思っただけでエーリが此方にやってき

た、丁度魔物のグロテスクな死体が見える位置に……………。

「何ですか……………魔物？」

一体何をされて殺されたんだろうか？ 丸っこい形の魔物で細長い尻尾があつたのだろう、しかし尻尾はちぎれて白い骨が見えている、丸っこい形の身体は所々凹んでいて見る影もない、口から血が溢れ出し、足下には幾つかの目玉が転がっている。右手の半分を切断され白い骨が見える、左手は無い、恐らく肩から切られたか……………あるいはちぎられたか……………。両足は比較的軽目だ、だが両足とも変な方向に曲がっている。だが、これらは一匹の死体の様子だ、これが何十匹と無残な姿で積み重ねられているのだから精神的に来るものがある。

「共食いか……………あるいは何者かに殺されたか……………」

殺すにしても強い恨みなどが無ければこんな風に殺したりはしないだろう、案外、気が狂った冒険者が魔物達を見つけて殺したか……………。それよりも可笑しい点がある、何故魔物が消えないんだ？ 普通倒されたら魔物はアイテムやGを落として消えるのだろうか？

「なあエーリ、魔物つてのは倒されたら消えるんだろう？ だつたら何でコイツらは消えずに残ってるんだ？」

「えっと……………魔物が消えるのは倒されてから約一時間経てば自動的に消滅します、ですがアイテムやGは約三十分で消滅してしまいます」

という事は……………残虐ザクに魔物を殺した奴はまだ近くにいます

可能性がある？ もしそいつが精神異常者だったら……殺し合いに発展するだろう。

「だとすると、恐らくコイツらを殺した奴がまだ近くに居るかもしれない、気を付けるよ？ 俺達に危害を加えてくる可能性が無いとは言えないからな……」

最悪の場合を考えて青ざめるエーリ、俺はその不安を少しでも取り除くために、少なくとも三十分は経ってるんだからどっかに行っただろうさ、と付け足す。エーリはその言葉を聞いて少しは安心出来た様だ、さて、ここに長いしてもゴブリンは居ないみたいなのでさっさと他の場所を探す事にしよう。このキツイ匂いにも少し慣れたようで顔色が元に戻っている、てゆうかもう慣れたのかよ、随分と早いなあ……俺も慣れたけどさ……。

「ここには死体以外何も無いみたいだから外に出て、ゴブリン見つけてさっさと討伐しようぜ？ 今日は寝てなくてな……絶対宿屋に帰ったら寝る」

「ははは……そうですね」

俺達はライトボールの光を頼りに洞窟を脱出した。

洞窟から出て、しばらく複雑で迷路の様な森を彷徨うろたっていると運良くゴブリンの群れに遭遇した。咄嗟とつとに茂みに隠れて様子を伺い、通り過ぎた所をスキだらけの背後を魔法での奇襲を仕掛けた。唱えた魔法は広範囲に高いダメージを与えるサンダーボルト。何匹か当たらなかつた奴らは茂みから出て直接討伐する、今回はエンチャントを掛ける必要が無いのでエーリも短剣を振り回し、ゴブリンを討伐していく。エーリは魔物を狩った経験があると言っていたがそれは本当らしく、次々と短剣を振るいゴブリンを絶命させていく。

討伐を開始してから約数十分、目標15匹目のゴブリンを討伐し、武器をそれぞれの鞘の収め、ドロップした『ゴブリンの棍棒』をアイテムウインドウにしまっ、エーリは突然消えたアイテムを魔法か何かでしまったのだらうと思ひ、何も言わなかつた。大半のドロップアイテムは俺のアイテムウインドウにしまい、少量をエーリのアイテムポーチにしまつた。結局、ドロップした物でも納品アイテムは出なかつた、なので諦めてさっさと城下町へ戻ろうと、馬車のおつちゃんに教えてもらった森の城下町へ戻るルートを辿つてしばらくの間歩き続けていた時だつた。

城下町へ戻る一本道にふと、視界に留まる物が有つたので気になつて見てみると……狭い森の道のド真ん中に一つの、肉片と洞窟の魔物達と同じ死体が紅い血を撒き散らし、緑の草の上を紅いカーペットへと変えていた。

「これは……恐らくCランク級の魔物、シルバーウルフで

すね」

グロテスクな死体に慣れたのか、たんたん淡々と言葉つむを紡ぐ。

「強いのか？ そいつ」

「ええ、Cランクともなると、群れを作ったりすると王国の騎士団が討伐に向かう程ですね」

そいつが殺されているとなると……殺した奴はCランクよりは上なのか……Cランクの魔物を肉片になるまで殺る奴だ、恐らくBランクは超えていると見ていいだろう。

「マコトさん……シルバールフのアイテムが落ちていますよ……！」

エーリの言葉に反応し、即座に肉片と化したシルバールフを見ていると、直ぐ近くにGと何かは分からないがアイテムが落ちていた。これがもし冒険者が捨てた物では無いとすれば……ドロッパアイテム、それは三十分経ってしまえば消える魔物が落としアイテム。となると……直ぐ近くに居る……!?

「エーリ、構えてろ」

「き、気を付けましょう、Cランクの魔物を倒すほどですから……」

魔剣を鞘から抜き、構えてから十秒が経ったその時……！
！茂みから出てきたのは……馬鹿デカイ身体の“化け物”
それを見た瞬間、エーリが腰を抜かしてへなへなと地面に座り込ん

でしまう。鋭く巨大な爪、黒い体毛、鋭く長い歯、紅い目、そして……口からはみ出ている紅い血が滴る肉。そいつは俺達よりも肉片と化している魔物を視界に捉えた。そして肉片に近づき……殴り始める、腕は太く黒い体毛に覆おおわれている。

やはり洞窟の魔物達を殺したのはアイツか……そうか、アイツが魔物を殺しているからあんなに魔物が少なかったのか……。何度か殴った後、興味が無くなったかのようにその場にどすつと言う音を立てて豪快に座り込む。

「SSランク級……。ダークベアー……。何でこんな所に……?」

地面に腰を抜かして座り込んでいるエーリが小さな声で、そう呟いた……。俺は自分の耳を疑った、何故そんな魔物が自分達の目の前に居るのだろうか？ SSランク級の魔物何て倒せるのか？ いや、倒せないだろう、俺は経験が少ないのに戦った所で殺されるのがオチだ。

「殺される……! 嫌だ、死にたくない……! 逃げないと……!」

「エーリ待て！ 一人じゃ危険だ！」

逃げ出すエーリを呼び止めるため大声を挙げてしまった、エーリの腕は掴んだが……。様子が可笑しい、俺の後ろ見て酷く怯えている、心の中で恐怖心が暴れだすがそれを無理矢理押し伏せて大人しくさせる。そして俺は振り向き……。絶望的な光景に啞然あせんとなり、言葉が出なかった。俺の声に反応した魔物が黒い体毛の巨体を揺らし、紅い目を光らせ、低く唸りながら四足歩行で此方

第六話 クエスト（後書き）

誤字脱字がありましたら報告よろしくです。

第七話 黒き獣（前書き）

何か少し遅くなりました、すみません。

第七話 黒き獣

「エーリ！ 補助魔法をありったけ掛けてくれ！ それが終わったら隠れて補助魔法の効果が切れたらまた掛けてくれ！！」

ダークベアーが突進してくる中、急いでエーリに補助魔法を掛けさせる。勿論、錬金術師も補助魔法や回復魔法は使えるのだが・・・ダークベアーと戦っている時には唱えられない、いや、唱えられるが俺は戦いに集中しなくてはならないので、攻撃魔法と回復魔法は唱えるが補助魔法まで唱える余裕は無い、詠唱に多少時間が掛かるがダークベアーは俺に注意を向けているのでエーリは気にすることなく補助魔法を俺に掛けられる。

「神よ、その者に全ての力量を与えよオールブースト！」

成程、詠唱つてのはこういうものなのか。補助魔法をエーリに掛けてもらった瞬間、俺に力がみなぎってきた気がする・・・。だが一タステータス画面を開いている余裕はない、もう直ぐそこまで来ているダークベアーに向かって魔銃を構え、撃つ。放たれた弾丸は軌道を逸らすことなく直進し、ダークベアーの目に直撃した。

「グオオツ！？」

ダークベアーが目を感じた痛みを受け怯んだ、俺はそのスキにステータスウィンドウを開き、ステータスを確認する。補助魔法を掛けられている俺のステータスは補助効果によって大幅に引き上げられていた、そして驚くべき事に、撃つとMPが減るはずのMPがドットたりとも減っていない。何故だ？ 俺のMPがある限り自動で装填されるとは聞いていたが・・・神様がミスったのか・・・

「……意外とドジっ娘なんだな、神様は……まあいいや、その御陰でMPを気にすることなく撃てそうだ。」

「エーリ、補助効果が切れたら頼むぞ？ それまでは隠れてろ」

「は、はいッ！」

なるべくダークベアーを刺激しないように、そろそろと静かに木の後ろに隠れるエーリ。それを確認すると、俺は怯んでいるダークベアーに視線を戻す。

「グ、グオオオオオオオオオオ！！！！！！」

おおつと、随分とお怒りのようだな……。そういえば大抵、魔物が怒り状態になったら色々とステータスが上がりたりするから気を付けねえと……。怒りの咆哮を挙げたダークベアーは空高くジャンプし、空中で自慢の尖った爪を振り上げる、その巨体からは考えられない程高く飛び上がっている為、俺は空を見上げながら一瞬、啞然としたが直ぐに攻撃を防ぐために魔法で上空から迫り来るダークベアーを撃ち落とす為、魔銃を撃ちながら魔剣の剣先から魔法を発射する。

「クリティカルレーザー！」

この魔法はその名の通り非常にクリティカルの出る確率が高く、一発の威力も強い。それを魔銃の弾丸と一緒にモ口に喰らったダークベアーは……。歯を食いしばり、苦悶も表情を浮かべ、それを耐えきつた、それなら……。

「トルネード！」

「グオツ!？」

俺に爪が直撃する直前で発動したトルネードにより吹き飛ばされ、大木の幹に激突した。ズドンと重い音を立て、地面に落ちるダークベアー、そこに立ち上がらせる暇を与えことなく俺の中で最上級ドラゴンメテオと同じ威力の魔法をダークベアーに狙いを定め……魔法を発動する。

「ダイヤモンドダスト!！」

空中に現れた鋭く尖っている氷の結晶がダークベアーに向かって突撃した、それらは全て鋭く尖っておりダークベアーに刺さっていた、身体の至る所に尖った氷が突き刺さり血が流れ出している、それに追い打ちを掛けるかの様に上空に15m程の巨大な氷の塊がダークベアーに向かって落ちた。衝撃で氷の破片がそこらに飛び散る、氷の塊の着弾地点は白い霧で覆われており様子がハッキリと認識できない。少しずつ白い霧が晴れて行き、完全に晴れた時、黒い獣、ダークベアーが血溜まりを作って絶命していた……。

「……死んだのか？」

ゆっくりと警戒しながらダークベアーに近づくと、そして魔剣の剣先でツンツンとつついてみる……反応無し、魔銃で撃つてみる……反応無し、全力で頭を蹴り飛ばしてみる……反応無し。

「はぁ……倒したのか……何かあんまり強くなかったなぁ……」

いや、俺が強すぎたんだと思う、多分リクライさんとほぼ互角に殺り合えたのはリクライさんのスペックが俺とほとんど同じだったと言う事だ……。リクライさんマジパネエっす。絶命したダークベアーの近くに何かアイテムが落ちている事に気が付いた、それを屈んで拾い、チエックで確認するとダークベアーの牙と表示されていた。ドロップアイテムをアイテムウィンドウに入れて、隠れているエーリの所へ歩いて戻る。

「エーリ、終わったぞ？ さっ、早いところここを抜けよう」

そして俺は魔剣と魔銃をそれぞれの鞘に収め、木の後ろでしゃがんでいるエーリに手を差し伸べ、それをエーリが掴もうとしたが……。まだまだ、終わってはいなかった……。いや、始まったと言っべきか。

「っ！？ マコトさん！ 後ろッ！！」

その声に急いで振り向こうとするが、背中に重い一撃が直撃して俺は1m程の木まで吹き飛ばされた。鉄っばい血の味が口の中に広がる、一体何が起きたんだ？ 俺は霞む視界で先程まで立っていた場所に複数の巨大な黒い物体が居るのが分かった、そして俺に向かって走ってくる人影が一つ……。エーリだ。木にもたれ掛かる俺に近づいてきたエーリは何かを呟く、そして呟きが終わった瞬間、背中痛みが嘘の様に消え去っていた、そうか、回復魔法を掛けたのか……。木に手を当てて何とか立ち上がる、その姿はまるで生まれたてのヤギの様だった。

「マコトさん……。大丈夫ですか？」

「ああ……。それにしてもアイツ等は……。ダークベ

「アーの群れか？」

仲間を殺された事の報復か……或いは偶然にも^{ある}ダークベアーの群れが現れて、俺を餌か何かと思つて狩りに来たか……。しっかし何匹居るんだ？ 少なくとも八匹は見えるな。ダークベアーの数を目で確認していた時、三匹のダークベアーが絶命しているダークベアーをその鋭く尖った牙で噛み付いた、肉を噛みちぎり血が飛び散る。同種でも死んでしまえばただの餌……。アイツ等には仲間意識つて物が無いのか？ やがて死骸を食べ尽くしたダークベアー達が此方を向き、紅い目を光らせる、そして……。約六匹のダークベアーが地面を揺らして走り出してきた！

「エーリ！ まだ補助魔法の効果は切れてないな！？」

「はい！ 後十分まで持ちます！」

そんだけありやあ充分だ、俺は全力で此方に走ってくるダークベアーに向かつて同じく走り出した。まず一匹視界に捉えて魔剣を抜くと同時に斬りつける。魔剣はダークベアーの腹を切り裂き、血飛沫が上がった。

「グオツ！！」

「らあああああああ！！！」

魔剣を下から上へと斬り上げる、その位置は……。首。ごとりと鈍い音と共にダークベアーの切断された首が地面に落ちる。ダークベアーは声を挙げる暇も無く絶命した。だが休んでいる暇は無い、近くまで接近していたダークベアーの攻撃を魔剣でガードする。補助魔法が効いているのか重い爪の一撃を耐え抜く事が出来た、

一気に力を込めて押し返す。

押し返された事により大きなスキが出来る、俺はそのスキを見逃す事なく黒い体毛に覆われている腹の下へと潜り込み、魔剣を振り回し、滅多斬りにする。大量の血が顔に付着する、それを拭う事なく斬り続けた腹は黒い体毛が紅い血でドス黒く変色している、斬られた箇所はとめどなく血がドバドバと地面に流れ落ち、地面にはまさに血の池が出来上がっていた。

「グ…………オオ…………！」

俺はトドメに心臓の部分に魔剣を突き刺す、ドバツと一気に刺された心臓部分から血が溢れてくる。差し込んでいる魔剣を抜き、そこから更に血が噴き出してくるがそれを気にすることなく無視して、倒れ込んでくる巨大な黒い身体に一発蹴りを入れて後ろへ押し返す。倒れたその先に見えたのは纏めて突っ込んでくる三匹のダークベア。咄嗟の判断で魔銃を抜いて連射していく、銃弾は三匹いるうちの二匹の頭に吸い込まれていった。全ての銃弾を避けた一匹が恐る事なく走り続けてくる。

俺は再び狙いを定め、二発撃つ。その二発は両目に当たりダークベアが突進を止めて地面に倒れ込んだ、目が見えないので有れば、と思い地面をのたうち回るダークベアの所まで走り、助走を付けてジャンプする、そして魔剣を振りかぶり…………頭に突き刺す。暴れていたのが頭を突き刺されそれがピタリと止まる。魔剣にこびり付いた血を魔剣をひと振りしてそれを地面へと落とす。

「さあて…………お前で最後だな…………？」

「グルルルル……………」

低く唸り威嚇しているが俺にはそんな物は効かない。．．．．．
暫しの沈黙がこの森を支配する、そして風が吹き止むと同時に両者
が一斉に地を駆けた。

「グルウー!!」

渾身の力が込められた拳がうねりを上げて襲いかかってくる、俺
は魔剣でそれを何とか防ぐ。そしてもう片方の腕に握っている魔銃
を撃つ、近距離で動きが止まっている目標はただの動かぬ的だ。近
距離で放たれた弾丸が左目を潰す、しかし仲間達の死に様を見て学
習したのか仰け反る事も、力を緩める事も無い、しかも更に力を強
めてきた、ただでさえ片手だと言うのに．．．．．。

「ぐぬぬ．．．．．でりやあああああ!!!」

踏ん張っている足に全力で力を入れて、何とか押し返すことに成
功した。背中から地面へデカイ音を立ててぶつかる、直ぐに起き上
がるうとするが魔獣を撃つて腹に何発か弾丸を送り込む。するとま
たしてもコイツは驚くべき事に腹の激痛を顧みず倒れている態勢か
ら、俺の腹にその黒い体毛が生えているデカイ足で蹴った。下から
腹を蹴り上げられ、威力が強かったのか俺は宙へと飛ばされた。し
かし錬金術師は空を飛ぶ、浮かぶなどと言った類いの魔法は習得で
きないので俺は必然的、いやほぼ反射的に受身の態勢を取った。

「ぐあッ!!」

結構なスピードで空から落ちた俺は、地面へと叩き落とされ背中
に激痛が走った。するとタイミング良くエーリが回復魔法を唱えて
くれた。

「その者に大いなる癒しをヒール！」

名前からして初級魔法みたいだが、それでも十分に効果はあった。あの激痛はまだ少しとは言え残っているもそれほど気にはならない。俺は立ち上がり地面から立ち上がったダークベアーと互いに目が合う、幸いにも彼方あいつ方には回復魔法は唱えられない様だ、ならチクチクダメージを蓄積させるか……。或いは一気に攻撃を仕掛けて打ち倒すか……。二つに一つ、だが俺にはやはり後者の方がお似合いだ。飛ばされた時地面に突き刺さった魔剣を引き抜く、魔銃はしっかりと握っていたので手元にちゃんとある。

ダークベアーの表情からは怒りが見て取れる、鋭い牙を剥き出しにし、どすどすと己の拳を地面に打ちつけている。……。恐らくもうそろそろ補助魔法の効果が切れるだろう、あれが一瞬切れただけでそれはとつもないピンチに、俺は陥るだろう。それに……。この世界にはどうやら携帯できる時計がない、(「街に行けばあるはず」とエーリが言っていた)自分の感で図るしかない、そう、補助魔法の効果が切れても大体の時間は分かるが秒単位などは正確にできない、この戦いは一瞬が勝敗を決める。最悪の場合、一分程までエーリが気付かなかった場合は補助魔法無しでコイツを倒すしかない……。俺はダークベアーをキツと睨んだ、それに反応したのか彼方も負けじと低く唸り声を挙げる。

「……………」

数秒の間、両者は動くことなくただ攻撃の機会を伺い続けていた。そして先手を打ったのは……。一気にケリを着けるため、攻撃に打って出た俺だった……。そしてそれをまるで待ち望んでいたかのように一際大きな咆哮を挙げるダークベアー。

「行くぞおおおおお!!!!」

「グオオオオオオオ!!!!」

二つの雄叫びが、森へ響いていった……。

第七話 黒き獣（後書き）

誤字脱字がありましたら報告よろしくです。

第八話 情報屋からの依頼（前書き）

10/9 スキルが使えないのは今後不便になると思い、急遽編集。

第八話 情報屋からの依頼

鬱蒼と木々が生い茂る森、その森の中で激しい戦闘が繰り広げられていた。彼らの戦いは想像を絶しており、見るもの全てを圧倒していると言っても過言ではなかった……。一人の青年は剣を巧みに操り敵へダメージを着実に、それでいてガードもこなしている。一匹の魔物は己の拳でひたすらに殴り続ける、しかしそのパワーは計り知れない、自らの身体の黒い剛毛によりダメージを通りにくくし、尚且つ防御力が驚くべき程に高い。

……。マズイな補助魔法の効果が切れる時間は刻々と迫ってきている、だったら効果が切れる前に倒してしまえば良い。そう考えた俺は目標部位を心臓と首の二つに定めた。しかし放った攻撃は何度か胸の部分を斬るが、それ以外はガードされるか避けられるか。それにこのダークベアー、妙に強いと思っていたらどうやら群れのボスっぽい、身体は他の個体よりも少し大きく顔には俺が攻撃する以前に傷が付いている。動き方も他の個体とは比べ物にならない、攻撃・防御・速さと何をとつてもそこはボスらしく仲間達よりも高い。

アイツは遠距離攻撃が使えないから一旦距離を開けて、魔銃を撃ち込んだ方がダメージを負う可能性が低くはなるな……。だが問題は距離をどうやって開ける？ もし仮に距離を開けられたとしても直ぐに距離を詰められてしまうだろう。

「はッ、ほッ、よッ！」

三連続バックステップで距離を取る、そして銃口をダークベアーに向けてトリガーを何度も、連続で引く。何発か避けられるが構わ

ず撃ち続けていく、そして放たれた弾丸を撃ち落とそうとダークベアーが腕を振り上げ、自慢の爪を剥き出しにする。しかし、爪に弾丸は当たったものの弾丸は太い爪を巻き込み遠くへ飛んでいった。一瞬、ダークベアーの顔が苦痛で歪む。更に流石に今のは堪えたのか吹き飛ばされた爪の有る拳を強く握り締めて、怒りに身を任せて全力で此方に向かって突貫してきた。

「くそッ！ いい加減にしやがれ！！ サンダーランス！」

魔法を唱えると目の前に黄色い稲妻が槍の形をして現れる、そして向かってくるダークベアーに向けて驚くべきスピードで、分厚い体毛に覆われた腹を貫いた……。サンダーランスは腹を貫いた後役目を果たしたかのように音も無く消えていった。

「グ……………オ……………」

腹を貫かれたダークベアーは仰向けに倒れる、既に息は虫に息。恐らく腹部の損傷が原因だろう。俺は魔銃を懐のホルスターにしまい、仰向けに倒れ伏して殺せとでも言いたげに何の抵抗も見せないダークベアーに近づき、魔剣を上へ上げ……。振り下ろす。降りおろされた魔剣は首をスッパリ切断していた、傷口から真っ赤な血が流れ出してくる。

そのまま魔剣はしまわずに生き残っている奴が居ないか、辺りの様子を確認する……。どうやら今倒したので最後だったようだな、魔物が居る気配が無い。タツタツ……。俺は急ぎ目にエーリの隠れている木まで走る。此方に向かってくる足音に気づいたのか隠れている木からひょこつと顔をだす。

「怪我はないか？」

「有りません、それよりマコトさんは大丈夫何ですか？」

「ああ、心配いらさないさ」

片手をぶらぶらと振って元気と伝える、するとエーリは心底嬉しそうに溜め息をついた。魔剣に着いた血を一回振って落とし、真っ黒な鞘に紅い剣を収める。

「そんじゃ早いトコ帰るか？ またアイツみたいな奴らが出てきたら同じ事の繰り返しだ」

「あ………待ってください！」

ここから近い森からの出口の方向へ足を向け、数歩歩きだした時だった。突然、焦った声でエーリに呼び止められた。何だ？ と思ってくるりとその場で振り返る。するとエーリはダークベアーの死体を指さした、その死体の周囲にはドロップアイテムが降り注ぐ太陽の光に反射していた。確かアイテムが消えるのは三十分経ったらだったよな？ 補助魔法が切れたのはだいたい最後のダークベアーを倒してエーリの居る木に着いた辺りか？ だとすると、急ぐほどの事では無いな。

「ダークベアーの黒い体毛、それと………何だ？ この宝石みたいなのは？」

アイテムを拾い集めていると、光り輝く透明で綺麗な結晶が死体の近くに落ちていた。試しにエーリに聞いてみる。エーリはアイテムを回収し終えたらしく此方に戻って来ている様だったらしく、俺

の声を聞くと小走りで此方に来た。

「なあエーリ、この宝石みたいな奴は何なんだ？」

宝石をエーリに渡しながら、そう尋ねる。エーリは色々な角度からじっくりと宝石を眺めている、眺め終わるとその宝石について説明を始めた。

「これは“魔結晶”と言つて、魔物を倒すと極稀ごくまれに落とすもので、その魔物のランクが高い程高値で取引されています。ダークベアーはランクSS、ですので恐らく売値は……数十億」

俺は耳を疑つた、あの数を倒して一個しか無かつたのは残念だったが。まさかこれ一個で数十億か……。あまり表には出さない方が賢明な判断だろう。世の中善人だけじゃない、俺が数十億の売値を持つ魔結晶を殺しても奪いに来るだろう、そうなつたら護衛を雇うか……。俺のアイテムウインドウにしまい込んでも良いがそれだと、何時も持ち歩いている事になるから……。安全とはいえ此方は純日本人だ、大金を持つのは少し気が引ける。

「エーリ、この事は他言無用で頼むぞ？ 知られたら厄介だ……。……」

「え？ どうしてですか？」

「どうしてって……。こんな大金の元を持ってたら、少なからずそれを聞きつけた奴らが奪いに来るだろうが」

するとエーリは納得したらしく、それ以上の事は聞いてこなかった。やがて俺の分のアイテムの回収が終了し、城下町へ戻る事にし

た。帰り道では魔物と遭遇することなく城下町にたどり着いた。

城下町へたどり着いた俺達は一先ず、ギルドへ行きゴブリンの棍棒を見せてクエストを完了した。そして俺達は疲れた身体を休めるために宿屋に戻った。さて、ここで漸く錬金術師の本領、錬金術を使つてのポーシヨンの調合だ。予め買つておいた道具を使い、ポーシヨンを造る。まず薬草を磨り潰す、それが終わったら今度は火属性の魔法で沸騰させておいたフラスコに磨り潰した薬草を入れて、錬金術師のスキルを唱える。

「調合錬金」

短いスキルを唱えると磨り潰した薬草でお湯が少し緑色になっていたのが、スキルを発動した事で一気に濃い緑に染まっていく。それを約五分程冷まして完成だ。冷ましたポーシヨンを試験管に注ぎ、コルクで蓋をする。そうして大量に買った材料の約半分を使い切つて漸く作業を終えた俺は、造ったポーシヨンをアイテムウィンドウに入れた。これでいざと言う時に回復できる、効果も高いだろうか

ら売値も期待できる、まあ……味は保証出来ないがな。

「マコトさんってこんな事も出来るんですねえ」

横でずっとポーション造りを見ていたエーリが、感心しながらそう言った。

「俺は錬金術師アルケミストだからな、これ位朝飯前さ……っとそうだが俺はこれから一度冒険者ギルドに行くが……エーリはここで待っていてくれ。直ぐ戻ってくるから」

「分かりました。気を付けて行ってきてください、マコトさん」

一言、分かったと返事をして俺は宿屋を出た。

空がオレンジに染まり始めた夕暮れ時、次々と街の街灯が点灯し始めた。夕食の買い物などで賑わいつつある城下町の商店街を黒髪黒目、真っ白な白衣、鞘の真っ黒な剣。白衣を着た剣士を道行く人

々は珍しげな表情で彼を見ていた。だが彼は人々の視線を気にする事無く、颯爽さつそうと商店街を抜けて行った。商店街を抜け冒険者ギルドの門を潜り中へ入る、ここに来たのは冒険者なら必然とやらねばならない情報収集だ。

俺はクエストボードの横に配置されているテーブルの椅子に腰掛け情報屋らしき者を探していく。ゴツイ装備で身を固めた剣士、とんがり帽子に白いローブの魔法使い、バンダナを頭につけている悪そうな顔の盗賊、どうもこの時間帯はクエストが終わった冒険者達が集まるため、それなりに人が集まってくるらしい。

「アンタ……何か情報が欲しそうだな」

「全くだ、それらしい奴が見つからねえ」

……やっぱりここより裏通りを当たった方がいいか？
大体こんな所に堂々と情報屋が居るわけねえし……

「……ってうおわッ!? 何時の間に!」

椅子から飛び上がって背後を見ると、黒いローブと大きいバックを背負っている男がゆらりと立っていた。男は隣の椅子に腰掛けたので、俺も再び椅子に腰掛ける。顔はフードを被っているので良く分からないがどうにも怪しい。何者か聞こうと口を開きかけたが男の方が先に言葉を口にして、話し始めた。

「まずは自己紹介から始めようか？ オレは見ての通り情報屋だ、世間ではちよつとばかり名が知れている。さて、情報屋は気安く名前を言えないんで、ここではシャドーと名乗らせて貰う。それじゃ、次はアンタだぜ？」

「・・・・・・・・」

「まあそう警戒しなさんなって、言ったただろう？ 世間じゃちよつとばかり名が知れてるって」

男はテーブルに肘を付いてフードの奥に隠れている瞳をギラつかせる。その鋭い瞳に一瞬臆するが、自分に情報を得るためにここに来たのでは無いのか？ と言い聞かせ自分に付いて語った。

「ド田舎からやって来た冒険者ねえ・・・・・・・・それと連れが一人、だが冒険者と言う割にはその白衣は何だ？ ・・・・・・・・まあいいさ、名前は・・・・・・・・そうだな、ジャック、とでも呼んで置こう」

「それよりも、情報は金を払うのか？」

俺は重要な事を訪ねた。金が無いと情報は買えないからな、まさか“タダ”何て事も無いだろうし。

「当然その情報に対等な額は支払って貰うぜ？ 勿論、常識的な事じゃあ金は払わなくていい」

そうは言うが・・・・・・・・いい加減その瞳をギラつかせないでくれ、頼むから。金になるあの“魔結晶”を俺は持っているんだが、物が物だからな・・・・・・・・何せランクSSのダークベアーが落とされたのだぞ？ しかも魔結晶自体が非常に稀だと言って言うじゃないか。売って金にしてアイテムウィンドウにしまっただけは問題は無い、でも精神的な問題が・・・・・・・・。

「・・・・・・・・じゃあ常識的な事を聞こう、この近くで何か祭りと

かが開催されてるとか。開催される予定があるのは何処だ？ これなら常識的だろう？」

「ああ、これは常識的だ、最もとある国の国家機密の情報を教えろ、とかとなるとかなりの金は頂くぜ？ つと話がズレたな。そうだな・・・この近くのクローラクロス大都市って所で年に一回、武闘大会が開かれる。優勝商品は何と百万Gと聞いて驚け、“聖剣”だよ。でだ、アンタそこに行くんだろ？」

「ああ、その予定だ」

「だったらよ、一つ頼まれてくれねえか？ クローラクロス大都市に『カジノバー』って所があるんだ。その名の通り、中はカジノとバーが合つてな、その店長に合つて予約していた物を持ってきてくれないか？ オレはここに後一年は居るからよ。」

「請け負つてやつても損は無い、頼み事の一つや二つ、請け負つてやつても良いだろう。」

「分かった、それでその店長ってのはどんな人なんだ？」

「ん？ ああ、何か凄い博打好きだな。名前は確か・・・・・・・・・・“エイスケ・サイトウ”だ」

その言葉を聞いた瞬間、俺の心に衝撃が走った。エイスケ・サイトウ、前世に似たような奴が居た、博打が好きで、名前が“斎藤英介”。俺の親友だ、小学生から高校生まで世話になつた親友・・・・・・何故お前がこの世界、グランアースに来ているんだ？ 気が付けば俺は椅子から立ち上がった。

「シャドー、アンタの情報に感謝だな、一つ借りが出来た。待ってる、予約してた物持ってきてやる」

「行ってきたな、ジャック。そいつが気になってるんだろう？ アイツも親友がどうとかって言ってたしな……」

その言葉を聞き終わるか終わらないかの所で俺は既に走り出していた。まったく！ 英介の野郎めお前からは聞かなきゃいけない事があるんだよ！ あの遊び人が！！ 俺は心の中で親友を毒づきながら夜の城下町を駆けていった。空は日が沈み、雲一つ無い空に大きな月がゆっくりと昇ってきていた……。

第八話 情報屋からの依頼（後書き）

誤字脱字、矛盾などが有りましたら報告よろしくです。

第九話 過去

漆黒に染まった空に大きな月が昇り、その月明かりは森を走り抜ける馬車を照らし出していた。馬車はかなりのスピードで走行しており、時折、馬車の車輪が石を轢いてガタンと大きく揺れる。そんな中、馬車では二人の男女が話し合いを進めていた。

「クローラクロス大都市？　そこにマコトさんの友人さんが？」

「ああ、昔世話になったモンだ。それと、会うついでに年に一度開かれる武闘大会に出場してみようと思ってるんだ、しかも優勝商品は百万Gと聖剣だと。まあ最もコッチには数十億の価値がある魔結晶があるんだけどな。もし優勝したら聖剣はエーリにやるよ、俺は見ての通り、魔剣と魔銃で両手が塞がってる」

それに魔法も使えるしな、と付け足す。瞬間、エーリが思い出したかのように質問してきた、その問いは“マコトさんの両親ってどんな人なんですか？”と言う物だった。はつきり言うのと両親は俺が中学二年の頃に交通事故で死んだ、即死だったそうだ。当時俺には一つ上の姉が居た、俺は小さい頃から姉に付きつきりだった、ドジっ娘というか何て言うか……。そんな姉が見過ごせなくて俺は姉の出来ない事をしてきた。高校に入ってから弁当を忘れた姉のクラスまで行って弁当を届けたり、教科書を貸してやったり、料理を手伝ってやったり、とまあこんな感じでいつも過ごしていたから周囲の男子からはシスコンだ何だと言われることもあったが……。自覚はしてるさ。

俺の姉は俗に言う美人だ、それゆえに男子生徒からの告白が絶えなかった、余りにも数が多いんで闇討ちして数を減らした事も有っ

たっけなあ……今のは半分冗談だ。屋上に呼び出された姉を尾行して何度OKしないでくれと天に願ったか、俺の願いが天に届いたのか姉は告白を振り続けた、告白してくる男子生徒の中にはそれなりにイケメンの奴が居たがそういう危険物は俺が始末しておいた。さらに生徒だけじゃなく教師にも人気があるらしく姉の体目当てで放課後の空き教室に呼び出す教師が偶にいるが、勿論闇に紛れてボコボコにしておいた。

……話を戻そう、両親が死んだ後、俺達は親戚でもある斎藤英介の家に住む事になった。英介の両親は中々のお人好しで親戚と言っても所詮は余所者の俺達を嫌な顔ひとつせず、それもさぞ嬉しそうに「家族が増えたぞ！バンザイ！」「これが幸せな家庭と言う奴ね、貴方！」……仲がいいのは良いことだと思ふ。とまあそんな訳で俺達の高校生活の費用を払ってくれたり、誕生日プレゼントを買ってくれたり、流石にこのまま何か恩返しをしないのはどうだろうと思ひ姉と相談、その結果二人でアルバイトをしてコツコツ金を稼いで行こう、と言う事になった。

しかし、高校からの帰りに俺は死んでしまった……今頃あの人は何をしているだろうか？俺の死を悲しんでいるだろうか？それに……姉さんはどうしているだろうか？ちゃんと高校生活を遅れているだろうか？まさか自殺なんてしていないだろうか？そんな事になったら……。

「マコトさん！聞いてますか!？」

「っ！あ、ああ……すまん、ぼーっとしていた。それで俺の両親の事だったか？」

エーリの呼びかけで直ぐ様ネガティブ思考を中断して、俺の両親

の事を大まかに説明する。

「俺の両親は三年前だったかな？ その時に不慮の事故で死んじゃまってさ……」

「う、ごめんなさい！ 亡くなっているとは知らなくて……」

はつとした顔で直ぐに頭を下げて謝ってくるが、俺はこの話を続けまいと素っ気なく応える。

「いいさ、もう済んだことだし」

その後を暫し沈黙が支配するが、空気が重くなってしまったと勘違いしたのかエーリが話題を変えて話しかけてきた。

「あ、あの！ 星空が綺麗ですね！」

馬車の中から空を見る、空は城下町を出発した時とは打って変わってドンヨリと雲が月を覆い尽くしている。それに気がついたのかあたふたと慌て始める。恥ずかしさを紛らわすために再び話題を変えようと奮闘を始める。何回かそれを繰り返して居るうちに漸く、話が一致した。

「眠たいですね！」

ほぼヤケクソ気味な口調で叫ぶエーリ、俺はそれに返事をする事なく大きな欠伸を一つ。今日一睡もしてないんだよ、だが今回はいくら馬車が揺れるとはいえ同じベットで一緒に寝るわけじゃないから、男女問わず睡眠が取れる。俺は馬車の荷台の壁によし掛かり少

しでも寝ようとする……………。

「あれ？ もう寝ちゃうんですか？……………ってそう言えば寝てないんですけどっけ？」

「寝るから後よろしく、テキトーな時間に起こしてくれれば良い」

だんだんと馬車が揺れるのが心地よくなってくる、まるで揺りかごの様に揺れる馬車は着々とクロウラクロス大都市へと進んでいた、恐らく明日のお昼頃には着いているだろう。ちなみに武闘大会の参加申し込みの締切は明日の午前0時までらしい、それまでには宿屋を取って色々と街を観光していこう。あ……………宿屋で思い出したが、念の为一週間分部屋を取っておいた宿屋代って結局一日しか泊まってないから何だか損したなあ……………って話さ。

ダークベアーとの戦いで疲れきり、そして睡眠不足でコンディションが最悪なこんな状況でも逆に目が覚めて眠れない、と言うことは無い様で、俺の意識は急速に深い眠りの中に引きずり込まれていった……………。

『なあ姉さん、あのさ……今好きな人っている？』

誰もいない教室に、俺と姉さんは二人っきりで残っていた。

『どうしたの？ 藪から棒にさ』

俺は姉さんの笑顔が忘れられなかった、俺と一緒に居る時だけ、飛びっきりの笑顔を魅せてくれる。俺以外の人間には、俺が知っている限り誰にも魅せていない。

『別に理由は無い！ それより居るの？ 居ないの？』

『そうだねえ……やっぱり誠が好きかな？ 私は』

いつの日か姉さんがふらっと何処かへ居なくなってしまう、そんな夢を偶に見る。俺に別れを告げて手を振る姉さんの悲しそうな顔が、夢であっても忘れられない、忘れることができない。

『へ、へえ……姉さん……そうか』

『大丈夫だって！ 誠が私に告るまで誰とも付き合ったりしないからさっ。』

姉さんは俺の前から消えたりしない、居なくなったりなんてしない、そう心に言い聞かせ続けた。だけど……。

『……姉さん、一つ約束をしよう、俺達は家族だ、だから・

『……………何処へも行かない事』

『……………私が誠の側から居なくなると思うっ？』

『それもそうだ』

俺はあの日、事故に合い、死に、異世界へとやってきた。それは・
……………。

『はい、じゃあ指きりしよう！ ゆびきりげんまん、嘘ついたら
針千本のくますっ！ ゆびきった！』

あの時の約束を、俺が“自ら破ってしまった”と言っことだ。

「っ！？ ………………何だ夢か……………姉さん……………」

余り良い夢とは言えない夢を見てしまった。馬車の外は朝日が昇
っており、隙間からチラチラと朝日が入るため少々眩しく、起き上

「その……マコトさんが寝てから私、眠くなっちゃって……そこに置いてあった布をマコトさんに掛けたら私も眠っちゃって……」

馬車の中の端っこを指さしてそう説明する、何でそこに布が有ったのかは知らないが取り敢えず事情は分かった。俺は一人溜め息を吐く、まさか自分の知らぬ間に恐らく同年代の異性と肩を並べて眠っているとは……。立ち上がって壁に寄りかかり、耳を澄ますと取りの囀りが聞こえる、馬車の中の布を捲ると青々とした葉が付いている木が横を通り、遠くなっていく。森から出されるマイナスイオンは懐かしい感じがして、童心の記憶を思い起こした。

何回か深呼吸をして森の空気を味わう、新鮮な森の空気が肺へと送られる。そう言えば森の緑は目に良いつて聞いた事が有ったな、俺は余り視力が落ちにくいらしくて、何時間ゲームとかパソコンとかやっても全然視力は下がらなかった。しばらく森の景色を眺めていたがそのうち、自分の腹がぐぐつと腹が鳴り、空腹を訴えていることに気が付いた。思い返せば昨日の夜は何も食べずにそのまま馬車を冒険者ギルドで借りて、宿屋にはしばらくクローラクロス大都市に行くから、と伝えてエーリを引つ張り出してきたから腹が減っていてもそれは仕方ない。アイテムウィンドウを開き、入れてあった食料のおにぎりを二つ取り出して、一つをエーリに渡す。

「ほれ、飯だ」

「あ、ありがとうございます」

このおにぎりは出発前に商店街の店に売っていたから買ったものだ、海苔は巻いていなくて白いご飯の形を整えて塩を振り掛けただけだが、これが結構いける。俺とエーリは食べ終わるとその場に座

り込んだ。俺はあぐらをしている状態でカジノバー、とやらを営んでいる店長、もとい英介の事を考えてだしていた。確かアイツも“あのゲーム”をプレイしていたはずだ。俺も同じくプレイしていた職業は俺はアルケミストで英介はギャンブラーだった、如何にも賭け事が好きなアイツらしい職業だ。……………それよりも何故英介がこの世界に居るんだ？

……………考えたくは無いがアイツも俺と同じく死んで、神様に俺の事を聞いてこの世界に来たのか、それとも偶然、クローラクロス大都市か何処かの城で勇者として召喚されたか。そのへんは会って確かめるしかない、それと姉さんの事も聞かなきゃならない。

「おうい！ 見えてきたぞう！」

突如として御者台に座って居る人から声が掛かった、その人は前にクエスト場所まで乗せていってくれた人だ。俺はその人が指さす方向を見た。高い城壁に囲まれていて、巨大な門のその先には人々が賑わいを見せ、更にその先には天まで届きそうな程にまで突き出た塔が、塔が建てられている城は大きく、この都市の何割かを占めているだろう。やがて馬車はクローラクロス大都市の玄関でもある門へと近づいていった……………。

第九話 過去（後書き）

誤字脱字、矛盾などがありましたらコメントよろしくです。

第十話 ギャンブル

「止まれ、よし、積荷を確認しろ」

門に着くと衛兵の指示で馬車が止まる、馬車の積荷を確認するため衛兵の一人が布を捲って中の様子を確認する。中は俺とエーリと最初から積まれていた物資しか無い、取り敢えず俺達は最低のフラックである灰色のギルドカードを取り出し、衛兵に見せる。衛兵はそれをしばらく見るとカードを俺達に返し、先程馬車を止める様指示した奴の所へ行った。

「ふむ、ようこそ、クローラクロス大都市へ」

これで俺達は都市の中に入った、門の先には人々が賑わいを見せており、とても活気がある。馬車が進むと自然と人々は避けていく。前方には大きな噴水が有り、多数の人々がベンチに座っていたり、噴水を眺めていたりしている。都市の風景を眺めていると一件の宿屋を発見した、看板らしき物には『癒しの宿』と書かれている。馬車を降りてその宿屋へ入っていく。

「いらっしやい」

受付にはおばさんが宿帳らしき物に何か書き込んでいるようだった。取り敢えず受付のおばさんに話しかけて三日分部屋を借りる事にした、懐から手をつ込んでGを取り出す用意をする。

「二人分で50Gだよ」

「あいよ」

懐から手を出してGを渡すと同時に鍵を受け取る、今回は前回の様な失敗はしない、ちゃんと二人分部屋を借りた。片方の部屋の鍵をエーリに渡して二階の部屋に繋がる階段を登っていく。そして階段を登りきるといくつもの部屋の扉が見えた、鍵に付いていたタブの番号3号室と書かれた物と同じ部屋を探す。3と書かれた扉を見つけて鍵を開ける。ちょうど隣の4号室がエーリの部屋らしい、用があつたらそっちに行く、と伝えて俺は部屋に入った。扉を閉めて鍵をする。腰に掛けていた鞘ごと取り外してベットの横にポツンと配置されている小さなテーブルに置く、そして横に有る椅子に腰掛ける。ふう、と一つ溜め息を吐く。

「英介・・・・・・・・」

この大都市の何処かのカジノバーにアイツは居る、今直ぐにでも会って話をしたい、俺が死んだ後どうなったのか。それを聞きたい、そして姉さんの事も。一応姉さんとは血は繋がっていないとはいえまだ一緒に住んでいた筈だ、姉さんも一人暮らしはしていないかつたし。俺が死んだ事で姉さんに何かあつたとしても英介が何かしてくれている筈だ、アイツは重度の博打好きとはいえ知り合いが困っている時は文句の一つも無しに助ける奴だからな。

姉さんに何かあつたら英介の奴が何とかしてくれているだろう。さて、ここで休んでいても何も始まらない、今日やるべき事は早めに終わらせてしまおう。ええっと、まずは英介の所に行って、それが終わったら武闘大会のエントリーを済まして、最後にエーリと、来れば英介も一緒にこの都市の観光を試みよう。

「とはいえ、そのカジノバーってのは一体何処にあるんだろうか」

手当り次第に聞いて回ってみるか？ 有名な店だったならそれなりに知名度があるかもしれない。まだお昼過ぎ位だが、早めに探しておくに越したことはない。俺は椅子から立ち上がりテーブルの上に置いておいた魔剣を取り、腰に付ける。そのまま部屋を出て鍵を掛ける。そしてエーリの部屋の前に行きこれからちよつと出かけてくる、と伝えたが何故かエーリが短剣を装備した状態で部屋から出てきた。エーリも何処かに行くのか？ と聞くと。

「私もマコトさんと一緒に行きます！」

と言う事らしく、何故だか一緒に行動することになったエーリと共に宿屋を出た。

真上にあつた太陽も、今は空をオレンジ色に染め上げながら沈んでいく。あれから俺達は手当り次第にカジノバーに付いて聞いて回ったが、場所は分からなかった、聞いたのはそういう店があるかも、と言う噂。それもこの都市のカジノの地下への入口でヒラケゴマと唱えると目の前に扉が現れ、入ってみるとそこはカジノバー……

・何だとか。まるで信憑性のない都市伝説を聞いているかの様に最初は聞き流していたが、それと同じ、またはそれと似ている物を何度も聞いているうちにだんだん本当にあるのでは無いのか？ と言う気がしてきた。

しかし依然として場所は分からないままで、ここは都市伝説みたいな奴でもやってみるか？ カジノの地下でヒラケゴマって唱えるんだっただか？ ……どうにも胡散臭うさんくさいな、だが、この世界には魔法やスキルがある世界だ、確かゴースト系の魔物は出るとエーリが言っていた。なら都市伝説の一つの二つ、有ったって何ら可笑しくはない筈だ。

「ここがカジノか……………」

俺がそう呟き、豪華な装飾が施された看板をまじまじと下から見上げる。カジノの入口にはお馴染みのバニーガール……………では無く威つい顔にグラサンをしたガードマン二人が端に立っている。流石に未成年は入れないのだろう、ガードマン二人がエーリの様子を伺っている。

「悪いな、こんな事に付き合わせちまって。俺はこの中を調べるからエーリは先に宿屋に戻っておいてくれるか？ そうは遅くならぬとは思っけど」

「いえ私の方こそ勝手に着いてきてしまっ……………」

慌てた素振りでも手を振る、しかし依然としてガードマン二人は此方の様子を伺っている状態だ。

「先に宿屋に戻ってもやることはありません……………そうだ

！ 私近くのお店を見てます。ですから用が済んだら声を掛けてください、それじゃ」

少し早口でそれを言い切ったエーリは、道具屋と書かれた看板の店へ白いワンピースと腰まで届いた金髪を揺らしながら小走りで走っていった。一方、それを見送った俺はカジノの入口に身体を向けて、中に入る。エーリと別れた事でガードマンの警戒も解けた様で俺が中に入る時「ようこそ」と一言言ってくれた。

「おお、結構人居るなあ……………」

天井には豪華なシャンデリア、真っ赤な床、受付のバニーガール、スロットが回る音、賭けに勝った男の雄叫び、如何にもカジノらしい。俺の足は自然と受付へと向かっていた。目的を忘れ、残り全額のGをアイテムウィンドウから出す。それを受付に置き、コインと交換してもらう。

「いらっしやませー、コインとの交換ですね？ 少々お待ちください」

付けているウサ耳をひよこひよこ揺らしながらGとコインとを交換し、黒く四角いコインケースにコインを入れて俺の前に置く。これでポロ負けしたら魔結晶を売り出すしか……………てゆーかあのクエストSSランクの奴を八匹倒したけど秘密にしてるからな……………だが実質Fランクのあのクエスト報酬が1500Gとはどういうことだ。

しかも納品アイテムを渡してもこの報酬額、ちまみにゴブリンの棍棒とか言う奴納品した。さて、見たところスロットと闘技場にレースか……………ここは定番のスロットでもやってみようか？

俺はスロットの台まで歩きだした。横一列にスロットの台が十台程並んでいて、裏にも同じように並んでいる、俺は取り敢えず一番端っこの台にしてみる。コインケースからコインを三枚取り出し、スロットの台に入れる。そして右に付いているレバーを下に下ろす。その瞬間目まぐるしい速度でスロットの絵柄が回りだす。

「お？ おお？ 揃うか？ 揃うのか？」

……結果はスライムっぽい魔物の絵柄がリーチになったが、最後に違うコウモリみたいな魔物の絵柄が止まった、ハズレだ。俺は今度こそは、とコインを入れる。まず一つ目の絵柄が止まった、その絵柄は7、当たれば500コインを稼げると書いてあった紙を見る。やはりそれは当たれば500コインの大当たりだ。次に二つ目の絵柄……7。リーチ、次で7が止まれば大当たりだ。

俺は高鳴る感情に胸を熱くしながら徐々にスピードを落とすとしていく三つ目の絵柄をじっと見つめた。そして……止まった、絵柄は7、遂にスリーセブンが揃った。

「っしゃあー!!」

思わず台から立ち上がる、他の客が何事かと此方に視線を向けるが今はもうそんな事どうだっていい。今肝心なのはスロットからジャラジャラ出てきてるコインの山だ！

やがてそれはどんどん溜まっていき、やがてコインケースから溢れ出そうになる、コインケースを取りに行こうかと思ひ、急いで受付へ走り出そうかと一歩踏み出した時だった。突然横から何か黒い物体が飛んできた、慌てて身体を捻ってキャッチする。キャッチしてそれは大きめのコインケースだった、俺はコインケースから目を

離し、飛んできた方向を見た。一人の男が此方に向かって歩いてきた、薄い茶色の髪に、真紅の眼、銀縁メガネ、着こなしたバーテン服。

間違いない、コイツは………英介だ。

「誠じゃないか！ お前今まで一体何処に行ってたんだ！？」

やっぱりだ、この声、やっぱり英介だ！

「英介なのか！？ 英介だよな！？」

「ああそつだよ！ 僕だよ！ 斎藤英介だよ！」

「やっぱりか、それにしても久しぶりだな。まあ取り敢えず座れよ、話したい事がある」

「ああ、分かった。話したい事ね、僕も“重要”な話あるから誠が先に言ってくれよ」

英介はドサツと音を立てて俺の隣のスロットの台に座った、俺達は自分のコインケースからコインを取り出して入れる、レバーを下げてスロットを回転させる。

「俺が死んだ後、姉さんに何か変わった事は有ったか？」

ゆつくりとした口調でそう質問する、しかし英介は奇妙な物を見る目で言葉を返してきた。

「はあ？ 何を言っているんだい？ 君は死んでいたのか？ 僕は

行方不明になったとしか聞いていないよ？ だって君は突然家に帰ってこなくなっただじゃない、連絡も着かないし、何処に行ったのかも分からない。もしかしてどっかの山で自殺でもしていたのかい？」

「そっちこそ何を言っているんだ？ 俺は確かに死んだぞ？ 死んでからこの世界に来んだぜ？ そっちは何なんだ？ 英介も死んだからこの世界に来たんじゃないのか？」

「冗談は止めてくれよ、僕は死んで何かいないさ。ただ学校の帰りに突然目の前から訳の分からないブラックホールみたいな奴が出てきて、それに吸い込まれたんだ。そしてこの世界にやって来ていたという訳さ、だから自分が死んだ何て覚えはないんだ」

スロットの絵柄が揃い、コインが流れ出してくる。再びコインを入れてスロットを回す。英介は先程から連続で絵柄を揃えている。恐らく職業ジョブの運のステータスが高いのだろう。

「……………だとしたら、元の世界とこの世界は何か特別な方法を通じて繋がっている可能性があるな。この世界は他の世界にリンクして勇者を召喚する様な世界だ、元の世界と繋がっていても可笑しくはない」

「そう言えば、誠は死んでこの世界に来たとは行っていたけど。どうやってきたんだい？」

思い出したかのように聞いてくる英介、その視線は依然としてスロットの絵柄を見つめている。その問いに俺はレバーを下げながら答えた。

「死んだ後に神様に呼び出されて、ネット小説何かでよく見る転生

「つてやつでこの世界に来た」

「へえー、神様ねえ……それじゃ特典みたいな奴も貰えてたりする？ 多分その白衣を見る限り職業は錬金術師ジョブ アルケミストだよな？ となるとステータスは倍になってたり？」

「正解だ。で、お前は？ 職業は遊び人ジョブ ギャンブラーだろう？ ステータスはしらんが」

英介はスロットにコインを入れながら淡々とした口調で答えた。

「そう、僕の職業は遊び人ジョブ ギャンブラーだよ。この世界に来たらステータスウィンドウが開けたんでね、LVはMAXでステータスはHP、MP、防御、魔防、速度、攻撃速度、最後に運が倍になっていたよ。でも装備は無かったんだよねえ、流石にそこまで親切設計じゃないか」

7が三つ揃い、コインが雪崩てくる。何処から出したのか知らないが、英介が片手でコインケースを渡してきたので、それを受け取りコインの山が出来上がった。コインケースを取り敢えず下に置く。既に英介は7が揃いに揃っている。コインケースが今はもう多分10個はいつているだろう。

「さてと、続きはまた後でにしようか。キリもいいしね。それじゃ着いてきてよ、僕の店にね」

何時の間にやら立ち上がっていた英介、スロットにコインを投入するのを止めて、下に置いておいたコインケースをアイテムウィンドウにしまう。それを確認した英介が背を向けて歩きだした、先程英介が座っていた台にはコインケースが無い、という事はアイツも

アイテムウィンドウにしまったのか。英介の後ろに着き、真紅の床を歩く、そして従業員専用と書かれた立て札が有る廊下へと進んでいく。

この廊下は従業員専用だが殆ど人が通らないみたいで、自分の足音が廊下へ響きわたる。そして廊下の突き当たりには古ぼけた扉が一つ。扉の前に着くと、英介が立ち止まって此方を向く。

「さあ、ようこそ、カジノバーへ………ってね」

第十話 ギャンブル(後書き)

誤字脱字、矛盾などがありましたらコメントよろしくです。

第十一話 あの日約束(前書き)

うっ……最近書くペースが落ちているぞ俺。

第十一話 あの日約束

「ヒラケゴマ」

英介が僅かに聞き取れる位の音量でそう呟いた。あの噂の通り、その言葉がキーワードだったらしく古ぼけた扉がカチャと鍵が開いた様な音が鳴る。金属の取っ手を掴んだ英介は取っ手を捻り扉を開けた。俺はそれに無言で着いていく。中はよく見るバー内装で結構広い、壁際には横に長いソファにテーブル、その上には何も乗せておらずガラスのテーブルが天井から吊り下がっている少し薄い光を発するランプの光を反射している。

それまでは良いが壁に並んで五台ほど配置されているスロット、同じくその隣にはルーレットが配置されていて、意外にもバーの雰囲気とマッチしている。他にもダーツやビリヤードと、広い店内に所狭しと配置されている為ほんの少し狭く感じる。ソファにお互いが対になる形で座る。銀縁メガネのブリッジに人差し指を軽く当てて口を開いた。

「さてと。まずは誠の姉さん、美咲さんの話だったね。えーと、君は死んだ、とは言っているけどコツチじゃ行方不明って事になっていて、警察で捜索が進められている。美咲さんにとっては死んでいるより行方不明の方がよかっただろう、だって行方不明ならまだ生きている可能性があるんだからね。まあ取り敢えずは誠は死んでいない、という事で話を進めようか」

「ああ」

「それじゃ、話を始めよう」

英介は自分のバーテン服に手を突っ込み一枚の写真を取り出し、テーブルの上に置いた。それは俺と英介と姉さんの三人が写っているプリクラだった。

「美咲さんは君が行方不明になったと知り、酷く絶望していた。それはもう一日三食のご飯を一日一食しか食べなかつたりするぐらいにね。で、これは流石にマズイと思って美咲さんに必死に皆で言い聞かせたんだ、誠が君を置いて何処かに行く事なんてありえない、きつとその内ひよっこり帰ってくる……ってね。でも、余り効果は無かつた。ますます状態は悪化していくばかり……遂には部屋に閉じこもって学校にさえ行かなくなつたんだ」

俺は無言で話に耳を傾けた。しかし、自分が姿を消した事で姉さんとの約束を破り、更には姉さんを絶望させてしまった。どっどん自分の心が闇に飲まれていく、大きな罪悪感に……。

「ああ、心配しないでくれよ？ 部屋の前にご飯を置いてる、一応は食べてるみたいだった。それと……どうやら美咲さん、ずっと部屋の中で君の事を呟いているんだ。偶に部屋の前を通ると聞こえてくるんだ「誠……誠……」って……
・呼んでいるんだよ、君を」

知らなかつた……姉さんがそこまで追い込まれていたなんて……。それなのに俺は嬉々としてこの世界を楽しもうとしていた。だが漸く知る事が出来た、姉さんの心境を、絶望を、でも遅かつた、遅すぎたんだ、せめて転生する前に神様に姉さんの事を聞いていればこんな事には……。

「でも、僕はこうしてこの世界に来てしまった……。もう

美咲さんの心の支えとなるのは父さんと母さんだけだ……。美咲さんが今どうなっているのかは僕にはもう分からない、無事を祈るだけだ……」

「なあ、俺は……。俺達は、この先どうしていけば良い？何をすれば良い？」

自分の声とは思えないほど、小さく、掠れて、弱々しい物だった。英介はそれに酷く悔しがつている様子で、自身の唇を強く噛み締めながら言った。

「僕達には、ただ美咲さんの無事を祈り続ける事しか出来ない。……大丈夫さ、父さんと母さんが何とかしてくれているハズだよ。きつとそうさ。父さん特有の寒いオヤジギャグで何とかしてるって！……効果の程は見込めないけどね」

「ははっ、そうだな」

英介の御陰で場の空気が見違えるほど良くなった。俺も何時までもよくよしてられないなあ……。今出来る事はただ祈る事、姉さんの無事を祈るだけ、今はそうしていればいいんだ、しいよりはマシだ。姉さん、アンタの弟は元気にやってるよ、だから心配しないでくれ。元の世界に居る姉に心でそう願った。

「それに、“美咲さんがこの世界に来る可能性も無い訳じゃあない”」

唐突だった、余りにも唐突過ぎて頭の処理機能が追いつかなかった、まさに俺の頭はフリーズしていたも同然だった。

「……………どういう意味だ？」

俺が声を低くして問いかけると、英介は銀縁メガネのブリッジをもう一度くいと上げ、腕組みをしながら言った。

「まあこれは僕の仮説だけだね。って事で聞いてくれ。まず誠と僕はこの世界に来ている、これは偶然かい？ いや、偶然にしては運が良すぎる、っー事は美咲さんの後から来るんじゃない？ と言う仮説だよ。確証はモチロン無いけどね」

「取り敢えず殴って良いか？」

「うわぁー！ お願いだからその振り上げた拳を御収めください！
！」

はぁ、全くコイツは何も変わってないな、いやたった数日間の間で何が変わるんだ？ もう一度大きく溜め息を吐く。

「全く、お前って奴は……………とそうだ。シャドーって奴から頼まれてな、お前のトコに言って届けものを受け取ってきて欲しいって言われたんだが」

「ん？ ああ、これね」

英介は自分のアイテムウィンドウを開いて、一つの木箱を取り出した。

「これを渡してくれ」

渡された木箱を受け取ると、何だか中身が気になってきた。だが

俺はその欲を脳内の何処かに吹き飛ばして、その木箱を俺のアイテムウインドウにしまった。

「……………なあ英介、一つ聞いていいか？」

話のネタが無くなり、お互い無言でただソファに座っているだけの状態だったが。不意に気になる事が思い浮かんで来て、この空気を入れ替えるためにも俺は話を切り出した。

「なんだい？」

「何で英介はカジノバーを経営しようと思ったんだ？ お前の事だから繁盛はしてるんじゃないのか？」

英介は顎に手を当てて言った。

「何でって……………特に意味は無いよ、カジノとバーがやりたくて、一緒にして経営してるってわけさ。で、実はここ情報屋の客もくるんだ、それ目当てで来る客も多い。実際表の店とは違ってこっちは裏の店だからね、正直あんまり客は来ないよ。頻繁ひんぱんに来るのがシャドーだね」

それを聞きながらソファに座る。そうか、とだけ答えて、思い出したかの様に今日のスケジュールを脳内で再生する。確か今日は武闘大会の参加登録に英介に会う、後者はもう完了した。それに時間は分からないが恐らく先程カジノに入る前は日が既に傾いていた。……………あ、エーリ忘れてた。うわー、今頃怒ってるんだろぅない。さっさと参加登録しないと参加登録が締め切られるかもしれない。

「そつだ、なあ英介。武闘大会に出場してみないか？」

俺は何の脈拍もなく話を切り出した。口を開けたままポカンとしている表情で、突然だねえ……と小さくボヤク英介。

「何で？」

「そりゃ、優勝賞品だよ。シャドーが言ってたがどうやらそいつは聖剣つて噂だ、それと賞金百万Gだよ。どうだ？ 参加してみないか？ 大会にはタツグ戦もあるみたいだしさ」

俺はこの街を歩いている時に見つけた張り紙を思い出した。どうやらシングル戦にダブル戦、それにギルド同士がメンバーの中から五人選んで他のギルドと戦う、と張り紙に書かれていた。ギルド、と言うのは冒険者ギルドとは異なつて、冒険者達が創つた集まりみたいな物だろう。

「それと……俺達と一緒に魔王を倒さないか？ いわゆる冒険の旅つて奴だ。どうせ儲かつてないならよ、コツチに来た方が楽しいぞ？ ちなみに金髪美少女も居るぞ？」

その瞬間、英介が突然ソファから立ち上がり座っている俺の肩をマシンガントークと共にグワングワンと揺さぶってきた。

「何い！？ 金髪美少女だとお！？ ならこんな店とはオサラバだぜふははははは！ 大会にも出場してやるさ！ さあ共に旅をしようじゃないか誠！！ ひやはははははは！！ 美少女サイコー！ 金髪サイコー！！ 遂に僕にも美少女と一緒に旅が出来るんだね！ 遂に長年の夢が叶つたぞおおおお！！！！ H A H A H A いやあ誠の御陰で美少女に出会えるなんてねえ！ もう誠つて実は神じゃ

ないの？ 実はそんなんじゃないの？ そうなんでしょ？ 縁結びの神様か何かでしょ？」

「ちょ……やめ……うぶっ……」

聞こえていないのか全く反応しない英介、このままではゲロツてしまっ、何とかして止めなくては。俺は渾身の力で誰も弱点である弁慶の泣き所に蹴りを入れた。いくら攻撃力が倍になっていようが魔法使い系の錬金術師の力なんてたかが知れてるし、英介だって確か防御とかいろんなステータスが倍になってたとか言ってたから多分大丈夫だろう。

「おんぎやああああああああああ！！！！ 僕の弁慶の泣き所があるあああああ！！！！」

案の定、英介は俺の肩から両手を話し床の上を脛すねを抑えながら転げまわった。ざまあないな。

「はあ……はあ……はあ……全く少しは落ち着けよ」

着崩れた白衣を手早く直す。今だ床で脛を抑えて芋虫みたいな状態で右を向いたり左を向いたりとして、何だか新種の生き物を見ている気分になってくる。しかもウネウネしてるし……

「な、なんてことをするんだあ……この白衣の悪魔め……」

「あゝあ、残念だなあゝ。どうやら俺と金髪美少女だけで旅をする事になりそうだよ」

「すみませんでした！ だからそれだけはやめてください！ この通り！！」

さっきまで床で悶えていたが瞬時に床に見事としか言えない完璧な土下座を披露した。何故だか負けた気がするのは気のせい？

「まあ今回は許してやろう、だが次は情け容赦無く最上級魔法を零距离でぶっぱなすからな？」

「もう二度と絶対に何があるうともしませんツツツツ！！！」

そう言ってももの凄い勢いで頭を下げる。勢いのあまりバーテン服からスルッと何かが落ちていく。それはやがてガラスのテーブルに落ち、カチャと音を立てる。俺はそれを手に取ってみる。どうやら落ちたものはネックレスらしく、チェーンが眩く銀色に光を帯びている。

蒼く澄んだ宝石が裝飾されており、どこことなく気品がある。英介はアクセサリーとかは滅多あるに着けていない。なのでこれはこの世界で手に入れた宝か、或いは客が忘れ物をして、その客が取りに来るまで預かっているとか？

「これお前のか？」

ネックレスを何時の間にもやら土下座の状態から立ち上がっている英介に渡す。すると今まで忘れていたかのように「あっ」と声を出す。

「そつだそつだ。すっかり忘れていたよ。これを誠に渡してくれって美咲さんが……」

「姉さんが？」

「ああ。実は美咲さんが君の誕生日が近いから何か買ってあげたいって言っていてね。それで暇を持って余していた僕を引っ張ってアクセサリー店に行ったんだ。そして美咲さんは悩みに悩んだ末にこのネックレスに決めたんだ。でも……誕生日まで後三週間で切ったって所で君は行方知れずとなった。本当は美咲さんが渡したかったんだろうけど、頼まれたんだ。このネックレスを君に渡してくれと……」

英介は渡されたネックレスを俺に渡し返し、受け取ったネックレスを無言で首に着けてみる。着けた直後に、俺は懐かしい安心感にも似た何かを感じ取った。

「これで僕の頼まれ事も終了だね。さて、さつさと武闘大会に参加登録しなくちゃね、締切は明日の午前零時までだからね。そう焦ることはないからゆっくり行こうよ」

「悪いがそんな訳には行かないんだよ、外でその金髪美少女が待ってるんだ」

「待たせてたの!？」

「待つてると言ってもどっかの店見てくるって言ってたからな、と言っても早く行くに越したことはない」

そして俺達は早足にカジノバーを後にし、カジノを出た。首に着けているネックレスを握り締め、姉との数々の思い出を脳内で再生しながら俺は誓った。もう二度と姉さんを悲しませない、そして姉

さんの弟として恥のない生き方をする。この二つの誓いを頭に焼き付けて俺はエーリを新たな仲間、親友でもある英介と共に探し始めた。

既に日は暮れ、街頭が光を放っている。空には大きな満月が雲一つ無い空で輝いている、そして空には一つの流星が宇宙そらを駆け抜けた。その光景はとても印象に残った……。

第十一話 あの日約束（後書き）

誤字脱字、矛盾などがありましたら報告よろしくです。

第十二話 動き出した闇

空は暗黒の雲が広がり、天の光が差し込む隙間すらない。そんな空の下、一つの禍々しさを感じさせる城が建てられていた。鉄鋼の門に行くための橋には黒の鎧に身を包んだ兵士達がそれぞれ槍を持って渡っていく。最後の兵士が渡り切ると、ギギギギと重々しい音を立てて橋の鎖が巻き取られ徐々に上げられていく。

鉄鋼の門には矢塔に配置されている兵士が弓を手に持ち、目を光らせている。城壁には無数の茨が成長し、絡みついていていた。禍々しい姿のその城のとある一室にて、黒い羽を持ち、全身を黒一色の比較的軽装の物を着ている物が一人、王と思われる男に赤いカーペットに片膝を付き、丁寧な口調で会話をしていた。

そんな城のとある部屋に一人の男がいた。男は玉座に座り、表が紫、裏が赤のマントを羽織り。強靱な体つきは見たもの全てを圧倒し、誰もが百戦錬磨と思わせる、そんな肉体を持っていた。厳つい顔からは鋭い目付きで、その眼光のみで一騎当千の戦士でさえ、尻込みしてしまうのではないだろうか？

広い部屋に玉座に座る男、魔王。魔族の頂点に立つ者として、威厳に溢れている。この世界、グランアースに蘇ってから十数年、世界の人々は既に魔王が復活したことを知っている。だが本当の目的は当本人である彼にしか分からない。分かるはずもない。人間風情に気高き魔族の心など分かる訳がない、我が心の奥底に秘めている野望など、到底分かるまい。そう…… “複数の世界を掌握” など、理解出来まい。

ニヤリと不気味に微笑む。歴代の魔王達にも不可能だった複数の

世界の掌握、だが今の魔王、我には可能だ。この世界に稀に現れるという“次元の狭間”それを調査し続け、発見した。次元の狭間には世界を行き来する力がある、と。だが行き来するには膨大な量の魔力が必要になる、しかし・・・我はそれさえも何の苦も無く乗り越えていった、簡単だ。それを超すほどの魔力を手に入れば良い。

魔王は蘇った時から魔力の量が異常なほど多かった。それこそ魔族が腰を抜かす程に。その魔力を有効活用する為、自ら魔法の道を進んだ。だが何をどうやっても閻属性以外の魔法の習得には至らなかった。しかし、魔力の多さがそれを補っていた。剣を捨て、杖を持って戦った魔王は歴代でも今の魔王を合わせてたったの二人。

殆どの魔王は剣を武器に生きた。しかし杖を武器に生きた魔王は他の魔王と比べると魔力はずば抜けて高かったのだが、それ以外が魔族の王にあるまじき低さだったので、その魔王は自らに定期的に補助魔法を掛け続け、何時でも戦闘に備えていたらしい。

しかし現魔王は杖を武器としているため物理攻撃力は他の魔王に比べれば低い、膨大な魔力とグランアース全ての閻属性の魔法を習得したと言っても過言ではない程にまでとなった、閻属性魔法の数々。補助魔法により自身を強化し、より強くなる事が出来るのは杖を持つ魔王だけ。それも魔道書を読み、魔法を習得した魔王だけが使える補助魔法。

例えどんなに強い勇者が現れようと、その全てを蹴散らす自信が、魔王には確かに有った。それは過信では無く、自分の強さによる圧倒的な自信。早々にこのグランアースを支配し、次は新たな世界を支配していく。そして複数の世界を掌握する、世界がどれほどの数なのかは分からない、だがどれほどの数であろうとも支配する野心

に溢れていた。

ククク……と薄気味悪い笑いをしながら魔王は、先月にクローラクロス大都市に送り込んだ兵士が持ち帰ってきた情報を思い返していた。『計画は順調。武闘大会の閉会式に計画を発動可能』その計画は遂に魔王が動き出したと世界に知らしめる為の物であり、失敗は許されない。

クローラクロスを落とせば次々と周辺国に緊張が走る。時間を与え、自軍を強化されては面倒だ。そこで、クローラクロスを落とす次第、魔王軍を周辺国へ向かわせ、多数の城の同時攻略に当たる。無論、兵の質も今まで強化してきた事もあって段違いだ。ちよつとやそつとじゃ全滅など到底有り得ない。

そしてクローラクロスで行われる計画が成功すれば、国は落とせる、兵力が増す、兵の装備が新調できる、資源や資金の足しになるなどなど……かなりの利益が見込める。それゆえにこの計画を失敗するのは認められないため、魔王直々の部下達を送り込み、計画の準備をさせていた。そして、もう直ぐクローラクロスでは盛大に舞踏大会が開催される、その閉会式の時を狙って計画を発動する。最も、その事には既に成功は決まっている。

数々の国を落とし、やがてはグランアースの掌握……だがそれでも一つの世界を掌握したのみ、我は複数の世界を手に入れない、次元の狭間に入れば異世界へと召喚される。

「魔族の王として、これ以上人間に負け続ける訳にはいかん！ 我がここで終止符を打つ！ 我にはそれを可能にする技量がある！ 我には複数の世界を掌握するという野望が、計画があるのだ！ まずはこのグランアースの掌握だ！！ フハハハハハハ！！！」

高らかに宣言する魔王。その声は城の至るところに轟いていった。
。。。。。

「なあなあエーリちゃん、今から僕と一緒にお茶でもしない？」

「え、ええと。。。。。」

「だから初対面の相手に初っ端からナンパ仕掛けんなってんだろ
うが！」

外でずっと放置されて涙目だったエーリを何とか慰め、今日中には武闘大会への参加登録を済ましておこう、と武闘大会が開かれるドームみたいな会場にやってきたは良いがその道中に英介がエーリを見てから狂ったかの様にナンパしている。エーリが若干、という
かかなり引いてる。

腰まで届く金髪に赤い目、まあ普通に可愛いんだが。。。。。

これからどうするんだよ、毎日ナンパすんのか？ 流石にそれは無いだろうがコイツの事だ、絶対にやらかすだろう。何をって？ 宿屋に止まれば部屋を覗く、ドサクサに紛れて変態丸出しな行動をする、フラグを立てる（死亡フラグも）などなどエトセトラ……。

「どうやら間に合った様だな。それじゃ、参加登録してくるからエーリはここで待っていてくれ。ただし英介、テメーはダメだ」

「えー」

「えー、じゃねえ！ またナンパするだろうが!!」

「美少女をナンパしろと天からお告げが……」

「どやかましい!!!!」

英介の頭をむんずと掴み、受付まで引っ張っていく。その様子をエーリは苦笑しながら見ていた。周囲の人々は奇妙なものを見る目で此方を凝視している。

「イテテテテッ!! 分かった！ 分かったよ！ 分かったからその手を話してください!!」

「やなこった」

「一蹴された!?!」

受付に着く。受付の女性が頬を引き攣らせている。俺は掴んだ手に力を込め、受付の女性に英介の顔面を見せる。

「二名で参加しまーす」

「は、はいっ！ に、二名様ですね！？ こ此方におおおお名前をお書きくださいませっ！！」

余程怖がられたのか、ブルブルと震えた手付きでペンと紙を手渡してくる。ここでさっきからうるさい英介を頭部から手を離す、後ろに吹っ飛ばすのを忘れずに。ぐっはあ！ と聞こえてくるが、無視する。空耳だろう。

紙に俺と英介の名前と必要事項を書き終え、向きを逆にして渡す。そういえばさっきから後ろの方でギャーギャー騒いでる輩が居るな、どうにかしてくれないか？ 結構声が響いてるんだが……まあ、その内警備員でも来るだろう。

「はい。マコト・キシベ様にエイスケ・サイトウ様ですね？ 大会は明後日の午前十時からとなりますので、遅れることのないようにお願いします。そして対戦相手の組み合わせについては当日説明いたします」

もう慣れたのかそれほど驚いている様子では無くなった。まあ、俺の少しばかりキレていたからちよつとばかり荒々しくなってしまう。今度から気をつけるようにしよう。

「分かった」

受付に踵を返しエーリの所へと戻る。

「終わったぞ。じゃ、宿に戻るうか？」

「え、いやあの人どうするんですか？」

「ん？ 置いてく。放置だ」

ニツコリと笑いながらそう言う。若干だがエーリが頬を引き攣らせている。いいじゃないか、あんなナンパ野郎と一緒に旅なんてゴメンだね。大体アイツと宿に泊まると平気で風呂覗きに行きそう・・・いや行く、絶対に行くな英介は。覗きに行かないときは、世界は終末を迎えているだろう。

「誠酷い！ 何もそこまですることないじゃないかあゝ！」

「お前がナンパするからだろうが、何回も」

「うつつ、その通りです・・・」

半泣き状態でヨロヨロと戻ってきた英介に正論を言って黙らせる。てゆーかコイツから変態要素を取ったら何が残る？ メガネだけだるうつ？

「ちなみに、ナンパとかしたりする度にお前は今回の様に酷い目に会う」

「うつつ、善処します・・・」

「ははは・・・こんな人と旅するのなあ・・・」

「何だ？ 嫌か？ 英介と居る旅は」

英介は美少女とかと会うたびにこうなるんだ、それ以外の時は普通なんだが……。間違いない旅の途中で美女や美少女に会うだろうから、その度にナンパしたりするのは軽く予想できる。やはり英介はここで切り捨てるべきか？ いや元の世界では一つ屋根の下、姉さんと共に世話になってた訳だし……。この性格を直そうにも方法が分からん。

「いえ、嫌って訳ではないんですけど。ほら、私って行く宛がないじゃないですか？ だからマコトさんに着いていくしか無くて……。ですけどマコトさんの友人さんですので、多少の事は我慢します」

「……………だ、そうだが？ 多少の変態行為を控えるのなら、連れて行ってやっても良いぞ？」

それからの英介の行動は速かった。高速で飛び上がり空中で足を折り畳み、床に着地し、両手を前に突き出し、床に添える。そして……………。

「是非！ お供させてください！！」

完璧なまでのジャンピング土下座だった。

「……………まあ良いだろう。それじゃ、腹も減ったし宿に行くか」

「あ、それについてなんだけど。僕は店を売却してからそっちに行くよ、武闘大会が終わるくらいになるかな？」

土下座の態勢のままそう言ってくる英介、ハッキリ言っとかなり

シユールだ。

「それと、街を出るときは気を付けてね。何だか最近魔物による被害が後を絶たなくてね。理由は分からないけど妙に活発になってるんだ、数も増えてるみたいだし……。街を出ることはないと思うけど……」

「ここに来るときは一匹も会わなかったが……。運が良かったのか？」

「さあ？ 良く分からないよ」

魔物による被害ねえ……。活発化して数も増えてる、か……。冒険者ギルドのクエストが増えてそうだな。

「……。まあ良いか。それじゃまた明日、八時位にここに集合な」

「オツケー、じゃあね」

立ち上がった英介が、銀縁メガネのブリッジをくいと上げる。そして一瞬だけエーリを名残惜しそうに見て、踵を返して行った。まだ懲りてねえのか？

「……。アイツに何かされたら直ぐに言えよ？ ちよっくら殴り倒してくるから」

「ははは……。手加減はしてあげてくださいよ？」

そうして俺達も夜の街を歩き、宿へと戻っていった。

第十二話 動き出した闇（後書き）

矛盾、誤字脱字などがありましたら報告よろしくです。

第十三話 俺と英介（前書き）

おお、中々に早く更新できた。やっぱり他の事やってると遅くなるなあ。

第十三話 俺と英介

「すまないねえ。料金は払い戻すから、他の宿を当たってくれんかね？」

「……他に空いてる部屋はないのか？」

宿屋に戻った俺達は、部屋に戻ろうと受付のカウンターを通り越した時、この宿の亭主であるおばさんに呼び止められた。話によると、どうやら俺達の借りた二つの部屋の内、エーリの部屋だけ他の人物に借りられてしまった、という訳だ。

どうもこの世界は野良の旅人よりも町の住民の方が優先されるらしい、といつても。歴戦の剣豪だとか、被害を未然に防ぎ住民を守った者、ランクが高い冒険者みたいな奴らは住民より優先される。さらにそれよりも優先されるのは、兎に角金を注ぎ込む貴族。勿論身分は高いのだが、何もかもを持ち前の財力で解決する輩が多く、かなりの身勝手さ故に周囲の人間は勿論、殆どの人間からは余り好印象に見られていない。少数派として、財力で善行を行う貴族も居るが、貴族全体が極めて悪印象的なので、周囲の理解を得るのには多少の時間が掛かる。

で、クローラクロスの住民にエーリの部屋が借りられてしまったと言うわけだ。しかも空いてる部屋が無いとすれば、必然的に俺とエーリ、同室で一夜を共にする事になる。そうなれば前回と同じでどっちかが寝て、もう一方が廊下で待機。俺は明日武闘大会に出場するので、睡眠を取らない訳にはいかない。となるとエーリが廊下で待機する事になってしまう、女を廊下に立たせて男は寝る、それはちょっとどうなんだろうか？ だが流石に年頃の男女が同じ部屋

つてのは何だかなあ……………。

「それがねえ、最近、武闘大会に参加する人や、それを観戦する人達でこの街も更に賑わってきていてね。何処の宿も満室で、空いてる所といえは相当にポロつちい宿ぐらいなもんだよ。ウチも例外じやなくてね、既に満室って訳さ」

「……………という事なんだが、エーリどうする？」

「どうすると言われても……………。やっぱり一緒に部屋で泊まるしか……………」

「俺としても今日は休みたいし……………、どうしたもんかなあ？」

顎あごに手を当てて考えてみる、取り敢えず一通りは考えついたがどれも却下。俺は明日武闘大会があるから休まないといけない。エーリは一応女子だし、年は聞いていないが多分俺より年下だろうから、年輩ねんぱいとして部屋を譲るべきなんだろうけど……………。あー、全く誰だよ部屋を住民だからって借りた奴は、顔が見てみたいわ。

そう思い、溜め息をついた時だった。

「はっはっは！ また会ったね誠！」

薄い茶色の髪をさらりと掻きあげながら登場したのは、ついさっき別れたばかりの英介だった。てゆーか店はどうしたんだ？

「何でここに居るのかって顔だね？ 実はだね、あの後このまま店を売ってしまったのはどうかと思って、知り合いに掛け合ってみたら

直ぐに買ってくれたんだ。そんで必要な物だけ持って来て、宿に泊まるうとしたら何と満室。それで仕方なく住民の権利を有効に使って旅人だか冒険者だか知らないけど、その人の部屋を借りたんだ。それでいまここね」

「誰もそんな事聞いちゃいねえ。てゆうかお前が原因か」

「へ？ 僕が何かした？」

心当たりがないと言った表情で、首を傾げる素振りを見せる。

「お前が部屋借りたせいでエーリの寝る場所が無くなったんだ、俺は明日武闘大会だから寝なきやいけねーし。それでどうしようかって悩んでたらお前がひよっこり現れたんだよ」

あ。英介が借りた部屋、元はエーリの部屋だって言っちゃまった……

「はっ！ 僕は気がついてしまったぞ！？ 僕が借りた部屋は……
……元々はエーリちゃんの部屋だったんだあああああ！！」

コイツ余計なことを！ 俺の魔剣の錆びとなるがいい英介！ それか魔法で塵にしてやんよ！

「お前アレだ、アレだぞ？ ベットとかにダイブして変態行動を始めたら直ぐに、血祭りに挙げるからな？ 真面目に」

「すみませんでしたああああ！！ 誠が言つとシャレにならないんですよー！」

今度は腰を90°に曲げて頭を下げてきた。今までコイツが変態行動を取る度に懲らしめた会が有ったとうものだ。さて、脅しては置いたからアホな事はしないと思うが、部屋をどうしようか？・・・確か街の住民はそこいらの旅人より優遇されるんだよな？・・・よし、良いこと考えついた。これを英介にやらせよう、コイツはこのクローラクロスの住民だからな。

「英介、ちよつと来い」

「何でございましょうか!？」

エーリを受付に残し、俺は英介の首根っこを引つ掴んで部屋の端っこに行つた。全く人が居ないのは部屋に居るか、街に繰り出しているかのどちらかだな。まあ、誰か居た所でこんな大騒ぎしてたら迷惑だろう。その点では運が良かったみたいだ。

「なあ英介、交渉しようじゃないか」

「こ、交渉?」

「ああ。まあ、聞け。取り敢えず英介が一部屋を借りる、街の住民つてのは旅人よりも優先されるんだろう? だったらこの宿にも何人か旅人何かが居るはずだ、まあお前が一部屋借りる事によつてそいつは追い出されちまうが・・・。どうする? 部屋を一部屋借りさえすれば俺はその後何にも“言わねえよ”? エーリの部屋に行こうが何を使用が“口は出さない”」

「・・・借りてくる! やっぱり持つべきものは友だね!」

英介は目の色を変えて受付のおばさんの所に向かって突っ走つて

いった。くくく……、欲に目が眩んだか……。まあ、何年も一緒に過ごしてきたからな、これぐらいは朝飯前よ。英介の操り方なんざとつくのとうに心得ているぜ。

「まったく。何で部屋借りんだよ、集合の約束した意味ねえじゃんか……」

「やつほぐい借りてきたよ、これ部屋の鍵ね。それじゃ僕は色々準備があるから部屋に行くよ」

そう言うだけ言って俺に部屋の鍵を渡し、気持ち悪いほどのニヤケ顔で階段を上っていった。さて、そんなこんなで漸くゆっくりとちゃんとしたベットで寝られるな、何時ぶりだろう？ 確かフィンシア城で一度だけ寝たつきりだっけか？ その後馬車の中だったかな……、まあ今日は明日に備えて早めに眠るとしよう。

エーリ居る受付へ戻り、話しかける。

「よし、エーリ。俺は明日に備えてもう寝るからな？ 英介の奴が絶対何かしてくると思うが、まあ今日のところは耐えてくれ。それで明日起きたら報告してくれ、徹底的に滅するから」

「分かりました、何も無いと良いんですけど……」

「絶対にある、無い訳がない」

「絶対ですか……」

今まで無かった試しがない、現に姉さんの部屋に忍び込んで『戦利品をゲットした！』と言って姉さんの下着を持ってきたこともあ

る。無論、俺と姉さんでボコボコにしたがな。

「それじゃ、また明日な」

「はい、また明日」

別れの挨拶を交わし、俺達はそれぞれの部屋に戻った。

その後、運ばれてきた夕食を食べている時。英介が部屋に入ってきて『エーリちゃんの部屋覗かない？』とぬかしやがったので、渾身のラリアットを食らわせてやった。部屋に行こう、ならまだしも部屋を覗かない？ はないだろ。いや、どっちにしろラリアットを食らわせるんだがな。

それと、英介が俺の部屋を借りた事で追い出された冒険者がトボトボと宿を出ていくのを見た、取り敢えずスマン。俺が悪いんじゃない、全ては英介の責任だ。だから恨むなら英介を恨め。

英介がエーリの部屋に侵入したかは分からなかったが、明日の朝にでも報告してくれるだろう。まあ、流石に他の人も居るって事で英介も自重はしているのだろう、それはそれで良いことだ。・・・
・はっ！ まさかアイツ・・・宿に泊まってる美人さんにナンパとか仕掛けてたりするか？ 確かにアイツ美人美少女は性格とかが何であれ、見境無くナンパ出来るが・・・、可能性としては有りうるな。

「全く、アイツの性格はもう少し何とかならんもんかねえ？」

部屋の窓を開け、美しく光り輝いている月の光を浴びながら俺は愚痴ぐちった。白衣をベットに脱ぎ捨て、いつもの着なれた制服せいふくが露あらいわに

なる。制服で思い出したが、前に姉さんが学校指定のセーラー服を見たら凄く似合っていた、少し幼く見えたというか、でも姉さんの正確が少しばかり子供っぽいので逆にお似合いというか……。

まあ、よくあることだろう。美人が服を変えただけで別人の様になるってのは、姉さんの場合はその幼く見えるバージョンだな。

姉さんのセーラー服姿、あれずっと写真にしてポケットに入れてたっけ、でも運悪く机の上に置いてきちまった。また姉さんに頼んで撮らせてもらおうかな？ でも携帯電話が無い、それに姉さんに会えないんじゃないでしょうか。

……もうこの事を考えるのは止めよう、今は姉さんの事を考えると何だかネガティブになってくる。何か気分転換になる物は無いか？ 今はどうにかして気を紛らわしたい。

「入っていい？ 誠」

急に扉が開く音と英介の声が聞こえたので、振り返ってみると、入っていい？ と聞いているのに既に入ってきている英介の姿があった。そういえば鍵を掛けるのを忘れていたな、英介が入ってくるなら閉めて置くべきだったか……。

「既に入ってきてるだろう」

「いや開いてたからね」

やっぱり鍵を閉め忘れていたか、今度からしつかりしないと。

俺はベットに座り、英介はテーブル付近にある椅子に腰掛けた。さて、今度は何の話だろうか？ 俺は兎に角気が紛れればいいから、

何の話でも聞いてやろう。

「で？ ここに来たってことは何か話をしに来たんだろ？」

「まあそうなんだけどね。今日は折角感動の再会を果たしたんだから、何かの話で盛り上がりたと思うてね。勿論、話の内容は考えてあるよ」

「その内容は？」

試しに聞いてみると、英介はニヤリと笑い。そして、高らかに言い放った……………。

「勿論！ 女の子にはどんな服装が最強なのかっ！！」

如何にも英介らしい、まあ、今回は何も言わずに素直に参加してやろう。何時もは不参加だったしな、今日ぐらい良いだろう。で、服装ねえ……………、これは個人的な意見でいいのか？

「まず僕から。やっぱり服装はセーラー服でしょう！ これが最強だね！」

セーラー服、まあその意見には賛成だが……………、まだまだだな。俺のランキングトップ3にも入っていないな。俺的に女の子ってのはパジャマに巫女服にメイド服、この三択……………いや三着が最強だ。ちなみにセーラー服は惜しくも五位だ、四位は水着な。

「ふっ、甘いな。最強はパジャマに決まっているだろう、少し着崩れているとなおよし」

「いいやセーラー服だね、これは日本の文化だ！ 宝だ！ そして青春だあああああ！！！」

両手を広げ叫ぶ英介、だが認めんぞ！ 貴様には最強はパジャマだと理解できないようだな、なら分かせてやるまでだ！！

「確かにセーラー服もいい、だがそれはうちの学校じゃ毎日のように見れたらどう？ だがパジャマは別格だ、あれを生で着用しているのを拝むのは相当難しい、だが姉さんのパジャマ姿は毎日見れたらどう？」

「……………美咲さんのパジャマ姿には僕も初めて見た時は鼻血を吹き出しそうになったよ。でもセーラー服なら毎日見れてお得意じゃないか！ 美咲さんのパジャマ姿もだけど！ それにセーラー服ならではの特技であるパンチラが拝めるじゃないかっ！！！」

そこは盲点だった！ 確かにセーラー服はパンチラが期待できるが、パジャマは下がズボンなためにパンチラが出来ない。だが！ パジャマの着崩れた時には恐ろしいほどのエロスを感じさせる！ それがセーラー服には出来ないんだ！

「てゆうかセーラー服は……………」

「ぐふう！ それを言うとは……………」

この雑談は日が変わるまで続いていた。時には殴り、時には和解除し、時には不毛な言い合いが飛び交った。それらが終わると、英介は部屋に戻り、俺はベットの中に潜り込んだ。

明日は武闘大会だ、まあ俺と英介がタッグを組んだら最強だろう。そう思いながら俺は布団を被り、眠りについた。だが俺達は、これから起こるであろう出来事に巻き込まれる事を知らずに、お互い朝を迎えた……。

第十三話 俺と英介（後書き）

矛盾、誤字脱字などがありましたら報告よろしくです。

第十四話 武闘大会開始（前書き）

この更新ペースを何とか維持していきたいなあ

第十四話 武闘大会開始

朝、目が覚めた俺達は一度宿のロビーに集まり、テーブルの椅子にそれぞれ座りながら話をしていた。

「そう言えば英介、武器は何を使うんだ？」

何も持っていない所を見ると素手か？ いやナイフを隠し持っているのかもしれない。確かガンブローは攻撃力では無く運のステータスの高さで攻撃力を決めるから、攻撃力がプラスされる装備より運がプラスされる装備の方が良いらしい。

今着ているバーテン服も多分そういう効果があるのだろう、いいよなガンブローって。運が高いからカジノで荒稼ぎ出来るし、高い装備が有ってもカジノで稼げば直ぐにでも大金持ちになれる。おまけに運が高いからよくクリティカルが発生するから、手強い魔物でもクリティカルが連発して発生すればあっさり勝てる可能性もある。

「それなんだが……ジャジャーン！ 武士の象徴、ジャパニースWORD日本刀」

アイテムウィンドウを開いて黒い鞘に収められた刀を取り出す。そうか、俺達にはアイテムウィンドウがあるから武器を大量にしまえるのか。それにどうやら俺達はお互いのステータスウィンドウやアイテムウィンドウを見られるのか、他の人には見えないみたいだが。

「マコトさんと同じで何処から出したんでしょう？ やっぱり魔法

の類たぐいでしようか？」

「まあ……そんなモンだ。てゆうか英介よ、それどっから手に入れた？」

今まで何人が冒険者らしき奴らを見てきたが、刀を持った奴らは見なかった。だとすると可能性としては

英介が自分で造ったか、英介が製造方法を誰かに教えて造らせたか、実はこの世界でも造られているが高価な為使う人が少ない、多分これのどれかだろう、他にもあるかも知れんが。

「これはね、偶々たまたまネットで作り方を興味本位で見っていたのをね、もしかしたらグランアースじゃ造られていないのか？ と冒険者達の装備を見て思ったんで、知り合いの鍛冶屋に製造方法を伝えて造ってもらったんだ。質の良い材料とGゴルトも渡した、中々に性能の良いものを造ってくれたみたいだね」

「へえー、よく製造方法なんて覚えてたな？」

「こつ見えても武器とかがって好きなんだ、ナイフとか拳銃とかね。勿論それは現代であろうが戦国時代の武器であろうがね。そんな訳で武士の象徴、刀を調べているときに製造方法が書かれたサイトを偶然見つけてね、まあ何故か今の今まで忘れずに覚えてたんだよ」

英介は勉強に関する事はまったく覚えなくせに、趣味の事となると人一倍に物事を脳に吸収できる。ホント記憶力だけは良いんだがな、前なんかRPGやってる時フィールドに出てくるモンスターの名前に使ってくる魔法、ドロップするアイテムまで把握してやがった、あの時はたまげたもんだ。てゆうかそれを勉強に回せば良いものを……もったいねえなあ。

「さいと……?」

「あー。俺達の故郷にある……情報が書かれた看板のような物だ」

エーリが聞き慣れない単語を聞いて首を傾げる。そうか、この世界に日本と言う国が無いから、こっちの『パソコン』や『携帯電話』に『自動車』何て言っても説明しなきゃ伝わら……いや、まずこの世界の科学の発展が遅いから概念そのものが理解できないか……うーん、何だか外国人と喋ってるみたいだな、いや正確には異世界人と喋ってるんだけども。

「便利な看板さ、いろんな情報が書かれているんだ。で、その看板を見て、造り方を教え、この刀を造ってもらったんだ。名前は……そういや付けてもらって無かったな……と言うか僕にこれは扱えないな、剣道なんてやってことないし、修学旅行で記念に買った木刀を使ってチャンバラごっこした程度だよ」

そう言っただけをまじまじと見つめる。……どんな効果があるのか、見させてもらうか。俺はチェックを発動し、刀の情報をデータ化して頭の中にウィンドウとして出現させる。装備名は『刀(名無し)』と表示されている、これを見る限り名前を付けられるのだろう。

次に攻撃力を見る、……攻撃力580。固有能力『一騎当千』待てよ？ 確かまだ魔剣をチェックしていなかったな。俺は腰に付けている魔剣にチェックを唱えた。すると二つ目のウィンドウが脳内に表示される。名称『暗黒の剣』ダーク攻撃力450。固有能力『チェックメイト』

……おい、これ魔王の剣じゃなかったのか？ 何だこれ？
つまり日本の生み出した刀が魔王の剣より勝るとでも？

さて、一つ説明しておこう。まずこの“固有能力”についてだ。固有能力は限られた武器にのみ、それぞれ違う効果の能力が宿る。例えば剣を天に向けると落雷が落ちてきて敵を攻撃する、振るうと敵に無数の衝撃波を繰り出す、とまあこんなもんだろう。まあ魔法とスキルが合わさった、とでも思えばいい。

ちなみにその攻撃はMPを消費しない。だが強力な固有能力ほど使用できる回数が少ない、あんまりボコス力使いまくっていると直ぐに使用不能となる、注意が必要だ。なお、使用回数を回復させるにはある程度の時間が必要になる。これは逆に強い固有能力ほど回復する時間が短い、そして弱い固有能力になると回復時間は長くなる。

強力な固有能力はあまり連発は出来ないが、使用回数の回復が早い。弱い固有能力はある程度の連発が可能、だが使用回数の回復が遅い。

さて、どうでしょうか？ 攻撃力は魔王の剣より刀の方が強い、固有能力も刀の方が名前からして強そうだ。……確かチエツクは魔法使い系の初級魔法だったはずだからガンブラーは……
……、戦士系か？ だとするとチエツクは使えないから装備の性能は分からない。

ゲームでは装備の性能を調べるアイテムがあったが、この世界にそういう類の物は恐らく無いだろう。だから英介は刀の性能が俺が持っている魔王の剣の性能が分からない、これは好都合だ。

「なら英介、この魔王の剣とその刀、交換しようぜ？」

「え？ 魔王の剣？」

「そうか、エーリは知らなかったな。フィンシア城の武器庫に有ったから持ってきたんだよ」

何で有ったんだらうな？ 普通あんな所には置いていないだろう、あの時はあまり気にはしなかったが……今思うと本当に何故フィンシア城に？ まあ魔法とかがある世界だから普通では有り得ない事も起きるんだらう。

「城の武器庫に置いてある物なんでしょうか？」

「何でだらうな？ 俺には分からん」

「なあなあそれホントか！？ これと交換してくれんの！？」

明らかにこの剣を欲しがってる様子で会話に割り込んでくる。てゆーか誰も魔王の剣が刀に性能負けしてるって気付かねえよなあ……まあ、今回はそれを利用して貰うんだがな。此方は魔王の剣が刀よりも強い事を知っている、だが英介はそれを知らない。見た目と名前だけで判断している。

それを利用して交換する。英介は弱い剣を嬉々として受け取り、強い剣をスンナリ此方に渡してくれる。まあ、130程度の違いなんだが……だが、勝てなかった敵に勝つためにコツコツと金を貯めて、装備を整えて見たらアツサリと勝ててしまった、というのはよくある話だ。

「ああ。ほら」

「やつほーい！ 魔王の剣だ！」

という訳で早速交換したんだが、英介が凄い喜んでる。あゝ、魔王の剣が刀より弱いつて知ったらどんな顔するんだろうなあ……。この交換は実際にはこっちが得してあっちが損してるよなあ……。まあいいか、英介だし。

「剣なら別にただ振り回すだけでもいいが、刀はそうは行かない。ちゃんとしたやり方つてもんがある。俺はちょこつと趣味程度に剣道やってたから、そこそこは出来るぞ？ 一番得意なのは射撃何だかな」

「そう言えば英介つて祭りに行くと、真っ先に射的しに行くよね？ もう何ていうか「狙った獲物は逃さない」って感じで次々に的に当てていくよね」

「あの瞬間は俺の射的本能が目覚めるんだよ」

的に全て弾を当てた御陰で店のおっちゃんが涙目になっていたのは余談だ。まあ取りすぎて帰りに大変だんだがな。。。。。

「マコトさん、そろそろ。。。。。」

「ん？ ああ、じゃあ行くかうか？」

刀をベルトに取り付け、ステータスウィンドウを開く。最近になって気がついたんだが、どうやらステータスウィンドウで時間を確

認でるきたいだ。所持金も表示されているみたいなので、結構便利だ。

テーブルの上にあるコーヒーの残りをぐいっと飲み干してから立ち上がる。時間には少し余裕があったので、俺達はゆっくりと武闘大会の会場へ向かう事にした。

武闘大会会場内。実はここ、元々は王宮の兵士達の腕試しの場らしく、毎年この時期が来ると巡回兵士を増やし、一般の客にも開放している。この中で問題を起こそうとすれば、直ぐにでも巡回中の兵士達が飛んでくる。

で、今俺達はその会場内に居る。エーリは出場しないので観客席の方に行っている、そして俺と英介は出場選手が休憩する控え室に居る。控え室はチームごとらしく部屋の中に居るのは俺達二人だけだ。

「ソロで出場している選手は大変だね、初っ端からバトルロワイヤ

ルだつてさ」

「ああ。勝ち残った奴らが二回戦に出場できるんだらう？ こつちは何だつたかな・・・、ああそうだ、相手一チームとバトルして勝つたほうが二回戦進出・・・、って書いてある」

参加する選手全員に配布されるパンフレットを流し読みながら答えた。優勝賞品はシャドーに教えてもらった通り、100万Gと聖剣、それに優勝者にはもれなく王宮の兵士として仕える事ができると書いてある。その横に括弧で『王宮の兵士として仕えるならば、それなりの地位は与えられる』と書かれていた。

恐らくこれが目当てでこの大会に出場する人間も山程居るんだらう。主催者側としては参加人数が多くなって、より盛り上がる事が期待できるだらう。なお、参加料金は無料だったので、誰でも気軽に参加出来る。そのため、腕試しとして参加する者や王宮の兵士となって地位を得るために参加している物が大半を占めているだらう。

「なら、このソロ一回戦が終わってから、次のタッグ一回戦が始まるんだね。いやあ、正直僕と誠ならどんな相手だつて楽勝だと思つよ？」

「つて言われてもな、こつちは結構苦戦してるんだぞ？ 王宮随一の剣士と戦つたり、SSランクの魔物を数匹同時に対峙したり・・・」

「誠は魔法使い系なんだから戦士系と相性が悪いのは当たり前だつて、錬金術師アルケミストは魔法が豊富なんだから、回復とか支援とかもこなせるでしょ？」

「いや、俺の場合は剣と魔法をどっちも使ってるからさ……」

「……そう言えばさ、その拳銃どうしたの？」

英介が俺の懐を指さしながら聞いてくる、何時の間に気がついてたんだ？

「これか？ 貰ったんだよ、神様にな」

「ふーん、そっか。だとしたら余計に近接武器の意味は？」

「片手に拳銃、もう片手に刀。これで行く。魔法は……いざとなったら拳銃の銃口から発射するさ、出来ない魔法は……どうするかな」

はあ、と英介が溜め息を吐く。

「……もうさ、売っちゃえば？ その拳銃。結構高値で売れると思うよ？」

「……考えとく」

スマン神様。貰っという何なんだが売るかもしれないわ……
。実を言っと、魔銃より刀のほうが個人的には好きなんだよ……
。

今後に魔銃はどうしようかって考え始めた時だった。掌てのひらに握り締めていたクリスタルから、アナウンスが流れ出した。このクリスタルを分かりやすく言えば携帯電話の様になっている。

『まもなく、第一回戦ソロバトルが終了します。第一回戦タッグバトルの方々は選手出場口付近へ集まってください』

もう一度内容が繰り返され、それが終わると同時に薄く紫色に光っていたクリスタルが発光を止める。何となく緊張してきたが、気になる程ではない。

「いよいよだな……………」

「だね……………んじゃ。僕らの力って奴をタップリと見せてあげようかね？」

それぞれ椅子から静かに立ち、控え室を出て迷うことなく選手出場口へと向かった。しかし、闇は刻一刻と、着実に迫りつつあった……………。

第十四話 武闘大会開始（後書き）

矛盾、誤字脱字などが有りましたら報告よろしくです。

第十五話 好調なスタート

『さあ！ 第一回戦ソロバトルが終了し、お次は第一回戦タッグバトルだああああ！！』

アナウンスが会場に轟き、それに答えるかの様に観客が歓声を上げる。ソロバトルで勝ち残った総勢、十名が第二回線ソロバトルで戦い。そしてこの第一回戦タッグバトルで勝ち残ったタッグが次の第二回戦タッグバトルに進出できる。

予定では今日中に準決勝まで進み、明日には準決勝と決勝戦が執り行われる様だ。順調に、トラブルの一つも無ければの話だが・・・。まあ、兵士が巡回して回ってるし、余程の事が無いと大会に支障はなさないだろうけど。

「誠。一回戦は僕たちだ、精々派手にやりたいもんだね」

「派手にやったら相手がもたねえだろう？ チマチマやろうや。状態異常何か掛けてさ」

「あゝ、そういやあ誠って状態異常とか掛けるの好きだったよな」

「そうだな。まずは状態異常で自分が有利になる状況を創ってからだと、安心して攻撃を始められる」

選手出場口の奥で今か今かと開始の合図を待っている俺たち。第一回戦に当たったものの、緊張しすぎては動きがぎこちなくなってしまう。まあ俺達はある程度大勢の人の前に立ってもこれといって緊張はしないタイプなんだけど、待ち時間が少しあるという事で気

楽に話していた。

俺達、いや、選手全員は戦う相手が誰だか知らされていない。運が良ければ弱い相手、運が悪ければ強い相手と対峙する事となる。何にせよ、戦うまでは相手の正体は分からないため、どんな敵が相手でも良いように様々な攻撃パターンの予測、さらに相手が魔法を使ってきた場合の対処法など、色々と考えてから試合に望む必要がある。

だが、深読みをしすぎて相手の弱点を付く戦法で戦ったが、逆に此方の弱点を相手に晒してしまってピンチに陥る事もある。でも実力差がある相手とは、ゴリ押しでも何とか行けることも有る。

『準備が整いました。フィールドへ入場してください』

通信クリスタルと呼ばれる物から、無機質な女性の声が流れる。通信、とはいっても電話の長話の様に時間は取れない、精々五分が良いところだ。

「英介、調子に乗って魔剣振り回して俺に当てるなよ？」

「へへ、そつちこそ。魔法で巻き込まないでくれよ？」

互いの拳をぶつけてコツン、と打ちならし合う。そして俺達は互いにニヤリと薄笑いを浮かべて、会場の光が漏れているフィールドに向かった。

圧勝。完璧なまでの圧勝だった。もはやリンチの域だ。まあ説明すると、相手は如何にも『冒険者始めました』と思わせる様な装備で現れた、もしかしたらそう見えるだけでかなり強いのもしい、と俺達は思い英介のスキルと俺の魔法を試しにぶっばなしてみたのだが……、どうやらホントに初心者だったらしく二人共この一撃でやられてしまった。

たった数秒で終わった勝負に実況者も、審判も、観客さえもが沈黙した。誰もが声一つ上げない場で、約一名空気の読めない奴が居た。

「よっしゃ勝った！ ちよろいモンだねえ〜このまま優勝狙っちゃう？ あ、もう狙ってるか。ははははは！！」

「……………」

英介の笑い声が虚しく会場内に広がった。

ほどなくして、正気を取り戻した観客から拍手喝采が沸き起こった。審判は俺達の勝ちを高らかに宣言し、実況者は興奮した様子で熱く俺達について語っていた。

次に俺たちが出るのは第二回戦の……三戦目だったか？
まあ、そんな訳で結構時間も空いたので休憩がてらに控え室に戻った俺達。その道中、観客席から此方に来たエーリと合流して三人揃って戻っていった。

人でごった返している廊下を何とか抜けて、やっとの思い出控え室へとたどり着いた。室内に入ったと同時に仮眠用のベットにダイブする俺。続いて英介も隣のベットへとダイブした。

「あー、強すぎるってもの何だかなあ……………」

「凄かったですからね、マコトさんの魔法とサイトウさんのスキル」

「ん？ そういえば気になったんだけどさ、スキルって皆使えるのかい？」

ベットに寝そべったまま、英介が銀縁メガネを外してハンカチでレンズを拭きながら聞いた。

「いえ、使える人と使えない人が居て、高価なスキルブックって言うのを買って読まないと使う事は出来ないらしいです。なのでサイトウさんはスキルを使えていましたので、凄く珍しい人何です」

多少角張った木製の椅子に座ったエーリが答える。ちなみにエーリは魔法使いの上、所謂賢者いわゆるを目指していた頃があったらしく、その頃に大量の本を読み漁った為か学者並みの知識は持ち合わせていると言っていた。

「珍しい？ それってスキルを使える人が少ないのかい？」

「はい。恐らく使える人は……千人に一人程度、ですかね？」

「おお、って事は僕と誠は千人に一人の逸材？」

「そう言う事になりますね」

千人に一人、か……。このグランアースにどれくらいの間があるのかは知らないが、偶に見かけるぐらいに認識でいいのか？ 少なくともこの大会で何人かは見かける事になるだろう。だが、スキルを持っていたとしても、使いこなせないのではまったく意味がない。

攻撃力を一時的に高めるスキルを持っていても、それを防御する場面で使っては意味がない、そんなところで使う奴はいないと思うがな。子供以外。

おっと、スキルについて簡単に短く説明しておこう。スキルは魔法・固有能力とは違い、使用する回数を制限する概念が無い。使用者が使える状態である限り、何時、何処でも使用する事が可能である。

また、スキルの効果を高める防具も存在する。魔力を高めたりする防具よりはちょっと値段が張るが……。と、まあスキルつてのは魔法とは似てるけど別物って感じだ。

「まあ、この大会で何人は見かけるだろうさ」

「そうだろうね。中には回復や補助系のスキルを使う奴も居るだろ

うから、気を付けないとね」

「ああ。でも俺は魔法が使えるからな、攻撃に回復に補助と多種多様にどんな状況下に置いても抜群の効果を発揮できる」

ベットに横になっている俺、だがこのままだと眠ってしまいそう。現に微妙だが眠気が迫ってきている。第二回戦ソロバトルが終わり、次の第二回戦タッグバトルで俺達の出番は二番目だ。後早ければ一時間で順番が来るだろう。

横になっている状態から起き上がり、ベットの上に座る。……
・そろそろ昼か、今の内に何か食べておきたいな。腹が減っては戦は出来ぬって言われてるぐらいだし……。

「腹減ってきたな……英介、ここに何か食べ物売ってる店は有ったか？」

「うん……あ、そうだ。確か一階にレストランっぽいのが有ったよ。結構客が入ってるみたいだったからそこそこに美味いんじゃないかな？」

「よし、決まりだな。そこに行こう」

「そうだね」

俺と英介は立ち上がり控え室を出ようとした。

「あ、あの！ これ！」

「ん？ 何だ？」

振り返ると、エーリが箱の様な物を此方に向かって差し出して
いた。箱は風呂敷に包まれており、箱の中身が何なのかは分からない。

「え、えーと……これって？」

「お、お弁当……作って見たんです……もし宜し
かったら、食べてみてくれませんか？」

「あ？」

「え？」

俺達はマヌケな声を出して、思考が停止した。きっと今の俺達の
顔は口を開けて、恐らく滑稽な顔になっているだろう。

弁当。と言う事は恐らく手料理、何時の間に作ったのかは分か
らない、だがありがたいな。わざわざ値段が張るかもしれないレスト
ランに行つて食べるよりは、こつちの方が良い。値段が安いし、何
より心がこもっている。

他人の弁当を食べる事になるなんて一体何時振りだろう？ 何時
も姉さんと英介の分まで作つて食べていたのだが、結局は自分のを
食べていた。姉さんはハッキリ言うあまり家事が得意では無かつ
た。卵焼きは焦げて灰になるし、塩と砂糖を間違えて甘つたるい弁
当を食わされたのは今となっては良い思い出だ。

要は、他人の弁当を食べる何て思つて無かつたわけで、俺達男子
二人組は二人揃つて変な声を出して思考が停止しているわけだ。

「弁当？ エーリのか？」

「は、はい……………」

「何時作つたんだい？」

「えっと、今日の朝方に……………」

「……………」

二人してお互いの顔を見合わせる。こういう場合は素直に受け取れば良いのだろうか？ それとも断るべき？ いやいやいや後者は人としてどうなんだ？ 後者何て選んだら俺の人間性が疑われるぞ？ という訳でナシ。

で、必然的に前者が残る訳だ。素直に受け取る、……………いや普通に有り難いんだが、如何せんどう反応すればいいのかが分からない。なので取り敢えず脳内で幾つか例を挙げてみる事にする。

その一、『お、おう。あ、ありがとうな』

その二、『え？ 何？ 弁当？ それって俺達にくれんの？』

その三、『おお！ 弁当か、早く食べようぜ。腹減ってたし』

うーん……………まず二は無いな、反応が最近の若者だ。次は一、これは至って普通なんだが、どもってるな。緊張してるのか、下手すれば下心が有ると勘違いされかねない。最後に三、まあこれが無難だろう。って事で三に決定、三を実行に移す事にしよう。

「おお！ エーリの弁当か、そんじゃ早く食べようぜ？ 俺腹減って死にそうなんだよ……………」

「僕もだよ。それにしてもエーリちゃんの手作りお弁当かあ、美味しそうだね。早く食べたいよ」

「えへへ……………こう見えても家事は得意中の得意何ですよ？ 特に料理が得意だったりします」

料理が特に得意、じゃあ味の方は心配無さそうだな。もし有り得ないほど不味かったらどうしようかと少しばかり思ってたけど、そんな心配は要らなかつたみたいだな。

丁度椅子が三個有ったので、そこに三人共座る。席に着くとエーリが風呂敷に包まれた弁当箱を結び目を解き、弁当箱の蓋をカパツと言つ音と共に開いて、弁当箱の中身を露にする。

「おお〜！！」

俺と英介は揃って歓声を上げる。大きめの弁当箱の中に、ギツシリと具が詰め込まれていた。定番の卵焼きに唐揚げ、ズラリと並べられたおにぎりとサンドウィッチ、そして端っこの方にたくあんが数個詰められている。

弁当の中身は日本とほぼ変わらなかった、数日見ていないだけなのだが凄く懐かしい感じがする。特にたくあん何て有ったのか？ でももしかしたら似ているだけで違う物かもしれない、他も同じ様に。だが食べてみれば分かる事だ。

見た目も良く、食欲をそそる。匂いも実に美味そうだ。俺は口の

中に何時の間にもやら溜まっていたヨダレをゴクリと喉を鳴らして飲み込む。

英介何か目をキラキラさせながら弁当を見つめている。俺達の心境を察してくれたのか、エーリが木製の箸を二人分差し出す。それを俺達は瞬時に取り、弁当の具に向かって箸を伸ばす。

俺はまず唐揚げから食べてみる事にした。箸を使い唐揚げを口に運び、食べる。

「ど、どうでしょうか………?」

数回ほど噛んでから飲み込む。そして素直な感想を述べる………

「「最っ高だ!!」」

「美味しい! 美味しいすぎる!! これ程まで美味しい物を俺は食べた事がない!!」

こんな美味しい食べ物がこの世に存在していたのか!? これは俺の味を超えたぞ!?

「完璧だ! 素晴らしい! パーフェクトだ! 味付けがGJ過ぎて涙が出てきたよ………!!」

「そ、そんなに美味しかったですか? なら作った会がありました!」

ニッコリと笑い、飛びっきりの笑顔を魅せるエーリ。その間も俺

達は弁当の中身を食べ続けた。そして一通り食べ終えた俺達は、エーリの分を残して完食した。

「いや〜美味かったな」

「うんうん。美味しかったよ」

「そう言っただけだと嬉しいですよ。あ、また機会があれば作ってきましょうか？」

「是非!!!」

「ふふっ、分かりました。今度作ってきますね」

空腹を満たした俺達はその後雑談を初め、次の第二回戦タッグ戦の開始を待った。

だが、闇はゆっくりと近づいている……。光を飲み込むように、それはまるで日が沈み、夜が来る様に……。

第十五話 好調なスタート（後書き）

矛盾、誤字脱字などがありましたら報告よろしくです。

第十六話 戦士と魔法使い

「さて、そろそろだが準備は良いか？ 英介」

「うん。さつき自作のおみくじを引いてみたら、大吉だったよ。幸先いいね」

何時の間に作ったんだよ、お前今の今までずっと俺の隣に居ただろうが。

「お前の場合は運のステータスが低いから、高確率で大吉を引き当てるだろう」

「ま、そうなんだけどね」

ははは、と笑う英介。

エーリの弁当を食べ終えた俺達は、再び選手入場口付近で三回戦の開始時間を待っていた。ステータスウィンドウを開き、時刻を確認する。……どうやら後五分程度で第二回戦タッグ戦の三回戦が始まるようだ。

先程の一回戦と二回戦は、中々に白熱した戦いが展開されていて、観る側としてもとても緊張感があった。その中を勝ち上がった者と、俺達はそのどれかのチームと第三回戦で対峙する事となる。第三回戦ともなると、一筋縄では行かなくなる。

現に第一回戦の段階で弱いものは蹴落され、強いものが上へと勝ち上がったっている。戦いの経験が少ない冒険者に百戦錬磨の強豪が相

手となってしまった場合は、勝てるはずもなく、惜しくも敗退した者達も少なくない。

「相手が俺達の攻撃に耐えられるように祈っとけ。でも強すぎても厄介だな」

「そんな人間居るの？ 居ない気がするんだけど……まあ、一応祈っとくよ」

ダークベアーが俺の攻撃に数回耐えられたのは、俺の攻撃力が低かったからだと思う。恐らく魔法だったらほぼ一撃で仕留められていただろう。

腹が満腹になった事で薄い眠気が来た為、一つ欠伸をする。それとほぼ同時に掌の中にあるクリスタルからアナウンスが流れだす。

俺達はアナウンスが終了すると、第一回戦と同じようにお互いの拳をコツンと打ち鳴らし合った。そして眩しいほどに光が差し込むフィールドへと歩きます。

フィールドに出ると、^{なやむ}煩いほどにまで大きな歓声^{なやむ}が俺達を出迎えた。真っ直ぐに前を見つめると、馬鹿デカい大剣を肩に背負ってゴツゴツした防具に身を包んだ男。その隣には紫のトンがり帽子を被り、同じく紫色のローブを纏い先に紅い球が付けられている杖を持ちながら歩いて居る女が居た。

「どうやら次の相手はあの人達みたいだね」

「ああ。見た感じ強そうだ、油断はするなよ？」

刀を振り下ろし炎の斬撃を飛ばす。三日月の形をしたそれは相手の魔法使いに直進していき、直撃した……。かのように見える。当たる寸前で何かに防がれたようだ、大体予想はつく。バリアーだ。

だが防いだと言っても完全には防ぎきれなかったようで、バリアーは衝撃でヒビだらけだ。魔法使いは予想外の威力に危険だと判断したのか、俺に複数の火球を発射してくる。

それを避けようとはせず、バリアーの一種である魔法をそのまま跳ね返すバリアーを展開した。

「ミラーバリアー」

俺に当たると思われた火球は、ミラーバリアーによって跳ね返され逆方向へと逆進して行った。しかし、それらにはあの魔法使いが新たに放った水球によって蒸発させられてしまった。それも一発も撃ち漏らさずにだ。

あの魔法使い……。余程コントロール性能が高いのか、こりゃ厄介だな。遠距離から近距離型の英介をスナイプされたら一溜りもないぞ。早めに潰すのが良さそうだな、残しておいても何のメリットも無いみたいだし。

「誠っ！ 早くエンチャントを掛けてくれ！」

一旦下がってきた英介に急かされる、それに反応して素早くエンチャント魔法を掛ける。

「おうよ！ アタックブースト！ ガードブースト！ スピードブ
ースト！」

攻撃・防御・速度がアップするエンチャントを掛ける。どれも効
果が高いし、効力が長い。これでしばらくは大丈夫だろう。

再び英介が先程とは段違いの速さで戦士に向かい駆けていった。
勿論、俺も魔法使いから目を離していない。相手の技量は未知数だ、
何を繰り出してくるか分からない。

自分に注意が向けられていないのかと思ったのか、魔法使いがこ
ごぞとばかりに魔法を次々と発射してきた。炎・水・雷・氷・風、
とそれぞれ五属性の魔法を打ち込んできた。

こればかりは流石に一つずつ属性に合わせて相殺していく余裕は
ない、上級魔法で一気に消し飛ばそう。爆風で戦士をも巻き込める
かもしれない。やってみよう。

「ケミストリー化学反応！！」

ケミストリー化学反応。両手から混ぜると大爆発を引き起こす薬品を液体を出
現させ、標的付近で薬品を混ぜ合わせる事により、化学反応を起こ
し大爆発を引き起こす。なお、この爆発は威力が高いため、自身が
巻き込まれると一気にHPを持って行かれる。そのため常時、距離
と周囲には常に気を配る必要がある。

宙に出現した液体、それを見て魔法使いがバックで距離を取って
いく。だが爆発には巻き込まれずとも、爆風には巻き込まれるので、
こっちはダメージ覚悟でこの魔法を選んだ。英介には予めこの内容
を伝えている。

「もう直ぐ爆発するぞ！ 下がれ！！」

「オーケー！ っと！ こっち来んなし！！」

「ぐはあっ！！」

大剣を振りかぶるモーションで直ぐ近くまで来ていた戦士、それを間一髪魔剣でガードし、押し返し強烈な突きを戦士の腹に叩き込んだ。

吹き飛んだ戦士は二、三回地面を跳ねて、漸く止まった。だが・・・その近くには混ざりきる直前の液体。マズイ、このままじや爆発に巻き込まれて最悪死ぬぞ！？

だが、そう思った時には遅かった。液体は混ざりきり、一瞬眩く光りそして化学反応を引き起こし轟音と共に大爆発を発生させた。

「っ！！」

「わあああああああ！！？」

大爆発によりもう凄い爆風が俺達を襲った。いやこれだけの威力だ、あの二人は勿論、恐らく観客席にまで届いているはずだ。爆発をモ口に喰らうよりはマシだが・・・あの戦士、この爆発で生きてるかどうか・・・。

必死に激しい爆風を耐えきる。未だに飛んでこない先程の五種類の魔法は消滅したようだ。またしばらくして漸く爆風が無くなった。爆発地点は砂煙が立ち上っていて様子が伺えない、砂煙が消え去る

のを待とう。

「……何秒経っただろうか？ 爆風が止んでから今まで会場が静まり返っているの、声一つ聞こえない。誰も喋ることが出来ない。何故ならそれは皆砂煙が晴れる瞬間を、固唾を呑んで見守っているからだ。」

やがて砂煙が薄れていき、二つのシルエットが浮かび上がってきた。

「つたくよお……最近のガキは危なっかしいっいたらありやしねえ」

「まあまあ。でも、手応えがありそうじゃない？ 少なくともあの研究員みたいな奴、あたしより強いかもしれないっぽい」

観客がどよめきの声を挙げる。当然といえば当然の反応だろう、あの爆発を防ぎきって尚且つ生存しているのだから。しかしあの魔法使い……化学反応は上級魔法ケミストリーで最後らへんに習得できる魔法だぞ？ ただでさえ威力が高いそれを防ぐなんてよ……よっぽど強力なバリアーでも張ったか、或いは何らかの方法で身を守ったか。

戦士をあの距離からどうやって守ったのかも疑問だ、少なくとも数メートルはあったはずだ。それをあの一瞬でどうやって移動した？ ……ああ、そうだったな、ここは魔法が使える世界だ。こつちの世界じゃ有り得ないことを平然と出来る、そんな力がある魔法世界だ。このグランアースってのは。

だとすると、ワープ系の魔法で戦士の下まで移動し、強力なバリ

アーを即時に展開して爆発と爆風を凌ぎきった。しかしあの一瞬でよくもそんな早業を……。

「ああ？ お前より強いなあ？ あの白衣の奴がか？」

「多分ね、見たこともない魔法だから。それにあたしの魔法も相殺されてたからね」

「そりゃあただ単にお前が弱いだけじゃねえのか？ あ、ごっはあ！？」

戦士の男の顎に魔法使いのアップパーが綺麗にヒットした。

「舌嚙んじまっただろうが！」

「誰が弱いつて！？ もう一回言ってみる酔いどれオヤジが！」

「なっ！？ おま、何時も俺が酔った時にナンパしてると思っているのか！？」

「事実でしょうが！！！」

「断言すんな！ 証拠は何処だ！？」

「まだ探せば居るんじゃないの？ アンタが昨日ナンパした酒場の女の子！！！」

俺達そつちのけで喧嘩を始め出した二人。俺達は何をすればいいのかわからず、顔を見合わせる。

「俺ら何をすれば？」

「終わるまで待つてあげようよ。でもあの調子じゃ何時までかかるか………」

あの二人の喧嘩は更にヒートアップしており、既に魔法使いが魔法を打ち込んでおり、戦士はそれを避けたり大剣でガードしたりで、周りに人が居れば死人が出かねない喧嘩……ではなく最早決闘だ。

その二人の喧嘩を何となく見つめてみると、時折流れ弾がこっちに来るので。俺達は避けたり相殺したりしているのだが、中々終わる気配がない。何時終わるのだろうか？ もう十分は過ぎているんだが………」

観客も状況に着いて行けず、疑問の声を挙げるばかり。あれほど熱かった実況者も、今はこの状況にスツカリ冷えてしまっている。

「……これって制限時間ってあるのか？」

「……あ、もう終わりだ」

ステータスウィンドウを開いた英介がそう呟いた。そして、数秒して実況者が時間に気付き試合終了を告げた。

「おいそこの二人！ もう一回勝負だコノヤロー！」

「そうよ！ 決着を着けるのよ！」

エーリと合流して控え室に戻った俺達。エーリが言うには観客側からは状況がああ爆発の後二人が生きていて、その後争い始めた、と。

そして取り敢えず試合が終了し、控え室に戻ってしばらくするとクリスタルからアナウンスが響き、試合で俺達が優勢だった事から俺達の勝利らしい。納得がいかないのは英介も同じらしい。折角マトモに戦える相手が居たと思ったら喧嘩初めてタイムオーバーで判定勝ち。

それが納得いかないのは彼方も同じみたいで、クリスタルからアナウンスが終了した瞬間に、こうして控え室の中まで押し入ってきた始末だ。

「いや、確かにこっちも納得しかなかったけどさ。時間内からこの大会が終わった後にでも……」

「断る！！」

「断固拒否!!」

「……………はあ、どうする誠?」

どうする? と言われてもだな……………そりゃあ時間ないし、大会が終わってからにしてもらうしか無いだろうよ。

その後、数十分に及ぶ説得の末、結局大会が終わってからに勝負する代わりに大会では優勝すること、という条件付きで納得してもらえた。

これの御陰でロクに休めずに次の戦いに出る事になってしまった。あゝ、仮眠取りたかったんだけどなあ……………。

空は夕焼けの空、まだ遠いが魔の手は迫りつつある。それは何かを奪っていく……………。

第十六話 戦士と魔法使い（後書き）

矛盾、誤字脱字がありましたら報告よろしくです。

第十七話 歪んだ愛

「優勝候補であるサイガ・ヴァイス、アリス・リラがタイムオーバーで判定負けと言うアクシデントが発生！ 勝者は突如として現れたマコト・キシベとエイスケ・サイトウのコンビだあああああ！！快進撃を続ける彼らを止めるの者は果たして現れるのか！？」

どうやら優勝候補だったらしいあの戦士と魔法使い、今思えばただ断ればよかったと思っっているがもう遅い。

「さてと、次はどんな相手だろうな？ 少なくともここまで勝ち上がってきたんだ、それなりの力量を持つてる相手と考えていいだろう。今度は最初からエンチャントを掛ける、そして相手に戦士が居た場合即刻潰してこい、近寄られると厄介だ。もしスキルでも使ってきたらマズイ」

「分かった。じゃ、誠は魔法使いを重点的に攻撃してくれ、僕は遠距離攻撃が出来る魔法はない、でもスキルなら一つだけある、まあ後で見せてあげるよ。他のスキルも一緒にね」

俺は静かに頷いた。それにしても英介は遠距離の魔法が一つもなくて、スキルが一つだけあるのか？ てことは遊び人は近距離攻撃型のアタッカーか。殆どのスキルが近距離だとすると英介にはまず前線が向いてるな。

今思ってたんだが英介ってまだスキル使っていないようだったけど、使わないんだらうか？ ……ああ、そうか。最初から手の内を見せないように使っていないのか、なるほど、英介にはよく考えてるな。

心の中で少しばかり感心した。まあ何時もやらない事をするほどにこの大会で優勝したいのだろう、アイツはやるときはやる男だからな。

しかしよくスキルを使わないで持つてられたな、確かに魔剣は攻撃力が高いが……英介は戦士に数回ほど攻撃を受けていたハズだ。それなのにあまり痛がる素振りは見せずに直ぐに反撃を開始した、となると、あのバーテン服は恐らく防御力が高いのだろう。

「ホントにスキル使わないでよく持ち堪えられてたな？」

「へ？ ああ、言ってなかったね。実は既に一個スキル使ってるんだよ、ラッキーブースターって言ってるね、それを発動したら運良く攻撃力と防御力が倍になるエンチャントが掛けられたんだ。失敗したらどれか一つのステータスが半分になっちゃうけどね」

「ふーん、そうか」

倍になった攻撃力と防御力に俺がエンチャントで更に上がったから、あの戦士、サイガ・ヴァイスが吹っ飛ばせたのか？ それまでは互角みただったが。なら、英介とヴァイスはエンチャントなしで戦ったらどっちかが力負けしてたって事か？

運が攻撃力となるが、それに攻撃力が上がるエンチャントを掛けるとどちらの攻撃力も高くなる、だが結果的には単なる攻撃力と運の攻撃力は全て合計される、と英介が控え室を出るときに言っていた。だから運の攻撃力で互角だった英介は、俺の攻撃力が上がるエンチャントで両方が合計されてヴァイスの攻撃力を上回り、あの時力任せに吹っ飛ばせたのだ。

「……………お？ 準備が終わったってよ」

本日三度目のアナウンスがクリスタルから流れてくる。この第三回戦タッグ戦、俺達は今度は二回戦目らしく、少し早くここ選手入場口に来ている。

「それじゃ行こうか」

「ああ」

俺達はフィールドに向かった、優勝への道に歩を進める為に。

「アイツらか……………」

「そうだね」

フィールドに立った俺達は相手選手を見た。相手は二人の男女、

男は地味な色の軽装で腰に短剣を付けていることから、恐らくシーフだろう。まあまあ顔はいい方だ。女は白いローブに身を包んでいて、手にはよくみる木の杖が握られているから、魔法使いだな。こちらもそれなりの美少女だ。

それにしても…………アレだな…………こう…………何というか…………。

「ねえねえあつち何か強そうだよ？ 負けないよね？」

「大丈夫だって、負けないさ。だから安心していい」

「やっぱりキー君は頼もしいね！ ますます大好きだよ！」

「おいおいこんな所で抱きつくくなって、まったくミントは可愛いな」
そういつて仲良さげに抱き合う二人。仲睦まじい、と言ってしまえばそれまでだが…………。それを英介の前でやらないでくれ、頼むから。」

「……………あー、ホントリア充爆発してくんないかな？ 何なんだろうね？ 人に見せびらかして楽しいのかな？ 見られて嬉しいのかな？ ドMなのかな？ 死ぬのかな？」

「落ち着け英介、俺達はまだ若いんだ。きっとその内チャンスがやってくるぞ」

恐ろしい目付きで相手を睨む英介を宥める。今にも一人殺しかねないほどの目付きだ、額ひたいに青筋が浮かんで見えるぞ、スゲー怒ってるよ。」

「若い？ チャンス？ 誠はいいよね、美人の姉さんが居て、学校では月に五回はラブレター貰ってるなんてさ」

マズイ、余計な事を言ったせいで俺に怒りの矛先が 何とかして回避せねばならんな、怒りに狂った英介は鬼と化すからな、前にそれで酷い目にあっただよ、もうあの惨劇を繰り返してはならない。これだけは回避せねば、どうにかしてこの状態を切り抜ける打開策を発案しなければ !

と、俺が必死に打開策を考えているスキにも相手のイチヤイチャは止まらない、あ、キスしやがった ! もうやめてくれ！ 英介が俺を殺しそうな目で睨んでるから！！

ヤバイヤバイ！ 英介がリア充爆発しろを連呼し始めたぞ！？
何か 何かいい打開策は ! ?

そのとき俺の脳はフル稼働し、この状況を切り抜ける名案を発案した！

「英介！ この大会で優勝すればお前モテモテだぞ！ それと今までお前がモテなかったのは、俺が近くでモテてたからだ！ だが今回はどちらもモテモテになれるチャンスだぞ！？ こんな機会を逃していないのか！？ もし、もしも優勝できれば 英介、お前は彼女が出来る！！」

ふっ 我ながらよくやったよ。まあこれで英介が反応してくれば、モチベーションやらは上がって、おまけに俺からその殺気の籠った目付きを止めてくれるだろう。

俺の言葉を聞いた瞬間、英介から殺意の目付きが収まった。そして口元を三日月のように吊り上げ……こう宣言した。

「優勝して我がモテモテになれるんなら……まずは我が直々にキミ達を滅してあげよう！」

英介は大声で未だに抱き合っている二人に指さしながら、どこの魔王の発言だよ、と言わんばかりの発言をした。しかし、二人はこちらにまったく気がつく様子がなく、お互いに抱きしめ合っている。そんなことを公衆の面前で堂々とやっていると……ほれ言わんこつちやない、観客の男の一部が目撃の敵を見る様な目付き（先程の英介並み）で睨んでいるぞ？

「……月のない夜には気を付けな」

さらりと今度は小声で呟いた。でもまあ、何とか俺をターゲットから外せたみたいだ、よかったよかった。……実は前にこれと似たような事があってだな、そんなときは俺は特に止めはしなかったんだが、何を血迷ったか事の発端となったカップル……ではなく俺に、トンデモない仕返しをしてきたことがあった。

その内容は、前に俺が秘密にエロゲとギャルゲーを買っていて、ちゃんと押入れの奥の奥にしまっていたんだ。しかし、それを英介は見つけ出し、あるうことか姉さんに渡しやがった！ それを知らずにコンビニから帰ってきた俺は、自分の部屋に戻ったところ、何故か部屋に居た姉さんに俺が隠していた数々のエロゲとギャルゲーを見せつけられ、その後数時間に及ぶ説教が始まった。

そして後に英介が密告していたということを聞き、木刀を持って

ほぼ足元に降りおろされた魔剣の思わぬ衝撃でシーフが驚きの表情で吹き飛ばされる。それを見て英介は振り下ろした魔剣を肩に担ぎ、見下すような言い方で言った。

「アンタらよく勝負の前だって言うのにイチャイチャしてられるねえ？ そんなに浮かれてたら今に足元すくわれるよお？ あ、ちなみに魔法使いさんの方はウチの最強のエースが叩き伏せますんでそこんところよろしく」

「……はあ、お前って言う奴は……こんな時に挑発してどうする？」

英介の調子つぶりに少し呆れながらも、まあ挑発して相手の集中力を掻き乱すのも良いだろう、と思っていた。相手がそんな安い挑発に引つかかればの話だが……。

ところが……。

「はっ！ 言ってくれるじゃないか。逆に足元すくわれるのはアンタらかもしれねえぜ？ で、その最強のエースってのはその白衣の奴だろう？」

ヨロヨロと立ち上がったシーフが俺を指さす。白衣の奴、というのは間違い無く俺の事だろう。この大会に白衣で出場してる奴を俺は未だに自分以外見たことがない。

シーフの問いに英介が自信満々に答える。

「ああそうさ。その白衣の男がウチの誇るエース、最強の魔法使いマコト・キシベさ！ 降参するなら今のうちだよ？ 誠はどんな魔

法でも使いこなせるからね。回復や支援だってお手の物、勿論攻撃だって出来る」

「へえ……そりゃあ凄いね。でも、僕のミントだって負けてないよ？ 特に怒った時が一番強くてね……」

その時、轟音を立てて何かが英介の横を通り抜け、後ろの壁に直撃した。見てみると、壁は衝撃でボロボロになり瓦礫がれきがガラガラと崩れていく。

英介は何が起こったか理解できないと言った顔で、何かが飛んできた方向に視線を向けると……、魔法使いが木の杖をこちらに向けて構えていた。

一歩ずつ、ゆっくりと何かを呟きながら英介に向かっている。何かヤバイ予感がする、エンチャントで強化しているとはいえ……・さっきの魔法は中々威力が高そうだった、俺が魔法使いの相手を努めるべきなのか……。

魔法使いは英介を通り過ぎ、シーフの元へゆっくりと向かった。

「キー君、ケガはしてない？」

「ああ、吹き飛ばされただけだからな」

「そう……よかった」

片膝を付いてシーフの肩に手を置く。だが先程とは様子が違う、少し口数が減っている気がする、それに……心無しか殺気が感じられる。

魔法使いはゆっくりと立ち上がり英介の方を向き、言った。

「私のキー君にケガをさせようとするなんて……許せない。絶対に許さない！ お前ら何かいっそ殺して死んでも後悔させてやる！！」

そう激昂した途端、英介、いや俺達に向かって火球を飛ばしてきた。その火球はサッカーボールほどの大きさだが、驚きべきスピードで飛んできたので、俺達は少し反応が遅れて被弾してしまった。

「あつちい！？」

「くそつ！ 英介はシーフを先に潰せ！ 俺はコイツを何とかする！」

「頼んだよ！」

火球のせいでちょっと焦げてしまった白衣の着崩れを整える、そして狂ったように魔法を連射している魔法使いを睨みつける。

当たったのは最初の一発だけで、他の火球のほとんどは見当違いな方向に飛んでいく。英介が再びシーフに駆け出していったため、魔法使いが集中して火球を英介に発射する。

俺は英介から注意を引きつける為に魔法を唱える。

「ダブルブレイド！！」

刀を抜き放ち、二つの斬撃を繰り出して英介に当たりそうな火球

を撃ち落とす。

「おい魔法使いさんよ、アンタの相手はこの俺だけ？」

「待っててねキー君、邪魔者を消してくるから」

第十七話 歪んだ愛（後書き）

矛盾、誤字脱字などがありましたら報告よろしくです。

様々な属性の銃弾を打ち出す事。そして銃弾自体にエンチャントを掛けて威力を高める事の二つを今ここで試す！

「パワーブースト！ ウォーターエンチャント！」

直ぐにエンチャントを二つ魔銃とその弾に掛けてやる。さて、これで準備は整った、後は引き金を引いて撃ち落とすのみだ……

引き金を握る人差し指に力を籠め、銃口からエンチャントを掛けた銃弾を打ち出す。まずは一発、真っ直ぐに飛んで行く銃弾は火球に急速に接近していき、火球に当たり……火球を水蒸気へと変えた。

よし、行ける！ そう心の中で叫んだ俺は、今度は迷いなく引き金を数回引き銃弾を数発打ち出すと同時に、刀を構えて火球を斬りに掛かった。

「ウォーターエンチャント！」

今度は魔銃ではなく刀に水属性のエンチャントを掛けて、火球目掛けて刀を振り下ろす。

刀を一振りすると水しぶきが上がる、水属性が入っている証拠だ。水の斬撃を浴びた火球はまたたく間に空气中に水蒸気となり消えていった。

それと同時に先程放った弾丸が火球に直撃して跡形もなく空気中に消し去る。打ち漏らした火球は二、三個だろう、まあこれぐらい出来たなら修行の腕も鈍なまつてはいないようだな。

くるりと回り、魔法使いに向き直る。すると案の定化け物でも見るかの様な瞳で俺を凝視していた。そうだろう、自分が発射した数個の火球が謎の機械から打ち出された弾に蒸発させられ、今度は細長い剣の様なもので水しぶきを上げながら火球が一刀両断されてしまった。

この世界の住人にとっては俺の両手に持つ武器、刀と魔銃は見ただけでは何か理解できないのは当然だろう。見た目を知り、中身を知り、構造を知り、製造法を知り、そしてその歴史を全て知らなければ“理解”しているとはいえない。

「何なのよ……あなた一体何者なのよ……！」

「はっ、ただの魔法使いさ。またの名を錬金術師……アルケミスト……つてな」

「殺す！ 死んでキー君にケガさせようとした罪を償ってこい！！」

少しおどけて言ってみる。それにまた力チンと来たのか、魔法使いが青筋を浮かべて怒声と共に大量の魔法を発射してきた。

今気づいたが、魔法使いは最初から全ての魔法を魔法名だけ言っている、つまり俗に言う無詠唱なのでかなりの手練と見てもいいだろう、最後まで油断はしないように慎重に行こう。

視界を埋め尽くすほどの弾幕、アイツの魔力は底がないのか？と思うほどの量だ。これは流石に回避しようにも流れ弾が戦っている英介に当たるかもしれない、なら回避せずに全て、一つ残らず撃ち落とすしかない。

今こうして頭で考えている間にも魔法の弾幕は迫ってきている、あまり時間はない。どうする？ 余り威力と範囲がデカければ周りにも少なからず影響がでてしまう恐れがある、かと言って威力が小さく範囲も狭い魔法を使った所で撃ち落とせる数なんてたかが知れている。

ええい考えていてもしょうがない！ 一気に撃ち落とす！！

「メテ………っ！？ 英介！？」

アルケミスト
錬金術師が覚える魔法でもっとも強い魔法である メテオ を放とうとしたが、途中で突然の出来事につい魔法名を唱えるのを中断してしまう。

横から飛んできた英介は俺の前に立つと、一度こちらを向きニヤリと笑ってみせた。そしてもう一度前方の迫り来る弾幕をキッと睨むと、手に持った魔剣を構え、一つのスキル名を叫んだ。

「ラッキーブレイク！！」

魔剣が淡い白に輝き出す、到底魔王の剣とは思えないほどにまで神々しく輝いていた。俺はそれに魅入っていた、魔法使いでさえ、誰も彼もが神々しく輝く魔剣に目を引かれていた。

「おおおおおおおおおおお！！！！」

雄叫びを上げて英介は弾幕に突っ込む、俺は突然の事に反応が遅れてしまった。だが声を出した時には既に英介は魔剣を構え、横に思い切り一閃した瞬間だった。

「え、英介！ お前何を……っ!?」

言葉を言い終わる前に、俺はその光景にまた目を奪われた……
……。横に一閃した魔剣からは光り輝き巨大な斬撃が飛ばされ、直ぐ目の前にまで迫った数々の魔法を直撃した。

斬撃が直撃した魔法は花火の様に一瞬眩く光り、空中に四散した。しかし斬撃はそれだけでは止まらない、次々に魔法に当たっては四散させて、ただ前へと突き進んでいつている。斬撃はリーチが横に長いいため、魔法を逃すことなく直進している。

四散した魔法の小さな結晶の様な物が辺りに静かに、優しく降り注ぐ。輝くその結晶は、人々を更に魅了した。

放たれた斬撃は魔法を消し続け、遂に一番後ろに有る巨大な光属性の球にぶつかった。斬撃は徐々に光球を切り裂いていく……
。そして、光球を一刀両断した。

これには堪らず魔法使いも立ち尽くし、目を見張っている。

光球を一刀両断した斬撃は会場の天井まで切り裂くを思われたが、天井に当たる寸前でみるみる小さくなって、最後には電球ほどの大ききさになり小さな光の粒となって四散した……。

「英介、今のが……」

「そう。今が僕の唯一の遠距離攻撃 ラッキーブレイク さ。これは武器を持っていないと発動できないスキルでね、まあ誰でも拳と脚さえ有ればそこからさっきの斬撃が飛ばせるんだけどね。実質

剣とか持っていないくとも己の体さえ有ればこのスキルを使えるのさ」

戻ってきた英介に尋ねると、魔剣を鞘に収めて頭の後ろで腕を組みながら説明する。

「まあ当然威力も高いんだけど、その代わりに一定時間の間運のステータスが - 100 になってしまうんだ。僕は運が攻撃力の遊び人だからこれがマイナスされると結構痛いんだよね、与えるダメージがかなり減るから一定時間を過ぎるまで防戦一方の戦闘になるのが、このスキルのデメリットだね」

「んじゃ、その一定時間が経つまで英介はサポートに専念してくれ。小さい火球ぐらいなら魔剣の攻撃力でカバーできて、撃ち落とせるだろ？ 攻撃は俺に任せな」

「分かった。早くあの“二人”を倒してくれ」

ん？ 二人だと？ 英介はあのシーフを無視してまで俺を守りに来たのか？ 確かにあの時メテオを唱えるのを中断してしまつて危険に陥つたが……。まさかスキルを見せるためだけに行動した訳じゃないよな？

「二人つて……。魔法使いとシーフか？……。はあ、まあ助けに来たことは感謝するが、せめて倒してから来いよ」

「え？ 助けに何か来てないよ？ ただあのスキルを見せたくて……。 」

ははは、と笑う英介。まさか、俺は助けられたと思つてたけど、英介はスキルが見せたいから発動したつてのかよ。……。ま

あ結果的には助かったからここはよしとしてやろう。

俺はやれやれと言った感じで両手を上げる。それを見て英介は苦笑した、まさにその瞬間だった。英介の後ろから大きめの氷球が迫ってきた、それに俺は素早く反応する。

「英介どけっ！ バリアー！！」

状況が把握できない英介はポカンとして、その場に固まる。俺はダッシュで英介の背後に回り、バリアーを展開する。氷球は速度を落とすことなく直進し、バリアーに直撃する。重い衝撃が神経を通して伝わってくる、かなりの威力だ。

当たる寸前でバリアーを展開したが、何とか間一髪間に合ったようだ、もう少し遅ければ英介は恐らく重傷だっただろう。俺はバリアーに入った数多くのヒビを見て思った。先程の火球とはまるで威力が違う、ようやく敵さんも本気を出してきたって訳か……。

衝撃で舞い上がった砂煙が晴れる、その先を俺は見つめる。勿論、その先に立っていたのは所々傷だらけのシーフと、対して無傷だが俺達を恐ろしい眼光で睨みつける魔法使い。英介も状況が理解できたらしく、一つ溜め息をついてから魔剣を鞘から静かに抜くと、トスツと軽い音を立てて肩に乗せた。

「相手も本気で来るみたいだね。今までの様子見……これから本気で潰しにかかってくる、こっちも本気で相手をしようか」

ニヤリと不敵に笑う。その姿は世界の数ヶ月前のあの時を見ているかのようだ……。

あの時姉さんが不良に絡まれていたのを発見し、偶然居合わせた英介とたつた二人で数十人は容易に目視できた不良達に突っ込んだ。俺達は素手、不良はそれぞれに武器を持った状態で戦った。

辛くも何とか約半分を撃破すると、周りの不良がリーダーらしき男を呼んできた。俺達は不良を蹴散らし、リーダーの男と対峙したが、予想以上の強さで俺達は一瞬にして周りを囲まれた。もうダメか……このまま二人共リンチにされるのか……、そう思った時だ。

俺達が必死に戦っているさなか、スキを見て不良たちの目から逃れた姉さんは、一度表通りに戻って警察を呼んでくれていた。

ほどなくして通報を聞きつけた警察が駆け付けてくれ、間一髪、リンチで重傷を負う事は避けられた。その後簡単な手当を近場の病院で受け、帰路を歩き、家に戻った。家に帰り玄関に入った瞬間、涙目の姉さんがダッシュで俺と英介に飛びついてきた。

まあ、当然その後にごっぴどく叱られたけどな。でも今となっては懐かしい思い出の一つでもある。

「英介のその顔を見てると数ヶ月前のあの出来事を思い出すよ」

「ああ、あれ？ あの時はやばかったよね、不良がナイフを取り出した時は冷や汗ダラっただらだったよ」

「最終的にはリンチされそうになったがな」

「あの時は美咲さんに心底、惚れそうになったよ……」

「ごめんごめん、そんな怖い目で見ないで〜」

「……………まあいいさ。でも今この瞬間ってあの時に似てるよな？」

一瞬、頭の上にハテナマークを浮かべた英介。そしてその意味が分かると、なるほど、といった顔で返事を返した。

「そうだね。あの時も、今回も、お互い本気で共闘したんだったね
！！」

「ああ！　今回は派手にやってやろうぜ！！」

俺達は目の前に敵に向かって駆け出した。あの時、あの頃を連想させるように……………。

第十八話　まずは様子見（後書き）

矛盾、誤字脱字などがありましたら報告よろしくです。

あ、そう言えばもう12月ですね。これが12月最初の投稿になりました、残り一ヶ月で今年も終わりだ！

第十九話 愛は時に狂気となる

誰よりも先に飛び出したのは英介だった。素早い動きでシーフとの距離を縮めていく。ここでシーフが動き出した、恐るべき速度で駆けていく様は忍びを連想させる。そしてお互いが攻撃範囲内に入った瞬間、英介の魔剣とシーフの短剣がキキントと甲高い音を立てながら交差した。

何度も繰り返し交差し、お互いが互角のように思えたが、徐々に英介が押されている。やはりあのスキル ラッキーブレイク のデメリットが響いているようだ。まだエンチャントの効果効いているとはいえ、俺が掛けたエンチャントには運のステータスを上げる物が掛けられていなかった、いや、掛けられなかった。

何故ならそのエンチャントを掛けてしまうと、運は上がるが速度のステータスがかなり下がってしまうデメリット付きだからだ。だから速度の早いシーフと戦っている英介に掛けてしまうと、シーフの速度を利用して連続して攻撃を加えられてしまう。

なので掛けるに掛けられないのだ、他に運を上げるエンチャントもない。英介がスキルを使って挽回してくれればいいんだが……

「パートナーの心配してる場合？ 随分と舐めたマネをしてくれるじゃないの」

「なら待つてなくてもよかったじゃねえか。さっさと攻撃していいものを、アンタはあくまで正々堂々と戦いのか？」

「何言ってるの？ そっちが弱いからわざと待ってあげたんでしょ？ ちなみにあたしは正々堂々と捻り潰すのが性に合ってるの、卑怯に戦ったらアンタ達何か瞬殺できるよ」

「へえ………？ んじゃあ、弱いのはどっちだろうな？」

我ながら安い挑発に乗ってしまったな、とは思っている。だけど俺が本気で戦えばそこいらの奴なんて敵じゃない、そう感じている。だからといって情けをかけても、弱い魔法を唱えて手加減しても自分は何も得られない、ただ一つ得るものと言えば虚しい虚無感だ。

俺は手加減をしないためにも、後戻りが出来ない状況を己で創ることにした。もちろん、相手は強い。まだ相手の技量は未知数だ。そんな相手に弱い魔法を使ったところでもつと強い魔法でかき消されるのがオチだ。

まずは手駒を増やそう。ホムンクルスの召喚で手数はこちらが圧倒的だ。でも今回は一体だけでいいだろう、三体も召喚するとMPが半分ほど減ってしまうからな。まだMPが半分以上残っているとはいえ、この勝負は長期戦になるかもしれない故にMPはなるべく温存していきたい。

「ホムンクルス召喚！ キラーナイト！」

地面に歪な魔方陣が展開され、一度強く光を放つと次の瞬間には蒼い鎧に身を包み、兜から見える紅い目、そして銀色の槍を手に持ったキラーナイトが姿を現した。

俺の正面に立つキラーナイトは今か今かと命令を待ち望んでいる。己の槍を振りたい衝動に狩られているのだ。コイツはキラーホム

ンクルスの中でも最強と謳われた奴だ、ちょっとやそつとじゃまず負けはしないだろう。

俺は意を決してキラートナイトに命令を下した。

「英介をカバールしてこい！ 殺さない程度に痛めつけてやれ！」

命令を聞いたキラートナイトはガシャガシャと鎧を揺らしながら、シーフに押され気味の英介の元へ向かった。これで英介の方は心配いらないう、俺は負けな確かな自信があるからな。

「何でアレをバートン服の奴に行かせたよ、こっちで戦わせた方が有利じゃないの？」

英介を自身の槍で援護しているキラートナイトを指差しながら、魔法使いはそう言った。

「お前は馬鹿だな。英介が少しばかり押され気味だったから援護に行かせたまでさ。俺の方には必要ないからな」

「へえ？ あたしよりも自分が強いって思い込んでるんだ？」

「ああそうさ。お前より俺の方が何倍も強いからな、俺は。実際に俺が本気で魔法を唱えたらここら一体を一瞬で焦土に出来るぜ？」

別に嘘を言っているわけではない、本当に出来るからこんなことを言っているのだ。魔法使いはそんなの嘘に決まってる、何て思ってるだろうけど、それは俺の実力を知らないからだ。

いや、もしかしたら本当に出来るのかも、と思っていたりするか

もしれん。普通の魔法使いには習得できないホムンクルスを召喚してみせたのだ。それに自分が放った火球もほぼ全て相殺されているなら、その気にさえなれば何時負けていたかは想像に難しくはない。

「そうなんだ。でもそんなこと、あたしだってできるよ」

「どうだろうな？ アンタがどんな魔法を使うかは知らねえけどさ、俺に勝てるわけがねえだろ」

「っ！………じゃあ、お前に勝って証明してみせる！！」

そう叫び、手に握った木の杖を俺に向けると、杖の先から当たれば確実に無事では済まないと思われる電撃を飛ばしてきた。電撃はバチバチと音を立ててこちらに接近してくる。

「その程度か………？ サンダースピア！」

刀を振るい、電撃の槍を発生させて魔法使いが放つ電撃に直進していく。そして電撃とぶつかったサンダースピアはバチッ！ と一際大きな音を立てながら電撃を消した。さらにそのまま勢いが衰えることなく進み続けるサンダースピア、だが魔法使いが瞬時にバリアーを展開してサンダースピアをガードする。

「っ！！ 何でこんなに威力が………っ!？」

サンダースピアをバリアーで防いだかと思えば、威力が予想以上に大きく驚きの表情を見せる。既にバリアーの半分にヒビが出来てきており、しかし一向に電撃の槍が消える気配はない。

防ぎ続けているうちに、展開しているバリアーの全体がヒビに覆

われていき、最後にサンダースピアがバチッ！ という音がなった瞬間眩く光りだし、バリアーが破壊された。

「ぎゃんつつつつつつ！？」

短い断末魔がフィールドに響いた。電撃を浴びた魔法使いはその後にヨロヨロと千鳥足で数歩歩いた後、ドサツと力無く倒れ伏す。電撃による痺れの影響で時折痙攣はするが、立ち上がってくる様子はない。

大抵の魔法使いは魔法の耐久度は高いのだが、ただ単にこちらの魔法がそれを上回っただけの話だ。レベル差が有りすぎる、圧倒的なまでの力の差。

「ふん、たった一発でこのザマか……ダークベアーの方がまだまだ強かったぞ？」

「ダー……クベ……アー……？」

途切れ途切れで言葉と発する、声が震えており、その様子から明らかな恐怖が伺える。今目の前に映る俺はコイツから見れば悪魔に等しく見えている事だろう。

俺はゆっくりと歩きだし、今だ地面の上に倒れている魔法使いの元へ歩を進めた。魔法使いはその足音に気が付くと顔を若干上げる仕草をしたが、まだ痺れが取れていないため全く上げられていない。

「SS……ランクを……倒したの？……
う……そ……」

「嘘なもんか。ちゃんと証言者もいるぞ？ ああそつだ、言っておくけど、補助魔法は掛けてもらったが約八体ぐらいかな？ まあ全部倒したぞ？ 一回ぐらいいしか攻撃喰らってないし、でもまあ、表には出してないから知らなくても無理ないか……」

それを聞いてますます顔を蒼白させる。俺は魔法使いの前で足を止めて立ち止まり、そして手に持った魔銃を魔法使い額ひたいにその銃口を突き付けた。

「今のお前じゃ俺の足元にも及ばない、もつと魔法を勉強してから来い。スリープショット、眠れ……」

恐怖に怯える魔法使いに突き付けた魔銃のトリガーに手を掛け、睡眠属性を弾丸に掛けた状態でトリガーを引き、撃ち込んだ。

ズガン、一発の発泡音が当たりに響く。だが魔法使いの額には何も傷など出来ていなかった、何故か？ それは麻酔の効果がある弾丸が額に当たった瞬間に、弾丸の中身だけが魔法によって打ち込まれたからである。眠らせるだけで、殺すわけには行かないからな。

「キー……君ごめ……ん……」

強力な眠気に晒されながらも愛人に想いを告げる、しかしその言葉は彼には小さすぎて届かなかった。無情にも睡眠魔まがたにより瞼は重くなるばかり、そして遂にはゆっくりとその瞳を閉じていった……

「後はシーフだけか……っ!？」

「うおおおおおおおおおお!?!」

イールドを少しずつ目で探している時だ、一瞬だけ見えた。

壁に寄り掛かって気絶している英介。

片膝を着いて自身を囲むように魔方陣を展開して、回復の合図を発信しているキラークナイト。

俺は軽く絶望して、何故二人があんな状況に？ と考えたが、そうさせる暇無くシーフが短剣を突き立ててくる。それを避けて、俺は仕方なく思いシーフに問う。

「アイツらはお前がやったのか!？」

「邪魔だったから気絶させたまでだ！ だが貴様は気絶では済まさんぞ！ 覚悟するんだなあ!？」

激しい短剣捌きで白衣が徐々に切り傷だらけとなっていく。どうやら言葉では通じないらしい、なら肉体言語で分からせてやるまでだ！

腰のホルスターから素早く魔銃を抜き取り、発泡する。だが、いつも簡単に避けられてしまう。おいおい……。銃弾さけるってお前人間かよ……。エンチャントでも掛けてなきや無理だろ……。っ!？ エンチャント!？ そうか、アイツそう言えばミントって魔法使いに開始直後からエンチャントを掛けられていたはず、なら英介やキラークナイトを倒したのも頷ける。

それに先程までとは比べほどがない程までに強いのは、今まで手加減をしていて、俺が魔法使いを倒したのがキツカケで、怒りで俺を殺すために手加減を止めたのか。そんなに全力で殺すほど俺が憎

いのか……。

そっちが強力なエンチャントで殺しに来るんなら、こっちだって考えがある……！ 形勢逆転の秘策がなあ！！

「全く、お前が本気出すと厄介だな。じゃ、俺も本気出して良いよなあ！？」

第十九話 愛は時に狂気となる（後書き）

矛盾、誤字脱字などが有りましたら報告よろしくです。

第二十話 紅葉流派

この状況を逆転する策を編み出した俺は、まず最初に攻撃されないように動きを止める事にした。バックステップで一旦少し距離を取る、やらないよりはマシだ。もちろん、シーフが妙な事をさせる前に仕留める気で駆けてくる、その駆けている時にとある魔法を掛ける。唱えるのが少しでも遅ければ短剣の餌食だ、魔法名だけの詠唱だが、噛んでしまったり、間違えた時点でシーフの攻撃は確定する。

シーフが動き出した、その瞬間に俺は口を開いて魔法名の詠唱を始めた。噛まないように、突っかからないようにしながら、猛スピードで迫るシーフに攻撃される前に、俺は必死に言葉を走らせた。

「エンチャントキャンセル」

その魔法を唱えた瞬間、ガクン、とシーフの走る速度が減少した。一瞬、ポカンと何が起こったのかわからない様子の顔をしたが、直ぐに怒りの表情が戻り、一撃を入れようと躍起になって走り続ける。

人間とは自動車と同じで直ぐには止まれないのである、そう、俺が既に片手にあつた魔銃をホルスターにしまつて拳を構えている事に気が付いていたって、止まらない。

「っ！ くそぉ！」

今更足を止めようとしてももう遅い、遅すぎる、既にお前は俺の拳の射程距離範囲内だ！俺は拳に力を込め、一度引いてから、全力で拳を喰らせてシーフの腹に叩き込んだ。

「おらあああああああ!!!」

「がっはあ………!?!」

少し捻りを加えた拳が無防備な腹にめり込む。かなりスピードが出ている所に渾身の拳を叩きつける、スピードで威力が上がっているため、少なからず胃に悪影響を及ぼすだろう。

そのまま更に力を込めて吹き飛ばす、すると半円を描いて宙を飛び、硬い地表の上を二〜三回バウンドして何回転か転がった後に漸くその動きを止めた。

「ぐっ………貴様………一体何をした………ごふっ!」

鮮やかな赤の血が口から吐き出される。声は途切れ途切れに掠れて弱々しくなっており、腹から伝わる激痛により上半身を起こせない。手放した短剣がクルクルと回転しながら地面に突き刺さる。

「なに、簡単な事だ。お前に掛かっている全ての補助魔法を一時的に解除させてもらったまでだ、魔法の効力が消えるまで後………約十分つてところか。それまでにお前を気絶させてやるとしますかねえ、短剣もそこに刺さってるし、そんな状態じゃ引き抜くコトだつて適^{かな}わないだろ?」

刀をヒュンツと一振りして、その刀身を鞘に収める。その動作を終えると、俺は勝負を終わらせるためにゆっくりと一歩ずつ、片手に魔銃を握りながら足を進めた。

「ああああ！！！！」

先程のことなど無かったかのように、全力で駆け出す。そして少しカーブし、突き刺さった短剣を地面から素早く抜き去り、怒声を上げながら短剣を振り上げて俺に突っ込んでくる。

魔銃を瞬時にホルスターにしまい、刀の鞘の部分を掴み、もう片方の手で柄つかの部位に手を添える。少し腰を低くし、態勢を整え、迫り来るシーフを目に捉える、その動作を見逃さぬように。

「いいか？ 刀つてもんはただ斬るんじゃない、美しく斬るんだ」

脳内に懐かしい声が再生される。一つ一つ、その言葉を思い出していく。

「まあ見てろ。これが最初で最後の教えだ、岸边家に代々伝える流派をな……」

「死ねええええええええええ！！！！」

振り上げられた短剣、俺はその瞬間と同時に一気に鞘を押さえる力を込め、柄を思い切り握って鞘の中に潜む刀身を抜き出した。

「紅葉流派・居合切りの構え」

岸边家に代々伝わってきたこの流派、父さんが死ぬ前にその全てを受け継いだ。父さんは言った、無闇矢鱈むみやたらにこの流派を使うんじゃない。何故か？ それは、紅葉流派と言うのは元々は紅葉した木の下で生まれたのが始まりと言われ、その流派の構え一つ一つが美し

すぎたため、美しい物は何度も見るとやがてその美しさが薄れていく。という理由で生まれてからたった三年で姿を消したと言われている、だが途絶えたという意味ではなく影に隠れた、と言った方が正しいだろう。

そして決して継承者を途絶えさせることなく現代の俺まで生き続けてきた、そしてまた俺から次の継承者へと伝えられていく、影の中でひっそりと。何時までも、美しい流派で在るために。

「ぜあー!!」

全力で地面を蹴った俺は、刀を振り抜きながらシーフを通り抜けた。そしてカチン、と刀を鞘に収める。それが終わったとたん、シーフの身体中に傷が一瞬にして出来上がり真っ赤な血が吹き出した。

「ここで！　ここで終わって溜まるかああああああ!!!!」

フラついて倒れそうになるも必死に足を使い踏み止まる、そして態勢を立て直し、後ろに回った俺を向くと同時に鋭い眼光で俺を睨み、またもや特攻を始めた。

俺は短く深呼吸をして心を落ち着かせる。今からやる構えは少しでも気分が落ち着いていないと刃の軌道が狂う繊細な物だ、それゆえにその構えを使う際にはこうしてどんな状況でも深呼吸をするのだ。

深呼吸が終わり、心が落ち着いたので確認し、ゆっくりと鞘に片手を添える。もう少し、もう少しで刀の範囲内だ、それまでその構えを崩すな。そしてシーフが範囲内に入った瞬間先程の構え　居合切り　と同じように一気に刀を振り抜き、舞うように振り続ける。

まるで踊るかの様に振り続ける、美しく無ければ紅葉流派では無くなってしまふ、“紅葉流派を使う時は常に美しく在れ”それが岸边家に代々受け継がれてきた言葉だ。

「紅葉流派 桜の構え」

「がっはあ………!？」

身体を仰け反らせ、新しい傷口から血を吹き出しながら吹き飛んでいった。だが、吹き飛んでもなお短剣を離さない。ドサツと硬い地面にその身を落とす。何故短剣を離さなかったのか？ それは腕が硬直して離せなかっただけかもしれない、でも――

「ぐ………おお………つがあ!」

――こうして短剣を地面に突き刺して杖代わりにして、立つために離さなかったらしい。シブトイ奴だ、弱めにやったから傷が浅かったのか？ 一応ここで殺しは禁止されてるから、気絶させるのが決まりなんだけど………あんまりやりすぎると死なせる可能性があるな。どうするべきなのか………ここまま気絶させてもきつと後で俺を殺しに来るだろう、なら、今の内に解決しておきましょうかね？

「はあ………しょうがねえか オールヒール」

自分が指定した数名に状態異常回復、HP全快の効果がある魔法だ。欠点はMPの消費が多いことかな？ まあ、白衣の御陰で消費を抑えられてるから良いんだけどさ。

天井に向かい人差し指を指すと、人差し指から淡いグリーンの光

が溢れ、水の上に水滴が落ちたかのように波紋となつて淡いグリーン
の光は拡散していった。そしてその光が英介、魔法使い、シーフ、
俺の頭上に降り、グリーンの丸い球体が身体を蜷局とくろを巻くかのよう
に回り、完全に身体を包み一瞬更に淡く光りだし、それが収まった
時には俺達はMP以外の全てのステータスを回復していた。

「？ 貴様………情けを掛けたつもりか？」

「情け？ そんなもん知らねえよ。つまりここで決着着けるって言っ
てんだよ、後でお前が何かしてきたら鬱陶しいからよ。それに……
……怪我人は放つて置くのは、俺は出来ないタチでね」

それを聞き、ふっ、とシーフが笑う。その眼からは今までの殺気
は嘘の様に消え去っていた。

「ルールは正々堂々と魔法・スキルの禁止だ。補助魔法もな、と言
つても既に俺とアンタは効果が切れてるだろうがな。んで、倒れる
まで続けるぞ。片膝を付いた状態はセーフ、吹っ飛ばされて倒れた
場合は五秒、五秒経つても立たない場合は吹っ飛ばされた方の負け
だ。小細工は一切無し、自身の武器と力量のみで決着を着ける、ア
ンタもそれで満足だろう？」

「ああ。実に簡単なルールだ、シンプル・イズ・ベスト、とはまさ
にこのことだろう」

「逆にルールがややこしくても、それはただ単にめんどくさいだけ
だ。こういう時はシンプルでシンプルなルールが一番って相場が決まっ
てるもんなんだよ」

片手で刀の鞘をゆっくりと撫でながら俺は言う。シーフは英介と

魔法使いをしばらく見つめ、何か思い出を語るかのような物腰でその口を開いた。

「お前の相棒、ミントの補助魔法が無ければ俺が負けていた。アンタに比べれば大分マシだったけどな。でも……一回本気で殺りあってみれば俺は確実に負けるだろう、俺は魔法が使えない落ちこぼれだ。必死に習得したスキルも戦闘には向かないモノばかり、だが剣の才能が無ければ俺はこんな所には来られなかった。……・俺はミントが羨ましかった、魔法を使える人間が」

俺は無言でその話に耳を傾けた。いや、傾けざるを得なかった、何故なら無意識の内に身体がそうしていたからだ。だが、いや、という訳でも無かった。

「初めて彼女の魔法を見たときには、他の人間が使っていた魔法よりも何倍も輝いて見えた。でも彼女と居るうちに、だんだんと他の人間の魔法さえも輝いて見えるようになってきた。これは彼女、ミントが魔法について毎日のように説明してくれていたからだ、じやなきや今でもミント以外の人間が魔法を使える事に憎悪を抱いていただろうね。だけど、それも今日で本当に終わりだ……」

ゆっくりと、握り締めた短剣を徐々に上に上げていく。そして短剣は真っ直ぐに天井を差し、その切っ先が天井のライトの光で光り輝いた時、彼は、シーフは高らかにこう宣言した。その時の眼は怒り狂っていた時とはまるで違う、そう、濁っていた水が透き通るように綺麗な水になったかのように彼の眼は光り輝いていた。

「さあ！ 悔いのないように決着を着けよう！ 正々堂々と、自らの業のみで！」

その宣言が終わりと同時に俺達はほぼ同時に地を蹴り、剣を交えた。

第二十話 紅葉流派（後書き）

矛盾、誤字脱字などがありましたら報告よろしくです。

第二十一話 改心

「はあああああああ！！！！」

「らあああああああ！！！！」

鋭い踏み込みから自身の武器を全力で振るう。どちらもエンチャントが切れている状態での戦い、だが全くの一進一退の攻防。お互いの力はほぼ互角。

「紅葉流派 反撃の構え」

攻撃を避け、相手の武器に自らの刀を打ち当てて上に反らして、その隙に胴体を切りつける。という、謂わばカウンターである。だがこの構えが外れれば大きな隙ができる、そこに防御ができない状態で攻撃されれば一溜りもない。だからこれは相手が攻撃をしてきて、尚且つその攻撃を避ければ大きな隙が生じるものであれば、もはやこの構えの格好の的である。

「くっ！！」

短剣を上を反らされ、大きな隙が生じたが、無理矢理身体を捻って刀を避ける。が、完全には避けきれなかったので腹に浅い傷を負ってしまった。俺はそこに素早く反応し、再び刀を振るう。

しかし、それはシーフも予想していたのか短剣を何とか上手く使って防御する。だが、防御には成功したものの、それ以上体勢を変えられることが出来ずに地面に身体を打ち付けてしまう。鈍い痛みが当たった所を中心に走るが、これぐらいで怯むわけには行かない。

俺は追撃を開始した。

地面に仰向けに倒れている状態のシーフに情け容赦無く刀を振った。まずは胸、斜めに軌道を調整された刀はズバツと勢い良く、シーフの薄く黒っぽい服を切り裂き、その刃は胸にまで届いた。

「ぐっ………！　クソっ！」

切られる痛みに一瞬苦痛の表情をしたが、またもや切り掛ろうとしている俺を直ぐ様認識して、手に持った短剣を振るって軌道をずらして難を逃れた。だが安心して居る時間はない、今は早急に体勢を立て直さなければ危険だ。

そう考えたシーフは、刀の起動をずらされて前へ倒れ込む俺の足元に向かって前転をした。俺の股をくぐり抜けて素早く立ち上がった。その姿は野生の獣を連想させた。俺も同じくそのまま流れに身を任せて前転をし、体勢を立て直して立ち上がった。

………。しばらく辺りを沈黙が支配する。俺とシーフは互いを睨み合い、攻撃の機会を待った。そしてその数秒後、シーフが先程切られた胸に痛みを感じ、苦痛に顔をしかめながら一瞬、ほんの一瞬自らの切り口から出血している胸をチラ見した。

だが、ここは見逃さない。いや、父さんにどんな一瞬の間でも見逃さないように毎日のように稽古をつけられていたからだろう、俺がその一瞬に反応できたのは。案外俺って、中々に化け物じみてるな。普通の人間にや出来ないことをいとも簡単にこなす、紅葉流派継承者の人間ってのはみ〜んなこうなのかね？

そんな事を頭の隅っこで想像してみる。だが身体は既に攻撃のモ

ーションに入っている状態だ、そしてシーフは隙を突かれて若干だが反応が遅れた。よし、これは好都合だ、攻撃が成功する確率が上がった。

「せいっ！」

振りかぶった刀を一気に下へ振り下ろす。それとほぼ同時に甲高い金属音が鳴り響いた、そして今度は鋭く尖った金属が宙を舞い、地面に落ちる。

「なっ！？」

シーフが驚きの声を上げる、驚くのも無理はない、何故なら俺は切ったものはー

「僕の短剣が………両断された………?」

ーシーフの持つ短剣だったからだ。武器を両断されたシーフは理解ができない、と言った表情でその場に立ち尽くした。そして口を開いて、俺に向かい問答をした。

「………これは情けのつもりなのか？ 僕は君にとって戦う価値もないと？ そう言いたいのかい？」

俺はその言葉を聞き、鼻で笑った。どうやらコイツは戦いに夢中で他の事に気がついていないようだな、なら、俺が分からせてやるう。

「フツ、情け？ 戦う価値もない？ どちらも違うな。俺はただ早めに代わりの決着を着けただけだ、さっさと終わらせねえと引き分

けになっちまうからな……」

「……一体何を言って……ああ、そういう事か。気がつかなかったよ、あまりにも夢中になりすぎてた。普通は分かることだったんだけどね」

そう言って、名残惜しそうに半分のみとなつた短剣を地面に投げ捨てて両手を挙げるジェスチャーをし、その言葉を言い放つた。

「タイムアップ。降参する、僕の負けだ」

その直後、試合のタイムアップを告げる音が甲高く会場内に響いた。長かったようで短かった、そう思わせる戦いが遂に中途半端な結果で終わりを迎えてしまった。今度会う時、その時はもう一度真剣勝負を申込みたいところだ。

会場は前回とは異なり、より大きな拍手や歓声で包まれる。判定の結果はシーフの降参により、俺達の勝ちとなった。もちろん、拍手や歓声が一際大きいのは決着が着いただけではなく、今日のこの試合で予選が終了となつたからだろう、それに明日には準決勝・決勝が予定されている。なので、恐らく試合の決着と予選の終了により一際拍手喝采が大きいのだろう。

俺はふと、ステータスを開いてみる。午後七時、もう日は暮れて夕食時だ。……何だか、それが分かれると無性に腹が減ってきたな。後で何か食べるか……。

ふう、と溜め息を一つ吐き、刀を鞘にスツと収める、すると途端にどっと疲れが押し寄せてきた、多分ロクに休んでいないから今まで溜まっていた疲れが押し寄せてきたのだろう。今日は明日に備え

て早めに寝るとするかな……。

白衣のシワを整え、肩をぐるぐると回していると。不意に、英介の事を思い出した。先程回復はしておいたので心配は要らないだろう、でも俺は念の為に、と想いフィールドを見渡した。すると、二つの物体が視界に入った、それは壁に寄り掛かって居る英介と魔法使いだっただ。

だるい足を動かして英介の元に向かう、その後ろにはシーフも着いてきた。足を動かし続け、英介の元にたどり着くと、思い切り両頬を引っ張ってやった。

「ふあ、ふあんだあ!？」

突然の激痛により飛び起きた英介が面白い発音で喋る、だが俺は別に爆笑するでもなく、グイグイと両頬を引っ張り続ける。

「何だじゃねえよ、何時の間にやられてるんだよ。もうちょい耐えるよ、こっちは大変だったんだからな」

「あひゃむあるきやらふあにやしちえ〜!」

謝るから話してー! と言いたかったのだろう、恐らく。仕方なく両頬から手を離してやると、英介は直ぐに真っ赤になった自分の頬を摩こする。余程痛かったのだろう、少し涙目ながらにこちらに訴えかけてくる。

「うっ、もう少しマシな起こし方は無かったの……?」

「無い」

「酷い！ 悪魔！ 鬼！ バカやろう！ ……あ、ごめんなさいすみません許してくださいもつ言いません！！」

何喰わぬ顔で即答すると、何故か罵声を浴びせられたので復讐の意味を込めて掌てのひらに火球を作ってニヤリと口の端を釣り上げて薄く笑う。

「燃やすぞ？」

「マジでスンマセンしたあああああ！！！！」

するとお得意のジャンピング土下座で俺に頭を下げた、動きといい、フォルムといい、完璧な土下座だ。まあ、今日のところは許してやろう。今日は機嫌が良いからな。今日はな。

「まったく、賑やかだね。君達は。もう少し落ち着いたらどうだい？」

不意に後ろから男の声が掛かる。振り向いてみるとそこにはシーフが立っていた。ファサツ、と髪をかきあげるシーフ、その姿は如何にもな感じのナルシストのようだ。コイツ貴族か何かじゃないのか？ 何というか……まあ、そんな感じがうっすらとする。これは予感だが。

お前の所為だ、と言わんばかりに俺は英介を睨みつける。そのとき、シーフの後ろから何かがひょっこりと顔を出した、あのヤンデレ魔法使いだ。だが、何故だかその顔は申し訳なさそうに苦笑いをしている。しばらくじっと見ていると、魔法使いが口を開いた。

「え、えつと……そのう……ごめん」

「はい？」

丁度タイミング良く英介と言葉が重なる。そりゃあ、唐突に謝られたら誰だつてこんな反応をするはずだ。俺達も例外じゃない。俺達二人揃ってポカンとしていると、再び魔法使いが口を開く。

「あ、あの時はキー君がケガしそうになって……それで気が動転しちゃって、あの時はどうかしちゃってたんだろっね。でも普段はあんな事しないんだ、自分が言うのもなんだけどね」

「……それで、僕らを殺すつもりで攻撃した事を謝りに来たつてわけだね？」

英介が静かに口を開く。それに少しビクツとなりながらもコクリと一度頷く魔法使い、シーフはそれを見守っている。

「……何だ、そんな事だったのか。いいよ、僕らは気にしてないし。それにヤンデレっ娘は守備範囲だ！ なぁ誠？」

グツと親指を立てながら俺に同意を求める英介、俺はそれに対し一つ賛成、一つを訂正した。

「ああ、そうだな。ヤンデレっ娘は俺の守備範囲じゃないけどな」

「誠はシスコンだもんね」

その直後、英介の顎あごに俺のアップアが唸りを上げてクリーンヒットする。ガスツととても良い音がした。もう少し強めた方が良かった

たか？ と、俺は地面に倒れていく英介を見ながらそう思っていた。

「で、まあそういうことだ。気にすんな。んじゃな、ラブラブカット
プルさんよ」

顎を抱えて悶えている英介を他所に、俺は別れを告げて歩きだした。何歩か歩いたとき、後ろでシーフが俺に向かって声を張り上げる。

「次会うときは決着を着けよう！ それまで誰にもやられないこと
だ！」

それを聞いた瞬間、自然と口の端を釣り上げてニヤリと笑みを浮かべているのが自分でも分かった。何処の漫画のライバルだよ、と思わせるようなセリフだ。だけど、一人くらいはそんな奴も居たほうが良いかもしれないな、ライバル的な存在ってやつがな。

ピタリと足を止め、くるりと振り向く。まだ英介が顎に両手を当てて転がっていた。俺はシーフを見る、あつちも同じように俺を見る。そしてお互いの視線が合ったとき、俺達はニヤリと笑い。言葉を口にする。

「それは俺のセリフだろ？」

「警告さ。僕が君に会ったときに既に倒されてました、なんて事になりたくは無いだろ？」

「それも俺のセリフだ」

「……まあ、お互い負けることは許されない。気を付ける

ことだね」

「そいつも俺のセリフだ」

「……………君、さっきから同じことしか言っていないけど、それは僕をからかっているのかい？」

「……………」

「凶星かよー！」

漫才でもしているかのようになってきた、そろそろこの辺でやめておくか。俺は一つため息を吐き、シーフに視線を合わせてから言葉を紡いだ。

「じゃ、次に合う時まで負けんなよ」

「君もね。それじゃ」

俺達は同時に背を向けて歩きだした。けれど英介は未だに悶えていた。シーフと魔法使いと別れた俺は疲れを癒すために、エーリと合流してから何か食べる事にした。今日は夕食を食べてから直ぐに寝よう、疲れが溜まっていてかなり身体が重いしだるい。

コキコキと首を鳴らしながら俺は一先ず控え室に行って武器を置いてくることにした、英介をフィールドに一人残して……………。

余談だが、その後英介が置いて行かれた事に気が付き、全力で追ってきた。後で公衆の面前でジャンピング土下座をしたので、仕方なく許し。合流したエーリと三人で近くのレストランに向かった。

第二十一話 改心（後書き）

矛盾、誤字脱字などが有りましたら報告よろしくです。

第二十二話 思いがけぬ出来事（前書き）

ちょっとgodgodになってきたので、急遽準決勝などをすっ飛ばしてイベントを進ませました。

第二十二話 思いがけぬ出来事

「俺達は武闘大会を棄権する」

その日の夜、俺は部屋に皆が集まったときにそう告げた。もちろん、英介がどうして？ と言わんばかりに反論をする。

「棄権って……何でさ？ あと二回戦えば僕達は優勝できるのよ」

それに続いてエーリも反論をする。

「サイトウさんの言うとおりですよ。どうしてですか？」

理由は分かっている、だけどこれは俺の問題だ。二人を巻き込むわけにはいかない。だがそれでも俺は武闘大会を棄権してこの問題を解決したいんだ。自分勝手だとは思っている、だけどそれほど俺にとってとても重要な事なんだ。

「……実はさっき、ぶらぶら歩いていたら情報屋のシャドーに会ったんだ」

「シャドー？ アイツに？」

「ああ、それで話があるって言うから聞いてみたんだ。で、ここが重要なんだ。俺が召喚された城、フィンシア城に新たな勇者が召喚された、ってな」

それを聞くと二人共驚いた表情をした。そうだろう、勇者を召喚

したばかりなのにまた次の勇者を召喚したというのだ。それは驚くだろう。

「それでな、その勇者つてのが黒目黒髪、美人。ここまではいい、恐らく日本人が召喚されたんだろう、でもな、その勇者の名前が……ミサキ・キシベ……」

「っ!?! それって美咲さんじゃないか!?!」

英介は座っていた椅子から立ち上がり声を張り上げた。

「そうだ、特徴も完全に一致している。俺は早く姉さんに会って安心させてやりてえんだ、だから武闘大会は棄権する」

「わ、分かった。それじゃあ早く馬車を……」

「待て。その必要はない」

その言葉の続きを俺は遮る。英介は訳が分からない、といった顔をする。エーリは必死に考えているが、まだ分かっていないらしい。

「俺とエーリには、この転送クリスタルがある。まず最初に俺とエーリがこれを使って城下町に行く、そしてフィンシア城へと向かう。英介はすまないが後で来てくれ、一刻も早く合わなくちゃいけないんだ」

転送クリスタルを強く握りしめる、待つてくれよ姉さん、もう少しで会えるからな。俺は胸の中で姉さんの顔を想像した、あの笑顔をもう一度見てみたい、もう一度姉さんに会いたい。

「……話は分かった。それじゃ、僕は先に武闘大会の棄権を伝えて、馬車を探してくるよ。……早く行って美咲さんを安心させてやってくれ、彼女の心の拠り所は君だけなんだ」

英介はそう言ってから部屋を出た。アイツには感謝している、俺がいない間に姉さんを支えてくれていたんだ。俺だけが心の拠って言ってるけど、姉さんは多分お前の事も頼りにしているぞ？ 前にそんな事を言っていたからな、姉さんもお前の感謝している。

「よし、エーリ。早速外に行って転送クリスタルで城下町まで行くぞ。準備はいいか？」

転送クリスタルと言えば、あの時冒険者ギルドで貰ったアイテムの中にあつた奴だ。一度だけ、初めから設定されている場所に一瞬で飛ぶことができる。そのため、重宝されており。一部では数十万の値が付く程だそうだが、それを無料で支給してくれるって事は、数多くて有り余ってるか、かなりの太っ腹なのだろう。

「はい。私は大丈夫です」

コクリと頷いて答える。今思えば、エーリは何時も文句の一つも言わずにやってきてくれていたな。今度何か奢ってやるのかな？ 何時までもこんなんじゃないな。俺はそう思いながら部屋を出た、その後をエーリが続いた。そうして俺達は会場の外へと向かった。

「よし、ここで良いだろう」

会場を出て、空からの月光が薄く辺りを照らす夜の街へと出た。今俺達が居る場所は、最初の通った門の近くだ。夜だというのに街道は人々で埋め尽くされている、ここが活発な街だという何よりの証拠だ。

けれど、今の俺には時間を遅らせる邪魔にしかならなかった。今の俺には時間に関わる些細なことさえも苦痛に感じる。分かりやすく言ってみれば、早く帰りたいのに放課後に残って居残りをさせられているようなものだ。

「エーリに建物内じゃダメなのか？」と聞くと、この街では禁止させられているらしい。何でも、強盗などが部屋に閉じこもって転送クリスタルを使われると、何処に行ったかが分からなくなるからで、外では許可されているらしい。

転送クリスタルは転送時に、設定されている場所の名前を言わないと転送できないみたいだ。何故かは、これはさっきの逆で、外なら人も居るから誰かが必ず場所を聞き取っているからだ。

「転送、フィンシア城・城下町」

俺とエーリは掌てのひらに握った転送クリスタルを天に掲げ、転送場所を言う。するとどんどん身体が光り輝く粒子の粒となっていく、最後は夜空へと消えていった。そうして俺達はフィンシア城・城下町へと急行していった。

真っ白な視界がやがて薄くなっていく、今まで感じていた浮遊感
は既に無くなっていた。身体感覚が戻ってくる、そうして俺はゆ
っくりと閉じていたまぶた瞼を開いた……。

そこは一度来たことのある、城下町の冒険者ギルドの中だった。
しかし、中には誰一人として居ない、無人だ。更には物音一つしな
い、何かあったのだろうか？ 俺は転送が完了したエーリと共に、
一度ギルド内を見渡してから、誰もいないのを確認すると、首を傾
げながら外へと出た。

「……………何だこりゃ？」

「人が……………」

俺とエーリはポカンと口を開けて佇む。外に出たは良いが広い街道には誰一人として居ない、クローラクロスとは大違いだ。何の声も聞こえてこない、物音もない。ただ聞こえてくるのは何時も通りの風の音だ。

数秒してから、俺達はこの状況が可笑しい事に気が付く。いくらなんでもこんな人が通らないのは可笑しい、何かのイベントで何処かへ集まっているのか？ とも考えたが、やはり誰も通らないことに違和感が募る。

「大方、イベントか何かで住民が出払ってるんだろう。……行くぞ、モタモタしている暇はないぞ」

「は、はい！」

俺は堂々と街道のド真ん中を歩く、それにしても誰もいないな、一体何があったのだろう？ 俺は黙々と無言で歩き続けながら考えた。

最初に来たときにはもつと活気で溢れていたはずだ、それが誰一人として姿を現さないとはな……。何だか不気味だな。確かこういう静まり返った街の事をゴーストタウンって言うんだっか？ この状態の街はまさにそれだ。

冒険者ギルドの中は冒険者達で溢れ、街は住民で賑わい、活気が有った。今通り過ぎたアーケードだって買い物客で通る広い道すら狭く感じた、けれど道は誰一人として歩かない。アーケードの店は全て空いていた、その代わり、本日は休業です。と書かれたプレートがカウンターの上に幾つかポツンと置かれていた。

そうして俺達は宿屋ホリーブスを通り過ぎる、外からは確認できないが、ここも恐らく誰も居ないのだろう。

更に歩き続けて数分後、俺達はフィンシア城の裏口へ続く道の前に着いた。もう直ぐだ、もう直ぐに姉さんに会える。

俺は前にフィンシア城で引き起こした事件などスツカリ忘れて、自然と足を進めていた。最上級魔法メテオによる十数人の抹殺、これが世間で許されるはずがない。けれどグリード・フィンシア王は事件を引き起こした発端である俺を殺そうとはしなかった、これまで暗殺者が来たことはない、後ろから着けられているような感じもしなかった。

ということは、あちらにとっては俺達は完全に眼中にないらしい。他の所だったら暗殺者を送り込んで、俺達は今頃亡き者になっていることだろう。けれど、兵士を十数人も殺されて何の追撃もないとはな……。今になって考えてみると可笑しい点だ。

しかし今の俺にはそんな事は眼中になかった、ただ足を動かし続けるのみ。黙々と歩き続け、会話もない。聞こえるのは俺とエーリの足音と、道の横にある木に留まっている小鳥の囀りのみだ。

俺達は歩き続けた、そうして数十分後、漸く城の裏口が見えてきた。けれど、その裏口の扉は少し空いていた。まるで俺達を招き入れるように、ほんの少しだけ空いていた。

俺とエーリは旅の最初の地点となったフィンシア城を眺めていた、しかし、それで俺達は気が付くことはなかった。道の横に少量の血痕が地面にこびり着いていたことを……。

「……………よし、誰もいないな。入るぞ」

裏口の扉を開くとき、俺はハッと冷静になり前にここで引き起こした事件を思い返していた。そうして兵士に見られると面倒なことになる、と思い。慎重に中へと入っていく事にした。

裏口を抜けた先には、メテオが残した傷跡が今だ残っていた。まだ草がちやんと生えていないし、あつたはずの木が無くなっている。城壁はちゃんと修復されているようだ、俺達がここを立ち去った後に修復作業をしたのだろう。

慎重に城の中に入る為の扉に近づくと、そうして後ろにエーリが居て、周りに兵士が居ないのを確認してからゆっくりと扉を開けた……。

「っ!?!? こ、これ……………!」

「おいおい……何があつたんだよ……?」

扉の先には信じがたい光景が広がっていた。おびただしい血、そうして血の海に沈んでいるのは複数の兵士達。一人は身体をズタズタに引き裂かれ、一人は下半身が無くなっていて、一人は首と右腕が欠損していた。

辺りに濃い鉄の臭いが充満している、一体ここで何があつたんだ？ 目の前の惨劇にどうしようもない不快感を抱きながらも慎重に前へと進む。

死体達を過ぎると、そこからはまさに地獄の光景がさらに広がっていた。民間人が死んでいる、それも兵士と一緒にだ。女子供、年齢共に関係なく死んでいる。中には顔がぐちゃぐちゃで判別できない死体さえあつた。

何故ここで民間人が死んでいるのかは分からない、ただ言えることは普通じゃないということと無差別に殺されているということだ。

自殺したならもつと小数人で済むはずだ、それに自殺したのなら顔がぐちゃぐちゃになっていたり、手足が欠損しているなんて事はないだろう。首を吊つたり、手首の動脈を切断したりして死んでいるのが自殺というものだ。それがこれだ、明らかな殺人だ。

けれどどうやってこの人数を殺害したんだ？ 凄腕の剣士が乗り込んできたのなら別だが……でもそうになると、そいつは明らかに精神が異常だ。

「……………」

エーリもこの惨劇を見て顔を青くしている、真っ青だ。かくいう俺もこれには流石に堪える、さつきから吐き気が治まらない。これ以上ヤバイのが見えたら確実に吐いちゃう。

そう思い、血がなるべく見えない様に前を向いた瞬間だった。遠くに何か見える、あれは人間じゃない。別の何かだ。

「……………おい、抜刀しておいたほうが良さそうぞ」

「え……………?」

その時、遠くに見える何か俺達に気付いた。そうして背中に着いた翼を開いて、羽ばたかせ、生物とは思えないほどの奇声を上げながらこちらに急接近してきた!

「……………ッ!!!」

「来るぞ! 気を付ける!」

俺達は瞬時に武器を抜刀して攻撃態勢に入った。

第二十二話 思いがけぬ出来事（後書き）

矛盾、誤字脱字などがありましたら報告よろしくです。

第二十三話 フィンシア王国の異変（前書き）

2012年初めての投稿になります。

第二十三話 フィンシア王国の異変

遠方からもうスピードで向かってくるコウモリ型の魔物、それを倒すために俺は刀を振り上げる。そうして刀の範囲内に入った瞬間、刀を上段切りの状態から振り下ろす。すると、素早く反応して避けようとしたコウモリ型の魔物の右翼に当たった。

耳障りな奇声を上げるがそのまま振り下ろし、床に身体ごと叩きつける。そうして一度刀を切り付けた右翼から抜いて、今度は腹の部分に深く突き刺した。また耳障りな規制と共にどす黒い血が吹き出す。少々顔に掛かるが刀に込める力を緩めない。

「エーリ！ 一発ぶち込んでやれ！」

「やあっ！！」

後ろに待機していたエーリが短剣を振りかぶって現れ、コウモリ型の魔物の右翼の根元を捉える。一回では完全に切断できないため、もう一度短剣を振るって完全に切り離す。

「————ツ！！」

最期に一度大きく甲高い奇声を上げて動かなる。まずは一体倒した。さて、もう一体はまだこちらに気付いていないようで、天井からぶら下がっているシャンデリアの先に器用に足で掴まっている、どうやら眠っているようだ。

「くらえっ！ サンダースピア！」

眠っているのを言いことに此方から先制攻撃を仕掛ける。片手から雷撃が放たれ、ぶら下がって眠っているコウモリ型の魔物を直撃した。

「ダブルブレイド！」

奇声さえも上げずに落下してくるコウモリ型の魔物に二つの斬撃を放つ。空中でダメージを食らっている状態なら避けられないはずだ。そうして俺の読みは当たり、斬撃は直撃し、コウモリ型の魔物は奇声を上げずに回転しながら通路の壁に激突した。そうしてベチヤリと嫌な音を立てて床に落ちる、どす黒い血を床に広がらせながら。

「……………終わったか？ それにしても何で城の中に魔物が……………？」

刀を鞘に収め、倒したばかりのコウモリ型の魔物を見て言う。普通はこんな所には魔物は湧かないはずだ、ここに居るのには何か理由が有るはずだ。例えば……………魔物を召喚する魔方陣が誰かが削って城の中に設置したか、それか魔物が自主的にこのフィンシア城に攻め込んできたか……………もしそうだったら早く姉さんに会わねば……………！

「エーリ！ 手遅れになる前に早く行くぞ！」

俺是最悪の可能性を考え、それを回避するために走り出した時だった。不意に後ろからエーリの悲鳴にも似た声が聞こえてきた。

「マコトさん！ 囲まれています！…！」

直ぐに足を止めて振り向く、するとエーリの後ろには魔物の大群が通路を塞いで押し寄せてきた！ ばっ！ と上を見るとそこには先程倒したコウモリ型の魔物が少なくとも数十匹は飛び交っている！ そうして今度は自身の後ろから地響きが聞こえたかと思いい、瞬時に背後を振り向いてみると数々の奇声を上げて魔物が血走った目で俺達に向かってきているのが確認できた。

マズイ……逃げ場を塞がれ、数も魔物が上回っている。これを突破するには少々骨が折れるな……

俺は必死に策を考えた、最も最善の策を。そうして漸く見つかった、けれどその策には大きなリスクが伴う。だが今はそんな事を気にしている場合じゃない、思い立ったら直ぐ行動だ。

「……エーリ、よく聞いてくれ」

俺は静かに話し始めた。それにエーリは小さく頷いた。

「今から俺が突破口を作る、そこを通ってエーリはこの城に有る二階図書室に向かってくれ。そこに黒いロープを纏って大きなリュックを背負っている奴が居るはずだ、そいつは情報屋で俺の顔見知りだ。心配は要らない、兎に角二階にある図書室に行くんだ」

「……はい！」

時間がないので早口で一氣に説明をする。それにエーリはコクリと頷いて短剣を構えた。

さて、さきほど俺が考えついた策ってのは俺が突破口を開いてエーリに図書室に居る筈のシャドーを呼んでもらい、援軍を呼んでも

らう、という策だ。けれど、もし俺が突破口を開くのに失敗でもすると、俺達は恐らく死ぬ。流石にこの数を相手には出来ないからな、広範囲の魔法を使おうとも通路が狭いし、エーリと自分を巻き込んでしまう場合がある。

なので爆発系は使わず、一直線に進む魔法を使って突破口を開く。勿論威力が高いものをだ。失敗は許されない、ここで死ぬわけにはいかない。

「クリティカルレーザー！」

掌^{てのひら}から極太のレーザーを放つ。威力は高いし、何より急所に当たる確率が高いのがこの魔法の魅力だ。

そうして放たれた極太レーザーは一直線に魔物の波に向かって突き進んで行き、魔物達を焼き焦がしながら一本の道を創り出した。けれどモタモタしていると直ぐにその道は閉ざされてしまう。俺はもう一発クリティカルレーザーを魔物の波に打ち込んだ。

「俺の事は気にするな！ 殲滅したら俺も行く！」

作り出した突破口を走り抜けるエーリに向かってそう叫んだ、我ながら何て死亡フラグだよ。エーリは掴みかかってきた魔物を短剣でその腕を切り裂きながら、道が閉じる前にそれを通過することに成功した。

すると何体かがエーリを追いかけて出した、だがそうはさせない。

「お前らの相手はこの俺だ！ アイススピア！ サンダースピア！」

俺はエーリに反応した魔物達に魔法の槍を叩き込む。それが丁度魔物達の背中を捉えた様で、深々と槍が突き刺さっていた。するとその激痛に魔物達が金切り声を上げて倒れる、それが戦いの開始を告げる合図となった。

「アタックブースト！ ガードブースト！ スピードブースト！」

自らに補助魔法を掛けて準備を整える、そして刀を抜刀して目の前の魔物の波に突っ込んでいく。素早く切り伏せ、攻撃の暇を与えない。一匹、二匹と確実に息の根を止めていく。けれどやはり一匹ずつ倒していくのは骨が折れる、ここは一気に肩を着けるべきだ。

俺は補助魔法により強化された身体能力を使って、床を蹴って空中に飛び上がった。空中には既に飛行する魔物が飛び交っているが、いきなり俺が飛び上がってきたことに驚いて怯んでいた。その隙に魔法を唱える。

「ドラゴンスプラッシュ！ サンダースパーク！」

出現した水の竜に激しい雷撃が宿る、そうしてうねりを上げながら魔物達に轟音を立てて突っ込んでいった。直後、激しい閃光と爆音が辺りを支配した。数秒間の間視覚と聴覚が使い物にならなくなるが、俺は手当り次第に魔法を連射していった。そうすればこの魔物達の波なのだから必ずと言っていいほど当たるはずだ、通路が狭くて範囲が広い魔法なら尚更の事。

何発か魔法を手当り次第に打ち込んだ後、ようやく視覚と聴覚が戻ってきた。これで状況が把握できる。俺は恐る恐る自身の両目を開いていった。

「前は全滅したか……でも、後ろの方はまだまだって感じだな。飛んでる奴らは前の後ろも全部撃ち落とせたようだけどな」

俺は後ろで強烈な閃光と爆音に悶えている魔物達を見て、ふうと一度息を吐いた。ここで逃げてエーリを追いかけても良いんだが、殲滅しておかないと後々厄介になりそうだからな。なら、後の為にも殲滅しておこう。

「ファイヤー！」

手を突き出すと、目の前に巨大な火柱が辺りを焼き尽くした。耳障りな金切り声はやがてポツリポツリと少なくなっていく、最後には消えていた。しかし火柱は焼き尽くしてもなおその火炎が収まる様子はなかった、けれどそれは魔物達の死骸を灰へと変えた後に小さくなっていった、最後には消滅した。

俺は警戒を解かずには辺りを見渡す……どうやら、終わったようだ。さてと、姉さんの安否を確認しないと……そう思つて刀を鞘に収め、駆け出そうと足を動かした時に、それは現れた。

「っ！？ 何だ！？」

突如として通路の横にある扉が破壊され、瓦礫が散らばり砂煙が舞い上がった通路にユラリ、と一つの黒いシルエットが浮かび上がった。その姿は砂煙によつてよく見えないが、少なくとも友好的ではなさそうだ。

謎のシルエットは砂煙が舞い上がる通路の真ん中に立ち塞がり、此方を見つめているようだ……それにしても、何処かで

見たようなシルエツトだな．．．．？ 頭の中で似たような姿を思い返してみる、けれどもうちよつと、というところで謎のシルエツトが唐突に喋り出した。その声は低く、酷く不気味だった。

「俺はこの城に二人目の勇者が召喚されたと聞いて、手下を連れて急いで戻ってきたが．．．．．何だありゃあ？ まるでピアノ線が切れた傀儡だ．．．．．まあいい、二人目の勇者は使い物にならんようだしな、先に一人目の勇者であるお前を始末するとしてうか。なあ？ “ジャック”？」

砂煙が晴れ、漸く相手は姿を現した。黒いローブに大きなバッグ、そしてフードの奥でキラリと光る怪しい眼光。そう、俺の前に姿を現したのは．．．．．

あの時冒険者ギルドで俺と出会い、クローラクロス大都市で開かれる武闘大会の情報を提供してくれた情報屋、名前以外全て謎の人物であるシャドーだ。

「．．．．．姉さんには手え出してねえだろうな？」

俺は低い声で問い掛けた。

「まだ出しちゃいないさ、けど、お前を始末した後に殺すつもりだな。流石に魔王様も勇者が二人いたらお手上げらしくてね」

シャドーは両手を上に挙げてそのジェスチャーをした。俺はその仕草が酷くカンに障った、だがキレル程じゃあない。

今シャドーが言った魔王様という事から、恐らくコイツは魔王の手下、魔王の軍勢に下った人間だ。コイツは俺が召喚された一人目

の勇者だと知って、俺にあの時接触してきた。で、俺を始末しようとしたがそこに二人目の勇者が召喚されて先に二人目を始末することを優先した。そうして、俺をここから離れさせている間にこのフインシア王国に攻め込んできた……つまり俺は上手く誘導されていたって訳か。

「……殺すのは俺達、勇者だけのハズだろ？ 何で何の罪もない民間人殺してんだよ、人殺してる俺が言える事じゃねえけどよ」

「ジャック、お前は分かってないな。簡単な事だろう？ 考えても見る人間なんて魔王様にとってはゴミみたいな存在だ、そんなのがうじゃうじゃ居たら気分悪いだろう？ だから殺すんだ、掃除と同じさ」

「はっ、よく言うな。てゆうかお前の様なゴミみたいな奴が魔王軍に居るのは場違いなんじゃねえか？ 魔王も落ちぶれたな」

「お前ら人間の方が場違いだろう、グランアースが誕生してからはこのフローリック大陸全土は魔物の地だったんだぞ？ そこを人間が侵入してきたんだ、魔物を殺してまでな。誰だって腹が立つだろう？ 自分達の土地に見知らぬ奴らが仲間を殺して入り込んできて、拳げ句の果てにはそこに住み着くんだけ？」

「お前が何億年前の話をしてるのはかは知らねえが、俺達は今現代に生きてるんだぜ？ 関係無いだろうがよ。それに土地を取り返せなかつた魔王はどうなんだろうな？ 初代の魔王は領地を取り返すのを失敗して、その次の魔王は欲張って他の領地の奪還、で失敗。それがずっと今まで続いてきて今の魔王は何なんだ？ 世界征服止まりか？」

「クッククツクツ……お前には分からんだろう、魔王様の目的はな。たった一つの世界を掌握したところで持て余した力はどうしようもない、ならもつと使う場所が必要だ。ということは……」

ここまで俺達は反ギレ状態で、声をお互いに低くしながら挑発気味に言葉を放った。だんだんとコイツと話している内にこめかみに青筋が浮かび上がってくるのがわかる。シャドーも同じだろう、互いにそういうように挑発しているのだから。

そうしてシャドーがこれまた挑発気味に放った言葉、理解は簡単だ、けれど口にするのが難しい、いや恐ろしい。子供が言えばバカバカしい、神が言えば神々しい、魔王が言えば……そこに有るのはただの恐怖だ。

「まさか……複数の世界を掌握しようって言うんじゃないやねえだろうな？」

俺の反応に、シャドーは鼻で笑い、そしてフードの奥に有る目をギラつかせて口を三日月を連想させるように吊り上げて言った。恐怖の言葉を、絶望の言葉を。

「そう、魔王様の目的は複数の世界を掌握することだ。しかし魔王様の持つ力は強大だ、我らはそれに憧れ着いてきた！ もう直ぐ、もう直ぐ始まるのだ！ 魔王様、いや魔王軍の進軍が！ まずはこのグランアースを掌握するために動き出すのだ！ 勇者を一人でも殺せば計画は進行する、だから今ここで貴様を殺す！」

第二十三話 フィンシア王国の異変（後書き）

矛盾、誤字脱字などがありましたら報告よろしくです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1597w/>

錬金術師の魔王討伐

2012年1月6日02時48分発行